
ネトゲエの世界よ、ようこそ！(仮題)

ReiLei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトゲアの世界よ、ようこそ！（仮題）

【Zコード】

Z1926Z

【作者名】

ReiLei

【あらすじ】

2032年もあと2週間を残すばかりとなつた頃。

翌週に控えたクリスマスに浮かれる東京都心、池袋に突如として『イグドラシル世界樹』がその威容を現す。

頻発する魔物の現出、反社会的プレーヤーにより繰り返されるテロ行為、世界は安定を失っていく。

全ての始まりは世界最大のVRMMORPG、『The WORLD』を動かしていた未知の箱『System Yggdrasil』の突然の暴走。

ゲームと現実が融合した奇妙な世界でプレーヤー達は奔走する、かも知れない。

2次創作ではあつませんので、いずれタイトルを変更すると思います。

TS要素を含みますのでご注意ください。

主人公は最強ではありません、むしろ周囲が強いです。

2011/01/13 : 土田で一区切り?

その日の朝も、随分と冷え込んでいた。

朝8時過ぎといふこともあって気温はいつものように一桁前半。そもそも日中帯ですら一桁になることはない、そんな日が続いている。

この部屋は分厚い断熱材や2重窓などの北国も真っ青な過剰装備。しかし、暖房を入れていないのでから、それなりに寒さには強いはずなのに外と大して変わらない程度に寒かった。

暖かな廊下からドアを開けた途端に流れだしてくる冷気に彼女は身を震わせる。

肩下で切り揃えた、今時珍しいロシのある黒髪。

猫のような少々つり目気味な目が性格に反して、キツめの印象を与えていた。特徴らしい特徴のない、それでも可愛いか可愛くないかと言えば、それなり以上には可愛い部類に入る。それなりに恵まれてはいても、贅沢を言えば『もう少し、しおらしい顔立ちのほうが良かつた』と、彼女はそんなことをいつも思つ。

そして、どちらかと言つと穏やかな性格の父親に似て、大人しい印象の兄を羨ましく思つ。

「せめてタイマーくらい入れておきましょう……」

HACONが付いているところに、とともに活用されていないことを嘆ぐ。

ベッドの上に無造作に置かれているリモコンを操作して起動する。流れだしてくる暖かな空気が心地よかつた。

「兄さん、いい加減起きなさいよ。聞いてる?」

彼女の声に反応して、ふかふかの羽毛布団がもぞもぞと動く。

「あと10分……いや30分」

彼女はまどろみの中で毛布に包まれて、お約束のように咳く声にただ呆れる。

聞き慣れているようどこか違和感のある、いつもよりどう見ても音程の高い声に奇妙な違和感を感じ取る。結子の兄である悠早は男性としては少々音程の高い声が特徴であった。しかし、毛布の隙間から漏れる声は、それよりも更に高い。

まるで、女性のような澄み切った柔らかな聲音。それは割りと彼女にとつては聞き慣れた声。

「なんで伸びるのかなあ……って、え？　え？　うん？　あれっ？」

彼女の目が羽毛布団と毛布の隙間から覗いている、余りに長く、
淡い青みがかつた銀の髪の存在を見つける。

明らかに日本人のモノではない髪。

それも恐らく、女性のものだと彼女は断言できた。

「…………えっと、これはどう理解すればいいのでしょうか？」

頭をフル回転させても思考がまるで追いつかない。

彼女は様々な可能性を思い浮かべては、それを片つ端から否定していく。

(まさか兄さんが女人の人を連れ込むとか……それはないです、うん)

それじゃマンガやラノベじゃあるまじし、と思考を打ち消す。

(でも、さつきの声って……ないない、ありえない、ありえない)

その声は明らかに聞き覚えがあった。

いや、むしろよく馴染みのある声。毎口のよつこ、下手をすると現実時間よりも遙かに長く聞いている声。高すぎず、低すぎず、派手さはないけれど、澄んだ不思議と良くなれる優しい聲音。相変わらず無駄な凝り性だと最初は思わず笑ってしまった記憶すらもあるそれ。聞いているなぜか癒されてしまつような、そんな声。しかしその可能性は彼女は真っ先に否定していた。

それは常識的に何よりも有り得ない。

まるでゲームかマンガでしか起き得ない、そんな荒唐無稽な話。

「ゆい、10時までには起きるよ……」

悠早はスロー再生するよつこそれだけ呟く。
そんなどらしない様子に盛大に溜め息を吐く。

(いや、今すぐ起きよつこ……むしろ呪引き出すべき?)

彼女は大きく息を吸う。

そして吸い込んだ空気の全てを一気に吐き出す。

「兄さん、起きなさい!…」

怒鳴り散らす小つるさこ母親のように声をあらげる。

そして同時に約束のように掛け布団と毛布の隅を掴み、バサッ
という小気味良い音と共に安住の地を奪い取る。勿論、申し分程度に引き剥がされまいと言つ抵抗もあった。

やややかな抵抗も全く無意味である。

「ひやつー?」

まだ冷たい外気に触れて、なんとも可愛らしい声が漏れる。

結子はベッドの上で文字通り猫のように丸くなっている、そんな様子の割りと見慣れた『兄』の姿を微笑ましく思つ。そして、『どうしてこうなつた?』と問い合わせる。

その疑問に対する答えはどこからも返つてこない。

人間驚きすきるとかえつて冷静になるらじー。

彼女はそんなことを考えながら、兄であつたものの頭から細く長い指の先へ、髪の先、爪先までを繁々と眺める。

不健康なほどに白い肌は血管すらも浮いて見える。
長い髪の色は全体としては銀。

強く光を浴びている部分は淡い青紫。

朝日を乱反射して不思議な輝きを放つ髪に思わず見とれる。

(相変わらず無駄に可憐い……じゃないって)

結子は何度か深呼吸する。

ずこぶんと細く小さくなつた肩を揺すりながら叫ぶ。

「…………え、え、えーっと、とりあえず起きて、どうなつてるんですか?」

「ゆーい…………朝から騒がないで欲しいんだけど。
低血圧にはこの寒さは辛い」

「そう言つ問題じゃなくて……非常事態、Hマージョンシーカー、メーテー！メーテー！」

別に今日は労働者の日ではない。

「うむむこから……脳に響く」

悠早はと詫ひと呻きながら枕に顔を深く埋める。

そしてモゾモゾと手で結子の手を払いながら、行儀悪く奪い去られた毛布を足で引き寄せようともがく。

すると長い髪が乱れ全身をくすぐるように蠢く。

「ゆーい、髪くすぐったいからやめて、ほんと」

結子は仕方がない、と呆れ氣味に肩から手を離す。

「だーかーら……」

寝返りをうち、2度寝を決め込もうと悠早は身体を動かす。

そんなことをしている間にも妙な違和感が積もって、彼の思考に警鐘を鳴らす。声の高さ、全身に触れる髪の感触、何よりもベッドがいつもよりも随分と広く感じられること。

それが彼を眠りから覚まし、思考を急速にクリアにしていく。

「…………ん？ あれ？ へ？」

悠早はムクリと重い身体を起こす。

ずいぶんはつきりとしている意識に比べて、目覚めを拒否しているような重い瞼を擦る。周囲を見渡し、飾り気のないデジタル時計で今日の日付と現時刻を確認する。

小さく一度だけ頷く。

そのまま視線を天井のシーリングライトから本棚へと這わせる。

最後にロッカーの扉の姿見を見て固まる。

何度も瞬きをして田を「シ」と擦る。

「…………え」

啞然とした表情のまま、頬をつねる。

そんな兄の様子を見ながら結子は窓の外へと視線をそらす。

「えっと、何これ？」

「だ、か、ら、メーデーだって言ひてるじゃないですか……」

一人の会話はそこで途切れる。

ただ、鏡の中にはファンタジーの世界からそのまま飛び出してきたような美少女がいた。

美人というにはまだ幼さの残る、そんな可愛らしい顔を歪ませて。

田が覚めたら『女の子』になっていました。

そんな異常事態にも関わらず、一人はそれなりに落ち着いていた。少なくとも泣き喚くことも、錯乱状態になることもなければ、オロオロと混乱してしまつようなことも不思議となかったのである。むしろ、いつものように濃く入れたアッサム茶葉を使用して、シンモンで香りづけしたロイヤルミルクティの香りを愉しみながら、悠々と軽食を摂る位の余裕は持ち合わせていた。

悠早は背が縮んでしまったためにかなりダブダブになってしまっているパジャマ姿のままで、何をするわけでもなくブランチと洒落込んでいる。

結子も一人がやっているネトゲの掲示板眺めながら阿鼻叫喚の様子を楽しんでいた。

「なんか事実は小説より奇なりって言つのかな、じついつのを」

悠早は2杯目を注ぎながら悠長に、相当他人事の口調で呟く。

「兄さん、ずいぶん冷静ですね……」

「赤の他人になっている、とか気づいたら異世界でした、よりはまだいいんじゃないかな?」

「それはまた素晴らしいプラス思考ですね?」

程度の問題であるが、少なくとも慣れ親しんだ世界である事に彼は安心している。

流石に異世界に放り込まれて、悠々と生きて行けるほど彼は自分が主に精神的な面でたくましいとは思ってはいない。それなりに極一般的な現代っ子、もしくはひ弱な文明人だと、そう認識している。それ以前に、ボーリスカウトなどに参加したこともなければ、頭のオカシイ両親に山笠りさせられて身についたサバイバル能力なんでものがあるわけもなく、そもそもアウトドア系の人間ですらない。どちらかと言えばインドア派の『オタク』である。

外見が変わったという程度なら、まだ耐えられる範囲の問題であった。

むしろそれなりに『慣れ親しんだ』外見であるのだから違和感は皆無といっても良かつた。

「でも、掲示板を見ると、同じような状況の人沢山いるようですよ?」

「そう」

結子はそんな『兄』の様子を見ながら恨めしく思っていた。

彼だけこうして『ゲーム世界』の外見を手に入れたというのに、

彼女はと言えば何も変化がなかつたという事実。彼女自身、別に今
の容姿が嫌いなわけではなく、それなりに気に入つてはいる。これ
以上を望むのは贅沢だという思いもある。

それでも彼女が望む姿を実現した姿が現実でも手に入ればよかつ
たのに、とそう思つてしまふ。

そしてそんな思考をしている自分に呆れて溜め息を吐く。

「神様つて不公平……」

無意識のうちに言葉が漏れる。

「それで、ゆい。今はどひなつてる?」

余りにもスレの流れが早く、着いて行くのもやつとと言つ状態。
それでも、断片的な情報から彼女は今起きている事象を整理して
いく。

「TWには昨日の午前2時頃から接続不能になつていて、運営は緊
急メンテナンスだと言い張つてるそうで」

「緊急メンテナンス……ね?」

「はい、緊急メンテナンスらしいです」

悠早の得た容姿はとあるゲームのキャラその物であった。
そのゲームは通称は『TWO』又は『TW』と呼ばれる。

『The WORLD』

それは『真なる異世界を体感する』を謳い文句にしている世界的
に人気の高いネトゲ。

そもそも世界中の100万を超えるプレイヤーが一つの世界を共有

すると、この2031年現在においても非常識と言われるほど
の規模を誇るVRMMORPGである。圧倒的な空気感とリアルさ、
規模などどれを取つても他の同種のゲームからは頭一つ二つ以上抜
けた存在。

同時接続者数は最大で168万人を最近記録し、未だに増加を続
けているといふ。

プレーヤー数　有効アカウント数　は全世界で5700万人
と公称されている。

システムの概要は全て非公開であり、多くのエンジニア達がこの
ゲームのインフラを実現するための構成や規模などについて熱い議
論を交わしている。その結論として『現在のコンピュータ技術では
不可能』と言う結論に達すると言われる。

だからこそ、それを動かすサーバは『オーパーツ』とまで呼ばれ
る事すらある。

「Jの状況じゃなければそれで納得したんだけど……ね？」

二人は昨日、大規模なシステムアップデートがあつた事を理解し
ている。

そして、こんな状況でなければ大規模アップデートにつきものの
『バグ』もしくは『不具合』への対処のための『緊急メンテナンス』
で誰もが納得しただろう。

実際にはどう考えてもそれでは収まつていない。

ゲーム中のアバターの容姿が現実に反映されている異常事態、有
り得ない状況。

少なくとも誰もその明快な原因は知りようもない。

「ですねえ……」

「ある意味不具合には間違ひなさそうだけど……でも、美味しい」

彼は暖かな紅茶を、今という時間を精一杯に満たす。

結子は窓に映る彼女自身の姿と、変わってしまった兄を見比べて小さく溜め息を吐いた。

そのままタブレット端末へとそつと視線を戻す。

深夜2時。

普段は静かなオフィスが突如として、文字通りの意味で戦場と化していた。

鳴り響く電話と次々と上がるアラートの発する警告音に、彼は頭を抱える他ない。

一昨日の数年ぶりのゲームエンジンの刷新を含む大規模アップデートの後、何事も無くいつものようにバグ一つ、問題一つなく極めて安定して動作していた。

サービス開始以来、人為的なミスを除けば何一つ問題の発生しなかつたシステムの突然の暴走。

それも今では完全に制御を失い、事態は刻々と悪化の一途を辿っていた。

僅か30分前、突如システム管理者コーナー、つまり全システムにアクセス可能なroot権限の喪失。

それに続く、正体不明の多数のモジュール、機能の起動。

それが何を引き起こすか、根本的に何を司っているのかを誰一人知らない。

そもそもマニュアルすらも存在しない。

「それこそパンドラの箱でも開いたか……クソッ」

男は右手で拳を握ると、デスクにドンという強い音と共に叩きつける。

彼は30半ば、エンジニアとしては正に円熟期。

このゲーム、『T.W』こと『The WORLD』の設計・開発

から携わり、今ではインフラ部隊を率いるリーダーとして多くの部下を指揮する立場。社内ではゲームのインフラについては誰よりも詳しいと、俺にわからないことは他の誰にもわからないと、そう自負していた。

しかし同時に、彼はこのシステムについて『何も知らない』のもまた事実であった。

それを誰よりもよく理解していた。

「一体、何が起きた…………柳沢！ そつちはどうだ！？」
「どうやってもroot権限を取れませんよ……それどころか数分前からログインすら出来なく！」
「西沢リーダー、フロントは電源を強制的に落としたと報告が入りました！」

その報告に一息つき、思わず肩から力が抜けかける。

しかし、直ぐに気を引き締め眼前に広がる数枚の有機ELモニタへと向かい直す。

「普通の機材なら電源ボタンを落とせばそれで終わる話なんだが……忌々しい」

彼はサーバルームの奥深くに鎮座する箱の姿を思い出す。

一般的なサーバ機器であれば、最悪の場合は電源ボタンを長押しするなどして強制シャットダウンを走らせることができる。それすらも出来ないような状況であれば、最終手段として電源コードをすべて引き抜いてしまえば そんな事態はまずありえないが それで良い。

実際に一般的なサーバで構成されていたフロントエンド系、つまりWebやログインと言ったサーバ群は電源コードを全て引き抜くことで停止させた。常識的に考えれば有り得ないことであったが、

何故かシャットダウン系の命令を一切受け付けなくなってしまった
いたための非常措置であった。

これで新規にユーザがゲームへとログインすることは不可能となる。

それだけでは何の解決にもなっていない。

しかしゲーム本体を動かしている機材を止める方法を彼は思いつかなかつた。

（だから俺はあんなものを使うのはやめておけと最初に言つたんだ
……言わんこつちやない）

TWを動かしている機材は一般的なサーバ機ではない。

それは出自不明、そもそも本来何に使われるべきもののかすら
もわからない。

それ以前に、そもそもこの時代の人間の知識の及ぶ範囲のモノで
すらもない。

宇宙人や未来人の未知の道具。
この時代にあり得ざるモノ。

人に過ぎたるもの。

オーパーツ。

そう呼ぶのが最も相応しいモノであった。

「原始人にライターを与えたようなものだな……ハハハハハ

彼はただ、そう自嘲するしかない。

その様子を不審がった部下の一人が憔悴した表情で話しかける。

「西沢さん、あとはイグドラシルを落とせば……」

「不可能だ……あれは落とせない」

「…………はあ」

「今だから言うが、あれを落とす手順・手段は一切存在しない」

その言葉の意味を『理解出来ない』と言う表情と共に周囲の動きがピタリと止まる。

最初期からのごく一部のメンバーを除けば、中枢部であるそれにについて知るものは殆どいない。

誰もが、それが何であるかすら知らずに触っていた。
それが現実だった。

「どういう事ですか？」

「そのままだ……あれば人知の及ぶよつなものじゃないんだ」

その表情には次第に諦め、達観が混じりつつある。
彼から見れば、このゲームＴＷは正に奇跡だった。

そんなモノがこの6年と言つ長期に渡つて何の問題も起こすことなく動作していたのだから……それを奇跡と呼ばずに何と呼ぶだろうか。

大きさで言うと50センチ四方よりも小さい程度の純白の小箱。
精々10㌢サイズに收まってしまう程にコンパクトだ。

その中に、それは想像を絶するような……世界中のすべてのコンピュータが束になつても足元にも及ばない様な膨大な演算能力が秘められているモノ。彼、西沢がその昔に簡単なプログラムで計測してみたところ最低でも現在最速のスーパーコンピュータよりも三桁は高速という目を疑うような結果があった。

彼の予想によれば、それは『世界シミュレータ』の類である。

そう確信できるほどに仮想世界を実現するために都合の良い機能が揃つっていたのだ。

「それは説明になつてません」

「全くだ」

「…………」

いつもは冷静な、頼りになる上司の顔に浮かぶ複雑な表情が周囲をより惑わせていく。

そしてまるでそんな彼を嘲笑つかのように、システムは彼の画面”だけ”に次々と様々なメッセージを送つてくる。ただ彼を焦らせ、混乱させ、冷静な思考力を奪うように、そんな悪意すら感じさせる。明らかにそれがすでに彼の手を離れたということを見せつけるように見える。

膨大なメッセージが止まつては流れ、投げれては止まり消えていく。

断片的に得られる情報だけでも未知の機能が次々と起動している。

(見せつけているのか……わざわざ、人に判る言葉に直してまで!)

!

この機械は彼らの希望に応え続けてきた。
あれが欲しいこれが欲しいとそう願えば、その機能が実現される
魔法の箱。

薄々ながらもそれが生きている、もしくはそれに意思がある事は少なくとも彼は理解していた。

「あの噂は本当だったんですか?」

「…………」

長い沈黙を破つて、ゆっくりと言葉を紡ぎ出した部下に彼は何も答えない。

むしろ、沈黙をもつてそれを肯定する。

「あれがどれを指すのかは知らないが、間違つてはいなうだうな

急激に場の喧騒が、波が引くように周囲に伝染し収まる。

キーボードの打鍵音が止まり、喧騒が静まり、鳴り響く電話の音だけとなつていく。

彼はこの会社が潰れることは間違い無いだうと、そんな些細な心配をする。そしてこの場にいる人間の大半は散り散りになつて行く。中には再就職が難しい人間もいるだうと、それも心配と言えば心配であつた。

そんな顛末な事を憂いでいる彼自身に呆れる。

「すでに”あれ”は制御を離れた……何が起こるかわからない」

彼はそう呟いた。

平穏を破るように携帯の着信音が鳴り響く。

キッチンで洗い物をしている結子も珍しい着信に興味をひかれて振り向いている。

結子から見て悠早は人付き合いが嫌いで、友人も少なく、ワイワイガヤガヤと大人数で騒ぐのも好まない。知つている兄の友人と言えば片手でお釣りが来るほど、電話をかけてくる相手となるとそれなりに名前が絞れてくる。

事実上は両親と一人だけだと言つことを理解している。

そして恐らく両親のどちらかだうと彼女は想定する。

二人が小学校に上がる頃から、揃つてSE、つまりシステム・エンジニアをしている両親は家に帰つてくるのも遅くなつた。それだけならまだしも、デスマに巻き込まれて忙しい時などは月に数回し

か帰宅しない、下手をすると1ヶ月家に戻らない事もざらだ。

電話すらも滅多にかかることがあることがない。

たまに電話があると思うと『今タイにいるけどお土産何がいい?』

と言つことも過去にあった。

暫く帰れないといつて、3ヶ月も顔を見ないこともあります。

悠早が高校に上がるまで、そんな根っからの仕事人の両親に代わりに一人の面倒を見ていたのは今でも健在な祖父母であり、めったに顔を見せない両親よりもそちらに一人は懐いていた。父方も母方も祖父母は揃つて一人のことを心配し、気遣い、可愛がっていた。

一人は典型的なお爺ちゃん、お婆ちゃん子であった。

なかなか見事な放置プレーと祖父母の教育のお陰で、一人は揃つて家事は一通りできるようになつていて。

それでも実の両親には違いなく、それなりに彼らの生活の心配はしていた。

(今はどこの居るんだろう……)

結子はどこの居るかもわからない両親の事を思い出し、ふと心配をする。

電話に出るのが心底嫌そうな悠早の表情に苦笑いが漏れる。

「誰だらけ……？」

盛大に溜め息をつきながら、悠早はめんどくさそうに手を伸ばす。そして、表示されていた名前に思わず後悔して、自然と連続で溜め息が漏れる。

「……って、洋一か」

高校の同級生であり、悪友といつても良い間柄であり、それでも

中学以来不思議と縁の切れる事がなかつた……そういう意味では彼にとつては数少ないリアル友人の一人。しかし、その縁を間違つても大切にしようとは彼は思つていない。

電話に出るべきか出ないべきかとぐるぐると思考を巡らせる。どうせ『アキバ行くぞ!』とか、そんな程度のものだらうと予測する。

名前を聞いた結子もその瞬間に興味を失つたようで、洗い物へと戻つてしまつ。

「なんだ、高柳先輩ですか……」

「残念な洋一でした……」

悠早はそう呟くと遠慮無く、問答無用で通話を拒否する。これも彼にとつてはよくあることに過ぎない。

「兄さん、友達無くしますよ?」

「何でこんなに人間関係つて面倒なんだらうね……」

「さあ、どうしてでしょうね?」

結子もまた同じようにあまり人付き合いが好きな方ではない。そもそも、八方美人に愛想を振り撒けるような器用な性格を彼女もしていない。

争いは同レベルの間しか起きない、そんな言葉を思い出す。

「いいけどね……」

悠早のつぶやきを遮つて、再び着信音が鳴る。

発信元は先ほどと変わつていない。

「高柳先輩がわざわざ拒否されてもかけてくるつて珍しいですね?」

「なんだううね……」

彼も諦めて通話ボタンを押す。
直ぐに耳元で響いてきた凶太い声に、何度も何度もわからぬ溜め息が漏れる。

(何が楽しく朝からこいつの声を聞かないといけないのか……)

穏やかな午前中の時間の全てが、その存在のお陰で台無じといつ氣分である。

『おい、悠早。今すぐ池袋のライブカメラを見ろ!! とんでもないことになってるだー!!』

「洋一……朝からうるさい！」

その女性らしい高い声に沈黙が訪れる。

『つて、お前誰だよ!? あれ、結ちゃんか?』

「悠早ですけど、何か?』

『…………はあ?』

「もういこよ、もう

説明するにはおろか、話すことすら億劫になり、容赦無く通話を切る。

そのまま、すぐに機内モードを設定し全ての通信を遮断する。
その様子をしっかりと見届けた結子は、何かがツボに嵌つたらしくクスクスと必死に笑いをこらえている。
遊佐に近づくと、それがいかにも自然に隣に腰を下ろす。

「先輩はなんて?」

「池袋のライブカメラを見ろって？」

「？」

何かが起こつているらしいという嫌な予感が一人の意識に共通して流れる。

平常時ならばすぐに再生が始まるような、大して画質も良くないライブカメラの配信だと言うのに一向に再生が始まらない。自宅側の回線には余裕があると言うのに、動画の読み込みに随分と時間がかかる。それ以前に配信サイト自体が余りにも重たい。

サーバ側の回線に相当な負荷がかかっていることは明らかだった。不安が募つていく。

「……！？」
「……えつ？」

二人は揃つて息を飲み、目を見開く。
言葉が出てこない。

余りにも衝撃的な光景がカメラを通して映しだされている。

街が壊れしていく。

玩具や大昔の特撮のセットが破壊されるように、いとも簡単に、ゴミのようにビルが崩れる。大量のコンクリートが碎け、雲一つない空を粉塵が舞つて覆い尽くしている。この時代から30年も昔の歴史の転換点となつた、一人にとつては歴史でしかない911同時多発テロを思い起こさせるような光景。

余りにも無力で無慈悲な破壊行為。

映画か何かとしか思えないほどの非現実的さ。

その下にどれだけの人がいるのかなど想像もつかない。

数千、下手をすると死傷者、行方不明者は万を超えるかもしけない」と二人は思う。

しかし同時にそれは創造的でもあった。

コンクリートで塗り固められた都市を粉碎し、成長を続ける巨大な影の存在。

恐ろしい速度で大地に根を張り、天高く伸びようとする大樹。二人はそれがなんであるのかを瞬時に悟る。

「世界樹《イグドラシル》……？」

補足

・デスマ

各所がいい加減な工工業界では、プロジェクトの終わりが近づくと特によくある事。

自家に帰ることも出来ず、現場に缶詰、月労働時間は300近くなることも？

開発系の人たち特に頑張れ、超頑張れ。

現在時刻は10時半過ぎ。

東池袋の外れに突如として出現した世界樹は成長を続けていた。言葉のままに、街を呑み込みつつある。文明の象徴である近代都市を日々と破壊しながら、天高く伸び続けている。ニュースによれば既に一帯は警察により封鎖され自衛隊の派遣が決定。多数の死傷者・行方不明者が出ているなど、現場は悲壮な状況らしい。

その高さは1000メートルを超えたとの報告すらある。

今ではスカイツリーを遥かに抜いて国内最大の高さに達している。その偉容は、二人の住む港区の高層マンションからはつきりと眺めることができる。

そんな異常事態にも二人は意外と冷静だった。

と言つよりも、慌てたところでどうにもならないと言つのが正しい。

TWについては未だに運営会社からの公式なアナウンスはない。問題のゲームサーバはダウンした状態を保ち、運営会社と揃つて不気味な沈黙を貫いている。今はネットワーク的にも完全に切り離されているようで、『Ping』コマンドを始めとした手段で外部から現状を確認する事は不可能。少なくとも一般的な情報収集の手段は皆無の状況だと言つ。

この異常事態にも関わらずスレを見れば『早くメンテ終われよ』やら『運営、金返せ』やらと中毒者達の罵倒雑言が溢れている。人様達にとつてはゲームの方が遥かに重要なんだ、と悠早は苦笑いするしかないが、それもよくある事である。そんな彼は彼で、ノートPCに向かつて、ゲーム内の友人・知り合いと連絡を取っていた。リアル友人よりもネットの友人を重視する辺り、本人は気づいていないようだが大概である。

それは結子も大差はない。

「兄さん、そ、れ、で」

「うん?」

結子は悠早の肩越しに画面を覗き込む。

昨日までなら現実ではまずあり得ないような距離感。

それでもＴＶの中であればごく普通であつた、そんな近い距離。友達同士と言うには少々近すぎ、そっちの人だと思われるかも知れない。兄妹と言つよりは、仲の良い姉妹 容姿はどうみても姉妹には見えないが と言う表現がわかりやすい。

結子にはいさか季節外れのシトラスの香りが心地よかつた。これも慣れ親しんだモノ。

「今日はどうなったんですか?」

わざと耳に息を吹き掛けるように話しかける。

結子から見ると、悠早が耳元で囁かれるくすぐつたさに必死に耐えているのが面白い。もつとも、このくらいでは悠早は ゲーム内で 慣れたもので反応に乏しいのが彼女の機嫌をほんの少しばかり悪化させる。

視線が会うと、悠早はクスリと微笑んで肩をすくめる。

「えっとね……、ティッシュとメイさんは来るって言つてたかな?」
「ほうほう

彼女もよく知る名前が上がる。

どちらも仮想世界内では、あまり一緒に遊ぶと言つわけではないけれど、悠早を通してそれなりに仲が良い。

何の話かと言えば、やけくそ気味の『OFF会』である。

要するに『リアル容姿が変わっちゃった記念』と言つたりの産物。

あまりの危機感のなさに結子は呆れるしかない。

しかし同時に何ともこの面子らしいとも思い、辛氣臭くなつても仕方無いしねと一人で納得しておく。

彼女から見て『暇潰し』と言つ点では悪くはない。

「二人とも外見変えられたみたいで、楽しそうだつたかな？」

「はあ……それはまた怨めしいくらいに羨ましい話ですねつ！？」

今の私なら念力だけで人が殺せそうな気がしますよ、はい」

結子の瞳は微笑んでいるようで笑つていない。

静かな闘志、いや私怨に満ちたオーラに悠早の表情がこわばる。

「眼力じゃ？　つて、そんな睨まなくても……」「はあ……」

彼女は溜め息をつくと、身体を悠早の背に預ける。

さりげなく左手を首に回していくところに彼は恐怖を感じていた。

今この彼の身体は、仮想世界の身体能力が反映されていれば決して非力ではないはずである。現実的に考えれば細く柔らかい身体の何処にそんな力があるんだとツッコミが入るのは間違いない。

そもそも力が反映されているかどうかと問われれば、不思議と確信を持つて『YES』と彼は答えられる。何故か身体がそう教えてくれるような気がしていた。

それならば、同時に結子もまた同じように仮想世界の力を得ている可能性が高い。

そうなつた時は必然的に『Stamina』スキル値が低い悠早が不利である。

「ほんと神様つて不公平ですよねえ？」

「やうだねえ……じゃなくて、別にゆいは可愛いから良いじゃない？」

「私は欲深いんですねーーー！」

結子の声が耳を通して脳に響く。

悠早はつぶさざつした表情に変わつている。

「わかつたから、わかりましたからー！」

「兄さんは、な・に・も・わかつてませんつーーー！」

結子は首に回された腕にゅっくつと、加減しながら、それでも確実に力を込めていく。

少しでも楽になろうと、あわよくば振り払つて抜けようともがけばもがくほど状況は不思議と悪化していく。ある人に仮想世界で習つた拘束技術であるが、悠早が彼女がそんなものを使えることなど知るよしもない。次第に身体が動かせなくなり、固定される。

仮想世界ならまだしも現実だからこそ恐怖。

悠早は次の行動をシミュレーションするが打開策は思い付かない。そんな表情が彼女の加虐心を刺激する。

「でも月曜からどうしようとか、色々悩みはあるんだから……」

「そーですねーーー」

「ティッシュも会社辞めよつかとかぼやいていたし」

「それは大変そうですねーーー」

結子は抑揚のない棒読みで返し続ける。

それに合わせるように、更に首の隙間が埋まっていく。

力加減を間違えれば窒息、下手をすると首が折れかねない。

「すゞい棒読みだね？」

「気のせーです、オー、勘違い、みたいな？そつこない感じです」

気がつけば頬と頬が触れ合つほどに一人の顔は近い。

悠早は仮想世界でも滅多に無い程に近い、何だからで可愛らし
い妹の顔を直視できず、ふわふわと視線だけを彷徨わせる。数秒か
ら數十秒に一度、視線が交差するたびにニンマリと肉食動物的な微
笑を浮かべて、何かを伝えたそうにしているのが見える。

そう、彼女はただじっと悠早を見つめ続けている。

彼女が何を考えているのか、何が言いたいのかはさすがに読み取
れない。

(なんだらう…… WISください)

どうやらテレパシーとか、そういう系統の便利な能力はないらし
い。

結子は小さく溜め息をつくと、痺れを切らして言葉を発する。

「ところで、私も着いていいんですか？」
「ティッシが一緒にあいでつて言つてたよ」

あまりのどうでも良さに、悠早の肩から力がガクリと音を立てて
抜けていく。

そんな彼の気も知らずにゆい子は鼻歌すら口はずさみそうなほど上
機嫌になり、満足そうにコクリコクリと頷いている。しかし、悠早
からするとその動きが頬ずりされているようで、何ともくすぐった
くて仕方がない。

それでも、ある程度わかつてやつていいだらうと振り払わな
い。

余計なことをして機嫌を損ねるような度胸は彼はない。

「あの人は話がわかりますね、うん」

拘束が緩まり、締め付けが優しく包みこむように変わる。

(むしろ拒否する理由がないんだけどね……)

悠早は、自分たちがなぜ彼女……ティッシュと呼ばれる人物とこうも仲が良いのかよく疑問に思う。

片や”いろいろな”意味で世界中に名を知られた、ギルドやクランに属さない独立系のトッププレーヤーの一人。方や、平均よりは上だけれど、それほど目立つような事もない一般人。普通に過ごしている限りは接点らしい接点はまず生まれない、それ程の実力差がある。

同じ学校のプレーヤーや昔からの知り合いには七不思議の一つとまで評される。

(ああ、でもSOPのローンどうなるんだろう……流石にリアルマネーで払えとか言われたら泣くよ)

どうでもいい事を思い出しながら、そんな社会人をしている彼女の言葉を伝える。

彼女も相当な甘党好きだと云つ事は、近しい間では有名だった。

「なんか美味しい甘いものでも奢ってくれるそつだよ?」

結子の表情が、相応の女の子らしく微笑む。

二人は否応なしに散歩がてら歩いていた。

何時ものよつとメトロでわれりと出られたるだらうと思つていたのが、

大きな間違いの始まりであつた。現実にはメトロは一部の線は終日運休が早々に発表され、他の線も運行を止めている。

その原因は言つまでもなく世界樹の現出である。

東池袋駅近くに突如現れ、急激に成長し巨大化したそれは周囲一帯を破壊し尽くしたと言つて良い。凡そ半径1キロメートル圏内が被害に遭い、その中心数百メートルは文字通りに『消滅』の被害を受けている。それは地下空間も例外ではなく『根』によつて有楽町線と副都心線は路線の一部区間が崩壊してしまつた。丸ノ内線も線路が激しく変形する被害を受けている。

他のメトロ路線は直接的被害はなかつたが、念のために運行休止。JRも山手線他が止まつてゐる。

そのため首都圏の交通網は大混乱の様相を呈している。

内閣は非常事態を宣言したもの、有効な対策が打ててゐると言つには程遠い。流石に都心のど真ん中を食い破つて大樹が生えてくる自体を想定しろと言うのも無理があるので多少は同情の余地がある。死者・行方不明者は休日だつたこともありまだ少ないと言われてゐるが万を越えるのは間違いない。負傷者はその数倍にも達するだらうが、治療する人手は圧倒的に足りていない。

被害総額は計算するのもアホらしい額だらうと言える。

ここまでの大混乱は2021年の関東震災以来だらう。

そんなわけで二人はオフ会集合場所の有楽町駅まで歩く。

そこまでしてオフ会がしたいのかと問われれば答へは、どちらかと言えば『NO』であつた。その割りに何故こうして出歩いているかと言えば、他にやることを思い付かなかつたと言つことが大きい。一人とも何もなければ、休日は仮想世界にいることが多い。

そのTWがサービスを停止しているので、要するに暇なのである。

わ「すごい目立つている気が……まさか外人の気持ちがわかる日が来るなんてね」

悠早の今の容姿は否応なく日本では目立つ。

可愛らしい顔立ちに、不思議な輝きを放つ淡い青みがかつた銀髪。サイズの合っていない大きめの濃紺のPコートの下からはチエック柄のプリーツスカートと言う出で立ち。そこから黒のオーバーニーソに覆われた足が伸びる。コートに覆われて判りにくいが、ほどよく細いすらりとしたモデル体型 結子との身長差がほぼ足の長さの差、と言う現実が彼女の気分を悪くしている など目立たない要素の方が少ない。

中でも、やはり髪の色がもっととも人目を引く。

「その見た目で人目を引かない方が、それはそれでおかしいと思います」

「そなんだけれど、あまり理解したくない」「ちょっといい気味です」

結子はそう言って頬を膨らませ、ブイッと顔を背けてしまう。どう見ても服の持ち主 コートだけは悠早の物だ である結子本人よりも、凡そ似合って様になっているのが彼女としては面白くない。あらかじめ解っていたことだけれど悔しいものは悔しい。
着替え 主に下着的な意味で を手解きした時に見た光景が彼女の脳裏に浮かぶ。

仮想世界なら下着を含めた着替えなど、ワンクリックであつた。人によつてはそれも含めて楽しんでいるようなプレーヤーも割りといたようだが、悠早にはそう言う趣味は特になかったらしい。現

実ではそつはいから四苦八苦した挙げ句に結子に教えを乞ひに行つた。

物自体はインベントリに全てでは無いが、装備品は多少は残つていたので 口ストしている物も多々あつて、いまいち残る基準が判らなかつた。それを使用した。

ただインベントリの癖に一度取り出したものは2度と収納できない。

引き出すことはできても預けることはできない。

悠早はその半端な制約にこれを『えた何者かに小言の一つも言いたくなつた。

武器とかどうするんだと頭を抱えたが、解決策は浮かばなかつた。

どちらにせよ流石に非現実産だけあつて、染み一つない血管が透けて見えるほどの肌の白さ、きめ細かさが強く印象に残つていた。仮想世界でもあまり身体のラインが出ないような装備ばかりであつたため甘く見ていたが、出るところは出て引っ込むところは引っ込んだ体型には『羨ましい』以外の感想が思い浮かばなかつた。

思い出せば出すだけ、腹立たしさが喉元まで沸き上がつてくる。とりあえず、ハッ当たりだと理解していくても止まらない、やめられない。

結子の心情はそんなところだ。

「…………目が笑つてないから?」
「軽い冗談です、イツツアジョーク?」
「なぜ疑問系…………?」
「気の、せ、い、です」

悠早は一応、妹様の不機嫌の原因は理解してはいた。
だからと言つてどうにかできるような話ではない。
彼から見ればそんな氣にするようなことではないよつて思えるが、

彼女にとつてはそれなりに大きな問題である「感じ」。
感覚の差は埋めようがない。

「はあ……」

「なに溜め息なんてついてるんですか？ セツカク“可愛い”女の子になれたんですから、楽しまないと損ですよ？」「むしろ何を楽しむのか聞きたいんですが？」

結子は待つてましたとばかりに、ニタリと笑つ。

すぐに、それを言わせるんですか？ とても言つたげに頬を赤らめる。

そのまま身を乗り出しつゝ上田遣いで見つめている。

(ないからせ…………たぶん)

悠差は何も見なかつた、聞かなかつたことにして、田を逸らす。

「いわゆる丁うな訳ですから、することなんて決まつてゐるじゃないですか。むしろお約束は消化すべきだと思ひますが、……いかがでしょ？」「

「心の底から遠慮いたします」

強い口調で断言する。

妹様は頬を膨らませてゐるが、敢えて気づかないふりだけでもしてさやかな抵抗を試みる。

「姉様はサービス精神が足りません！ 精進すべきですねっ……！」
「後ろ向きに善処します」

要約するならば『〇〇〇』である。

暫くは彼女の玩具にされそそうだ、と悠早は溜め息を付くことしかできない。

それでも、それで気が少しでも晴れるのなら安いものなのかもしない、などと損得勘定をしてみるが精神的なダメージを考えると微妙なことに気づく。でも、大赤字にならなければいいと希望的観測をしている。

どうやらこせよ前向きに努力し、行動するのは彼の趣味ではない。

「や」はむしろ斜め上方向に飛んでください、是非

それは無理だと、悠早は心の中でツッコミを入れた。
銀座の街はまだ遠い。

01 (後書き)

補足

Pinging : 最も基本的なネットワーク疎通確認コマンド。応答を要求するメッセージを投げて、相手から応答が帰ってきてることを確認する。

SOP : 悠早の武器「Staff of The Prophet - Elaris Almacion」(預言者アルマキナの杖)「の略

WIS : Whisper、れさせき、囁くこと1対1チャット。

なんか妙な略語が出てきたらだいたい装備名かスキル名です。

駅前の個人経営の小さなカフェで物憂げな表情を浮かべている。日本国内の「ごくありふれた光景の中」にあって、彼女の居る窓際の1席を中心とした区画だけは、異質な雰囲気に満ちている。まるでファンタジー世界を周囲1メートル四方だけ切り出してきて、きつちりと日常の一コマにはめ込んだような、そんな違和感、異物感。物静かに何処かを見つめる彼女は余りにも美しかった。

人によっては天上の女神や天使の姿を思い浮かべるかも知れない。いかにも東欧系の美少女といった顔立ちに、瑠璃色の瞳。ウェーブのかかった細く柔らかなロングヘア。

金色に近い色合いのプラチナブロンドを、黒いレースのリボンでポニーテールに纏めている。

そんな華やかな雰囲気の容姿とは裏腹に、その服装は非常に地味だといつて良い。

それこそ、『それなんて喪服ですか?』とでも問われかねない程の見事な全身黒ずくめ。光沢のないゴシック・ドレスのゴスロリではない。の上から、ケープ付きのコートを羽織る。今日はそこまで冷え込んでいないと言つのに、これでもかと過剰なほど防寒装備。

周囲の客達の好奇の視線さえ意に介さないと言つた様子。

世間様の一角が大混乱の只中にあると言つのに、駅前の人通りは平常時のように多い。

そんな通りすぎでは消えていく人の波を、意味もなくじっと観察している。

クリスマス直前の休みであるためか、やたらめつたらと初々しいものから円熟したものまで様々なカップルの姿が見受けられる。彼らの表情は一様に幸福そうであり、中には世界中の幸せを独り占め

とでも言いたげな者も居る。なんだかんだで自分達には関係ない、そんな思考の人間は多いらしい。

もつとも、そんな若者の街の一つは壊滅的打撃を受け、絶賛封鎖中である。

そうでなくとも彼女はとてもではないが浮かれた気分には程遠かつた。

「ほい、つてか……なにを見てるよ?」
「…………うん?」

男が、彼女の前に湯気が立つカフュラテをトンと音を立てて置く。彼女は視線すら動かすことなく、窓に映った姿越しにその声の主を捉える。

その優しい声音に違わない、穏やかな表情の好青年の姿。まあ凡そイケメンの代表、それこそ芸能界に入つても恐らく十分にやっていけるだけの人も羨む美形。それなりながら厭味つたらしさや、鼻にかけているところもなく世の中が不公平という証左とも言える人物。スポーツのイメージで言つとテニス、楽器ならばピアノ、そんなイメージを持つ者が多い。

これで性格やら頭やらが悪ければまだ可愛げがあるのだと、彼女はよく思うのである。

しかし現実には神は2物も3物も与えたようで、トップではないが頭よし、運動もでき、人当たりも良い。性格には若干の難があるが、それでも悪いとか捻くれているとか言つわけではなく、むしろ好印象のほうが遙かに強い。

凡そ、非の打ち所が無いような真人間の見本のような人物。

彼は椅子を引くとゆつたりと腰を下ろす。

「随分とボーッとしてるな、と、ね?」

「色々と考え事をしていただけです」

「そつか……」

彼女の答えは随分とそつけない。

そんな反応を見ながら、彼は思わず口元が緩む。

そして視線を瞳から頬へ、薄い唇へ。小さな耳から前髪、首筋へ、そして流れるようなポーテールの先へと視線を移していく。白磁のマグカップの縁を滑るようにして弄ぶ、不健康なほどに白い肌と指の動き。

彼女はそんな舐めるような視線にも特に反応はない。

「まつ、しかし、現実で見ても思わず見惚れる美人さんだなあ……」

「…………」

その言葉に、これまでと打って変わって眉を顰める。露骨に『不快』と言つ表情を顕にしている。

「あのね、真介……こつ恥ずかしいからそつ言つ物言ひは止めて欲しいわけですが?」

「いやあ、自他共に認めるロリコンの俺でさえありだと認めるぞ」「それは全く嬉しくない高評価ですね……」

彼女の外見は、年齢的には16から17程度に見られることが多い。

多少は幼い雰囲気を残した顔立ちのせいか、立ち居振る舞いや表情によつては更に数歳年下に見られる事もあつた。どちらにしても『少女』というには年を喰い過ぎており、女性と言うにはまだ幼い。敢えて表現するのならば、それこそ『乙女』辺りが適切だろう。とにかく少なくともロリコンという人種のターゲットになることはまずない。

じついう時は怒るべきなのか、嘆くべきなのか、喜ぶべきなのか
難しい所であった。

世間一般的の女性はじつう時にどんな反応をするのだろうと、くだらない思考の海へ沈む。

「はあ……上手くいかないもんだ」

彼、高柳 真介は盛大に溜め息をつく。

「でも世界つてのは不公平だよなあ……俺も外見変えてほしかった」「もつたいないお化けが出るのではないでしょうか?」

彼女は血管が数本切れかけるのを意識しながら言葉を搾り出す。彼が今の外見を嫌つているわけではないが、別のもとに憧れていのをよく知っていた。

胸の前で拳を握つて語り始めると、『また始まった』とうんざりした表情に変わる。

あこがれの銃器がどうだ、男キャラとはじつあるべきだということ論に始まり、美形重視の和RPG批判やら、メカニックがどうだと、話が脱線に脱線を重ねてあらぬ方向に、流されるままに流されいく。結局のところ、彼としてはハリウッドのゴシイ合衆国軍人のようなタイプのほうが好みだということである。

そして、実際に彼らもプレーするTVにおいて、彼はその理想を具現化するように現実の容姿とは似ても似つかない姿をしている。スキンヘッドに無精髭の生えた顔面と身長180半ば、浅黒く日焼けした肌に包まれた筋肉ムキムキの大男。機関銃やらRPGやらを扱いで戦場を駆け回つても不思議ではないような姿。ゲーム内で古代金属と呼ばれる高性能金属製の鎧を身に纏い、150センチを超える巨大な剣を片手でやすやすと振りまわす。

だからこそ、一見さんの日本人には外国人だと間違ひなく思われ

る。

オタクの話はとにかく長い。

彼女は途中からカフェラテを愉しみながら、適当に相槌を打つて流す。

「でも、俺としてはやっぱ優男よりもゴシイマッチョの方が好みなんだよなあ……浅黒い肌で、いかにもアメリカンなのが」「はあ、もう今さら何も言いませんけどね?」

やつと終わったと、小さな溜め息が漏れる。

真介は語り終えたぜという満足感に満たされた笑みを浮かべながら、砂糖もミルクも一切入れないブラックのコーヒーで喉を満たす。彼は別に通ふつていいるわけではなく、単に甘いモノが苦手なだけである。家ならば緑茶、外ならばブラックコーヒー、場所によつては紅茶、全てをストレートで飲むのが彼の流儀である。
その姿を野蛮人を見下すような表情で眺められているが、彼は全く意に介す様子はない。

なんでこいつは、と言つ彼女の呟きも聞こえていないようである。

「で、優希」

「なんですか?」

「いや、別に口調まで変える必要なくないかね?」

その真介の言葉に、彼女は随分と難しい表情に変わる。

彼女と言つより彼、藤宮 優希の中ではまだ全てに折り合ひがついているわけではない。

彼もまた、今朝始まつた変異に巻き込まれた口であり、仮想世界

内の容姿に知らぬ間に変えられていたので一応は被害者である。
彼は彼なりに考え、朝起きてからああでもないこうでもないと振

る舞いを検討してみて、仮想世界のキャラ時と同じようにしてないと落ち着かないという結論に至っていた。さすがに丸6年以上も慣れ親しんでいるので、急に変えようとするのは抵抗があった。自分自身で作り上げてきた物を叩き壊してしまつような恐怖感があつたといつても良い。

だから可能な限り、それらしく振る舞つていようと決めていた。彼にとつては翻りとどうでも良いことだった。

「気分的なものと言つより、癖ですね」

「……けどな、呼び方はやっぱ『メイ』の方がいいのか?」

「どちらでもいいですよ……そんな些細なこと」

真介は腕を組み、『些細なコトなのか』と真剣な顔で考えこんでしまう。

そこまで呼び方は深刻になるような問題なのだろうかと、小一時間問い合わせたい気持ちが喉元まで沸き上がってきたのを無理やり飲み込む。そのまま、実際に呼ばれる方を脳内でシミュレーションしてみると、どれも微妙すぎた。この仮想世界の姿で居るときにリアルネームで呼ばれるのも妙な気分が抜けないが、現実だというのに仮想世界の名で呼ばれるのもシックリと来ない。

どちらがよいかと言われると、まだ仮想世界の名のほうがと考える。

そこまで考えて、それはどうなんだと否定する。

「そつか、それならメイにしておく」

「そう」

「気分的なものだけじゃ、その方がしつくり来るわ

「そういうものですか?」

「そういうものを」

「……」

優希は喉に魚の骨がつっかえたような、そんなすつきりしない表情をしている。

視線が一箇所に定まらず、頭が左に右にと規則正しく左右に揺れる。そして時折、何度も何度も頷いたかと思うと、すぐに首を小さく左右に振つてそれを否定する。そんな行動を幾度と無く繰り返して、最後に溜め息を吐く。

結論が出ることはなかつたらしい。

真介はそんな様子を微笑ましくも、苦笑いしながら眺める。

「で、メイ的にはどうなのよ？」

「それは、どういう意味の質問ですか？」

「いや、リアルに女になつた気分とか？　一応は大した意味がないんだけど、お約束つていうやつさ」

「あのですね。ここ1年はむしろこちらの身体でいた時間の方が長いんですから……どうも何もないですよ？　あまりの違和感のなさにむしろ笑うしかないほどですからね」

「へえ……つて、やつぱそういうもんか」

仮想世界T-Wは現実世界とは時間の流れが大きく異なる。

多くのプレーヤーに様々な時間のプレーを楽しんでもらいたいと言つ事らしいが、ゲーム内の24時間が現実世界の凡そ4時間半に等しい。現実時間の1日は仮想世界時間の5日半ほどに相当するため、人によつては体感時間的に仮想世界で過ごしている時間のほうが圧倒的に長いプレーヤーも決して少なくない。

それこそ土日にログインし続けていれば、ほぼ間違いなく仮想世界の体感時間のほうが長い。

現実側から仮想世界へはデータを一切持ち込む事ができず、逆にデータを持ち出すこともできない。これが出来れば、仮想世界で勉強やら仕事をしたほうが捲つてしまふなど面倒が起きる可能性を排

除するための措置である。それでも、仮想世界では教師や一部の異常な記憶能力を有する者が、本などを丸暗記し塾や予備校的なことをしているプレーヤーも少數ながら存在している。

運営側も厳しく取り締まるつもりはない事もあり、そういう目的でゲームを始めた者も多い。

ただRMTだけは異常に厳しく取り締まられているのが救いだらう。

どちらにせよ優希などはかれこれ6年にも渡つて慣れ親しんでいる『もう一つの身体』なのだ。

それもここ数年の連續的なアップデートで有り得ないほどにリアリティーも増していた。

それこそ、肌や皮下の肉の質感から産毛の感触までである。

「でも、真介もそりだと思いますが……力が戻りきっていないから妙な違和感はありますよ？」

唯一の違和感は、身体に宿っている力が半端なことである。

今の身体のコンディションでは仮想世界内ほど俊敏には動けず、同じように振舞おうとしても意識に身体がついてこられないのは確実であった。優希はそんな仮想世界の異常な運動能力が必要とされるような事態は考えたくもなかつたが、全く『ない』とも言い切れなかつた。しかし、今何かあつたとしたら恐らく対応できない、そんな怖さを感じている。

それも少しづつであつても、確かにその違和感も埋まりつつある。完全になるまであと一日、そのくらいだらうと予測している。

「なるほど」

真介も似たような感覚は少なからずあつた。

今ならば、恐らく数多くの陸上競技で世界記録を片っ端から更新して回れる気がしていた。

人間としては規格外もいいところの運動能力、昨日までと何も変わらない身体の何処にそんな力が宿りつつあるのかが不思議で仕方がない。それを言い出すと、目の前の『彼女』、その細く筋肉も殆ど無いような身体に秘められた力の大きさのほうがよほど不思議である。

医者や研究者が泣いて喜びそうだと、そんなことを思つ。そして、何よりももう一つの不思議な感触がある。

「あと、俺だと？」

真介はお腹の、ちょうど臍の辺りを我が子を撫でるよつて摩つてみせる。

そこに……、その丁度内側とでも表現するしかない場所に存在する異物の感覚。

実際に何か物質が埋まっているわけではなく、あくまでも感覚的なもの。

「腹の辺りに、辺りに武器があるのがわかるんだ。相棒の武器がさ」

真介の仮想世界T-Wでの相棒である一振りの片手直剣の姿が思い浮かぶ。

それは優希もまた同様であった。

「私もそうですね……真介と違つて2本ですが
「S O EとW O Yか……？」

片方は神器そのもの、もう一方も準神器と呼んで良い高性能武器。

彼女を彼女たらしめていた、昨日まではワールド内で1本しか確認されていなかつた武器。地味な見た目ながら圧倒的な存在感を放つ、性能的に神器というに相応しいその『杖』の姿を真介ははつきりと思い浮かべることができる。

それがあるのならば、不思議と安心することができる。

敵に回られると厄介極まりない性能であるが、見方とできるのなら頼もしいものはない。

相當にドベタな支援プレーヤーであつてもそれがあれば凡そどうにかなつてしまつ。

「正解です」

彼女は柔らかく微笑んだ。

02（後書き）

補足

S O E : おなじみの杖、S t a f f o f E l n i a。燃費
お察して攻撃力UP

W o E : 神器級杖、T h e W a n d o f Y g g d r a s
i l l。治癒能力大幅UP

T h e が付けられている武器がいわゆる神器級装備。

特に頭にT h e がつくものは希少、超レア。

別にサークル内に1本しかないわけではないが、本数は少ない。

優希の服装。

イメージは銀河鉄道999のメーテルでじつだ。

「そういうや、午後はビーフするんだ?」

「少しオフ会に顔を出すつかと思つています」

真介は『は?』と何を言つて居るのか判らないと言つ表情で呆然としている。

折角の美青年が台無しになつてしまつて居るが、それをツッコまないのは優希なりの優しさ アジア的優しさという便利なモノである。

実際に優希が彼の立場に入れば似たような反応を返すだらう事は間違いかつた。

それでも、その場のノリと勢いというものは非常に恐ろしいもので、一瞬の躊躇いもなく『問題ない』と回答してしまつて居た。朝起きて何が起こったのか良くわからないけれど、気づいたら性別そのものが変わつて居た異常事態と、朝方のナチュラルハイな妙なテンションの複合的な産物である。

そして、半時ほど経つてから『何やつてるんだろう』と自問自答していたのは別の話である。

ただ優希としては彼の知り合いの多く 首都圏、23区近郊居住者だけであるが、が、参加を決めていた以上は『参加しない』と言つ選択肢は存在していなかつた。

彼は後悔もしていなければ、反省もしていない。

「ふう……」

たつぶり数分間の沈黙の間に、追加オーダーしたダー・ジンリンの香りを堪能する。

そして、窓ガラスに映る『それなりに絵になつて居る』自身の姿

に満足する。

「おこおこ、こんな時にそんな企画をしたおバカは誰だよ……とて
もじやないが正氣とは思えねえ」

優希は当たり前だ、そんなのは決まっていると言わんばかりに肩
をすくめる。

その『彼女』の姿を思い浮かべながらひつゝ調理するかと、考えれ
ば考えるだけ楽しみが広がる。

彼女は真介の天敵なのだから。

「お馬鹿つて……サイ君がいつ言つてこたつて伝えておきますね？」
「…………誰に？」

2杯目を「ホールテンンドロップまでぬりくつと注ぐ。
ダージリンらしく、マスカットフレーバーの甘い香り広がり鼻孔
をくすぐる。

「誰つて、ティッシュですけど？」

白磁のティーカップを弄びながら優希は淡々と答える。
真介の顔から血の氣がツーと引いていく。

「…………」
「真介？」
「…………」
「生きてますか？」
「や、め、で、く、れ」

真介は消えるよつの声で囁く。

「…………メイ、まだ死にたくないから止めてくれ……」

ガタンと店内一杯に響くような音と共に立ち上がると無駄に大きな声で叫ぶ。

音の大きさもさることながら、『死』という単語に反応して周囲の客の注目が集まる。しかし、それも割とすぐに若いカップルの痴話喧嘩の類らしいと理解されたようで、生暖かい視線へと変わってしまう。傍から見れば中のよい美男美女のカップルに見えても不思議ではない。

次第に他の客たちは聞き耳を立てながら、自分達の世界へと戻つていく。

そんな中で、優希は真介の予想以上の反応に肩を震わせる。

「相変わらず、ティッシュ苦手なんですね……？」

「いや、むしろあれと普通に話をしてられる人間を尊敬する」

「怯えすぎだと思います」

そう言いながらも、無理もないと同時に思つ。

彼女の放つ威圧感や雰囲気、それを引き立てる姿勢と必要以上に恐れられる要素は余りにも多い。ある意味では、仮想世界TWにおいてPKerや廃ギルド以上に恐れられていたと言つても過言ではなかつた。しかし、同時に多くのプレーヤーの目標でもあり、優希にとつては仮想世界において1、2を争うほど付き合いの長い、オーブンベータテスト以来の付き合いの人物であり、戦友であつた。親しい集まりでは『比較的』穏やかな彼女も、外では難しい顔をしていることが多かつたのも記憶している。

その辺りが彼女の印象をトツツキ難くしているのだと優希は思う。実際に、一睨みされただけでプレーヤーが逃げ出すのも日常茶飯事であった。

そして参加者のリストの中のもう一つの名前を思い出す。

「そう言えばユーリも来るって言ひてましたね…………」

「の人もよくわからんな……あれと馬が合つ時点でね」

真介の目は、理解出来ないものを見たよひにあまりにも遠い。

「真介の基準はそこですか？」

優希はただ苦笑いすることしかできない。

悠早は1階にあるカフェの椅子に力なくへたり込む。いかにも慰労困憊といった様子で、表情にも美しさにも影が射しているように見える。

頃垂れ、何度も繰り返し溜め息を吐く。

(なんで、女の買い物つてこんなに長いんだ……)

妹の買い物に付き合わされる度に、彼はそう心底思つ。

某デパートと言つか百貨店?に入つてかれこれ2時間半近くも、様々なフロアに引きずり回されて居たのである。純粹に彼の服と言つても安全をとつて結子と共にできるものに始まり、下着から、雑貨や小物から食器に調理器具、果ては化粧品までである。彼は全力で抵抗して見せたにも関わらず、腕力もとい『Sత』に負けて引きずられていた。満足な抵抗にもならず、何度も転げかけながらずるずると……彼は早い段階で無意味だと悟つて諦めていた。

ステータス的にはStressで悠早が凡そ30で標準的な支援職よりは少し高め、結子は手数重視のAge系だがStress値は70前半である。ざっと2・5倍の差になるが、実際に発揮される力の差となると4倍近くにまで聞く。

文字通りに子供と大人の差がある。

（まあ確かにしないよりは可愛いけど、けど、けど……認めたら敗けじやないか？）

朝とは違つて、薄化粧した自身の顔が映る。

元々がノーメイクだったのを良いことに TWでも化粧はあつたがしていなかつた 、普段ならばまず踏み込むことのない化粧品売り場へと連れ込まれた。様々な香りが混じつた鼻を突く空気に当たられて、すぐに気分が軽く悪くなる。

そこまでなら割とよくある話であつた。

そのままカウンターに座られ、なされるままに意味不明な用語を聞き流しているうちに化粧を施されてしまつていて。元々が色白で、あまり健康的な印象ではなかつたのが、唇に赤味を加えるだけで随分と健康的に見え、印象が変わつている。

彼から見れば何がどうなつたか判らない。

結子は真剣に色々と質問していたが、それが耳に入つているわけもない。

それでも、確かに数割り増しくらいで可愛いことを認めるのはやぶさかではないと言う微妙な心境。これを認めるに何かが終わつてしまいそうな気がしていた。

疲労感の大半は精神的なものに間違いない。

「ああ……疲れた」

そんなお疲れの様子の悠早とは打つて変わって、結子は鼻唄混じ

りの様子。

買ったものは流石に宅配にしてしまったので身軽だ。

「私は全然疲れてなんていませんよ、むしろ楽しかったです。でも、体力的には問題なさそうに見えますけれど、姉様？」

彼女は意地悪そうに言つ。

「主にメンタル的な意味で……ね？」

「姉様は随分と纖細で柔らかな精神をお持ちなんですね、驚きました」

「いや、あのね…………ゆい」

どうして妹にここまで良じようにされているのだろう。と悠早は頭を抱えたくなる。

そんな様子を眺めながら結子はクスリと笑つて、肩をすくめる。

「冗談です」

これからオフ会でケーキを食べると言つたのに、結子はシブーストを口へと運ぶ。

蜂蜜漬けのリンゴと、クリームの甘い香りが悠早を悩ませる。
彼も主に結子や、やたら甘いモノが好きな仮想世界の友人たちの影響で、今ではすっかりスイーツというものに目がない。流石に一人で入っていくような度胸はなく、妹とよく食べに行くほどである。だからと言って、『甘い物は別腹』と言えるほど胃袋は大きくな
い。

今ならいけるかも知れないと思いながら、紅茶だけで必死に我慢する。

結子は知らない間に物欲しげな表情をしている悠早を見て口元が

「やつべ。

「でも、サイズが同じで済むので助かりました」

「戻つても無駄にはならないしね」

「本当に……ああ、わづ、ちょっとだけ恨めしかつたりもしますわ」

「聞こえなーい」

悠早は足元への粘つこに視線を送られてくるのを感じて、何度も首を横に振る。

それに合わせて長い銀の髪が揺れ、乱れる。

「あと一時間と少しありますね」

「このままゆづくつしたいんですけど……」

結子は次に何を見に行こうか、じつじょうかと思考を巡らす。

家の茶葉が残り少なくなつてから買いに行ひ、新しいブレンドを買つてみるのも良いか、何処のブランドにこみづかと紅茶の在庫を思い出す。それ以外にもまだまだ、買つておきたいもの、見ておきたいものは山のようにあつた。

彼女はここでへたつている訳にはいかない。

「だらしないですね……そんなんどうするんですか？」「..」

「そんなんでいいよ……そんなんで」

「……はあ」

結子は仕方が無い思いながらも、醒めた視線で兄をじっと見つめる。

まるで丁度よい玩具を見つけた子供のようなく、そんな表情をして

いるように悠早には見える。

怯える草食動物のように身体が小さくなつてこぐ。

「何で溜め息を…………つー？」

「！？！？」

爆発音と思われる重低音が一人の耳に響く。

それも至近距離だと判るほどの大きさ。

明らかに交通事故による衝突音とは異なり、なにか巨大な物体……杭か何かを地面に打ち付けたようなそんな音であるように悠早は感じた。それこそバンカーバスターでも打ち込むか、地下でトン単位の火薬でも爆発させればこんな音がするのではないか、と彼は思う。

しかし現実にはそんなことは起こりえるわけはない。

大規模なテロによる破壊活動の可能性が悠早の脳裏をよぎる。日本はまだ比較的平和であるが、世界的にはテロ活動は2000年以降は沈静化する様子もない。

むしろより大規模に、より過激になつてきているとすら言われている。

「なんの音ですか……今のつて？」

「何だろう？ 交通事故か何かでもあつたのかなあ…………」

しかし悠早が気になつた事があつた。

交通事故はありえないが、大規模な爆発というには爆風が吹き荒れたようには見えない。

少なくとも窓の外は平穏そのものであつた、そのように見えていた。

それから間を置かずに悲鳴が聞こえてくる。
それは徐々に大きく、多数の叫びへと変わつてくる。

「さあ、見に行きましょー！」

結子の言葉にだらしなくあんぐりと口を開けて固まる。

「すごい野次馬根性だね、ゆい？」

「事件は現場で起こっているんです！　話の肴のためにも、私の知的好奇心を満たすためにも、精神の安寧のためにも是非行きましょう！」

「いやいや、じつとしてしようよ？」

「姉様は私が夜にあれが気になつて気になつて眠れなくなつてしまつても良いと言うんですか！？」

「意味判らないから」

悲鳴以外が収まつたかと思つと、突如としてまるで雷が落ちたような音が連續して響く。

途切れることなく12回、それは最初の1発も考えればテロというには余りにも大規模にすぎない。

それに混じつて聞こえた獣の遠吠え。

「えつと、なんだろ？……この嫌な感じ？」

「さあ姉様、俺この戦争が終わつたら結婚するんだ的ノリで行きましたよー！」

「死亡フラグは勘弁して欲しいね？」

逃げなければ死亡フラグが立つと、そんな予感を悠早は覚えていた。

03 (後書き)

すこし前回の切り方が中途半端ですが気にしてはいけません。
あと、あちこち直しています。

銀座3丁目交差点。

休日でなくとも人で溢れる街の中心。

ほんの20分、いや10分ほど前の日常はそこにはない。

あらゆる人の負の感情が満ちている空間。

存在しているのは非日常的な、非日本的な凡そ平和とはかけ離れた光景。

何処かの紛争地帯にでもいきなり迷い混んでしまったかのような、破壊と殺戮の傷跡が生々しい。砕けてひび割れたアスファルトの路面に、人であつたと思われる肉片やガラス片、コンクリートの塊など雑多なモノが散乱している。肉片に限れば、ちぎれた胴体の破片や、下半身だけの物体、内蔵だと思われるなにか、そして目を見開いたまま転がる生首まで。

恐らく数十名と言う単位の遺体の一部。

常軌を逸した惨状に結子も野次馬根性を後悔する。

「…………あれって？」

しかし二人の視線はそこへは向いていない。

決して現実から目を逸らしているわけではなく、それ以上に衝撃的なモノがほんの数十メートルほど先にある。

今も新たに人を食い千切り、飲み込もうとしている化け物。

陽光を浴びて黒に近い濃紺色に染まつた毛皮に覆われた闇の色の獸。

全高は2階に届くほどで、3メートルにも達する巨躯。2つの頭部を持ち、それぞれが異なつた意匠の角で飾られている。最大の武器はその大きさに似合わない俊敏性、そして前肢から時折覗く鉤爪。1撃でも当たれば命はなく、かすっただけでも大怪我を負うことは

間違いない。

二人はそれを知っている。

悠早の脳内にその情報が流れ込んでくる。

(ヘル・ハウンド…………ランク88以上、それもNMって、おい
!?)

昨日までのVRMMORPGとしてのTWには、他のゲームで言うところの『レベル』は存在していなかつた。

何故ならTWはほぼ純粹なスキル制であつたからである。ステータスすらもスキルの一部であり、ステータス系スキルと技能系スキルをどう配分するかが一つ重要なポイントだつた。そして技能系スキルをどれだけ振り、どのような組み合わせで上げるかによつて、キャラクターの特性が決まる。

それに加えて『資格(Credential)』と呼ばれるものにより、職業毎の専門性が生じる、そんなシステムを採用していた。例えば『聖職者』系資格を取得すれば、聖属性に属するスキル群が出現し、『剣士』系であれば武器種別『剣』の専門スキルが出現し上げることが可能になる。

スキル振りと装備、PS^{プレイヤースキル}が強さを決定する。

レベルと言う絶対的な指標は存在し得ない。

しかし、それだとPTを組むにもあまりに不便である。

凡そその強さの指標として代わりに存在していたのが『ランク』である。上げれば、より高難易度のクエストが受けられる、店売りアイテムが安くなるなどの特典がある。ただし上げてもキャラクターそのものにボーナスがつくようなことはない。純粹に指標としての機能。

4年程度のプレイヤーの平均が80前後と言われている。視界にいるヘル・ハウンドの88は難易度としてはかなり高い部

類に入る。平均的なプレイヤーのPTが挑むダンジョンであれば中ボス程度の強さに当たる。ソロで余裕を持つて挑むなら、ランクで15の上積みが必要と言つ経験則を当てはめると100を越えていないと厳しい。

悠早はランク的には中の上だが、純支援職であるので戦闘力は皆無。

結子は魔剣と言われる高性能武器を持つてすら平均を下回る。
他に人を数人加えて、PTでゲーム内で挑まなければ倒すのは困難であると断言できる。

現状としては、挑めば大怪我は免れず、死の危険性も相当に高い。
さらに悪いことに『NM』 正しくは『Nameless Monster』
『NM』と言い、言わば無数に湧く雑魚ではなく、固有名を持つたモンスターである と略される言わばボスであり、同ランクの個体よりも数段強力である。

「ねえ……兄さん？」

「…………うん、思つてる通りだと思つ

そう、一人で挑んでもまず勝ち目はない。

その時、化け物の上空に円を基調とした直径10メートルにも達する、巨大な魔方陣が出現し始める。TWであればモブの扱う魔法としては上位、プレーヤーが扱える類のモノではない大魔法。魔法攻撃の規模と詠唱時間は慣れれば、魔方陣の大きさと相手のランクと格から凡そは予想することができる。

それらを適切に予測し、判断して適切な指示を与えるのも支援職の役割の一つであった。

右の首が首を持ち上げ、その構成に集中している様子が見える。

「マズイ……」

ヘル・ハウンドの扱える範囲内で最大級の範囲攻撃の到来。

注ぎ込まれる大量の魔力と、完成へと向かう魔方陣が放つ圧力を前に悠早は身を動かすことができない。何かしなければいけない、何をすべきかは判つていても動けない。

ボス戦に慣れたプレーヤーであれば、過剰ダメージによるディスペル 詠唱破壊 を試みるか、速やかに安全圏へと退避する、対魔法防御系バフの使用などの行動をとる。

結局のところ彼は危険性の高いボス戦の経験は少ない。

比較的安全圏での行動が中心であり、ボス戦も最後方からの支援補助に徹していた。

理論・理屈の上では理解していても経験が決定的に足りていない。

「兄さん……！？」

「……………5、4、3」

心臓の鼓動が激しい運動の後のように高くなる。

嫌な、冷たい汗が全身から吹き出す。

「2、1…………来る」

「…………」

獣が吠える。

悠早はとっさに結子を引き寄せ、抱きしめる。

それを合図として、悠早がカウントダウンを終えるとほぼ同時に攻撃魔法が発動する。

魔方陣が一際眩しい蒼い輝きを放つが、すぐに黒い霧に包まれる。そこから放たれる数十本にのぼる光を通さない純粹な黒、漆黒の雷撃。

いまだに輝きを放つ魔方陣を中心に、広がった傘の骨のように四方八方へと破壊を振り撒く。それは大蛇のように蛇行しながら回転

し、コンクリートの建物を切り裂き、アスファルトの道路に深い亀裂を残す。外壁どころか柱までも粉碎され、文明の象徴である近代建築がいとも簡単に、轟音を立てながら崩れていいく。砕けた大量の窓ガラスの破片が降り注ぐ。

拳銃で応戦していた警官がその直撃を受け燃え上がる様子を捉えた。

身体の先端から崩れ落ちるようにして燃え尽きていく。

二人に見せつけるような過剰な破壊行為。

ヘル・ハウンドはTVにおいては『知性の獸』に分類される。それも犬・狼型ではまず目にすることのないランク100を優に超える深淵の狼『Fenrir』、地獄の番犬『Kerberos』を代表とする幾つかを除けば、高い知性と物理・魔法攻撃を兼ね備えた強力な化け物。その絶大な破壊力がもたらす結果に言葉が出てこない。

悠早は左の首が確かに一人を見ていると認識する。
深紅の瞳がいつそうその輝きを強める。

「いや、さ……さすがに」

笑っている、彼はそう感じじる。

(逃げられない……むしろ)

逃げれば広範囲に被害が拡大する、あれは追つてくると言い切れた。

そして結子では到底あれの相手をするには難しい以上、彼が引き受けるしかない。自己犠牲などと言ひ崇高なモノではないが、実の妹を目の前で殺されるのは見たいとは思わなかつた。
これで兄妹仲が悪ければ、また違つたかもしない。

「ゆい、逃げる……。3分、そのくらいの時間は稼ぐ」

「兄さん、なに血迷ってるんですかっ！？ 死にたいんですか！？」

結子は左腕を掴み、珍しく激しい口調で捲し立てる。

戦闘型でない時点で勝ち目はない。

それでも、特に防御支援を核としたスキル、テクニック構成を取つているため、死なない戦いはそれなりに可能に思えた。ただし、どれ程持ちこたえられるかは未知数であつたが。

それでもカップ麺が出来上がる程度、妹一人逃がす時間を確保するは可能だと踏んだ。

その後どうするのかは考へていらない。

「キリエを張り続ければそのくらいはたぶん持つ……はず」

「アホですか、バカですか、さっさと逃げますよ？」

「逃げられなさそうだし……ねえ？」

それまで一步たりとも動かなかつた獣が右足を踏み出す。

悠早は大きく息を吸い吐き出す。

唱えるべき言葉は『システム』が示している。

「System command, summon weapon.
Staff of the Prophet, Elaris
Almacina……」

悠早は獣の瞳を見据える。

体の正面前方数十センチの地点に魔法の青い光を散らしながら1本の杖が出現する。

名は『Staff of The Prophet - Ela ris Almacina』、和名は『預言者アルマキナの杖』。

ゲームのものとは思えないよつた、シンプルなデザイン。

TWにおける武器のデザインはFからAまで順にランクが上がる。ことに華美な装飾が施され、金ピカで宝石を多数あしらつたゴテゴテとしたモノへと変わっていく傾向がある。しかし、不思議とSランク以上……所謂神器、準神器クラスとなると逆にいきなりシンプルで、単純なデザインになることが多い。支援職用の杖の最高峰として知られる『WōYō』と『The Wand of Yggdrasil』などは、真紅の宝玉を埋め込んだだけの樹の枝にすぎない。

彼の武器であるSOPもそんな準神器の末席に位置する武器りしく例に漏れない。

古代金属製の代表である『真なる銀』、ミスリル製の棒の先端に、アメジストのような色合いの宝玉。

飾りと言えば、宝玉を支える二首の蛇ぐらこのもの。

「冗談ですよ……ね？」

「割と本気」

それなりの、この場においては何の力もない人々に比べれば十分な力があつても、足を引っ張る事にしかならない事が確かに現実に唇を噛む。幸か不幸か、彼我の実力差がわからないほど彼女は愚かでもなければ、無謀でもない。どちらかと言えば、TWにおいても前に立ちながらも周囲に守られていたということは理解していた。半端な力、それが腹立たしくて仕方がない。

結子は力なく、兄を引き止めるために掴んでいた手を離す。

「『I』めん……ダメだつたら爺ちゃんと婆ちゃんにはよひじべ

悠早はそれだけを搾り出すと、走りだすと同時に詠唱を開始する。

悠早はモンスターの相変わらずの『タラメ』に、遺る瀕無い気分が湧いてくる。

数十と言つプレーイーでは有り得ないと断言できる数、いくら小型と言つてもこれだけの数の魔方陣が一度に展開されていく様子は圧巻であった。プレーヤーであれば仮想世界の魔法職の頂点に君臨する『魔女』であつても同時展開は精々10個程度と言つたところに過ぎない。

それも余裕綽々といった表情に感じられるのが憎らしかった。

この程度は前座もしくは小手調べ、居酒屋ならばお通しと言つ程度にすぎない。

先ほどの大魔法に比べれば、数は多いものの大したことないよう見える。

魔方陣の単純さから、魔法弾系の攻撃だろつと彼は予測して動く。当たらなければどうと言つことはない。

そんな考えの元に、獣の注意を敢えて引き付けるために遮蔽物のない道路を駆け抜ける。

もし攻撃が当たつた時にどうなるのかはやつてみなければわからぬ。たつた一撃だけで致命傷となるかも知れず、逆に魔法防御のお陰でかすり傷程度にしかならないかも知れない。下手をすれば前に見た警官のように苦しみ悶えながら燃え尽きていくのかも知れない。

要するにやつてみなければわからない博打である。

それでも即死はありえない、悠早はそれだけは断言ができた。

もつと言つならば、そのバフさえ維持し続けることが出来れば勝てはしなくとも負けることもないとまで言えた。

短時間でも膠着状態に持ち込めればそれでいい、それが彼の考え方である。

その間に他の誰かが打開策を考えてくれることに期待するしかない。

「... a c l j e m i l u s n i r . K y r i e E l
e i s o n !」

有効限度ありの絶対防御テクニックが完成する。

ゲーム内における仕様では耐久度、耐久回数のどちらかが無くならない限りは、攻撃から自動でバリアが展開され続けると言う非常に使い勝手の良い防御支援テクニックである。特に高い回避能力があればその効果は絶大で、殆どノーダメージで狩りを続けることすらできる。

使用上の難点はクールタイム　再使用ディレイ　が5分と比較的長い事が挙げられる。

それでも防御支援の中では最高峰と評される優秀さである。

一番の難点は実のところ『取得がめんじくせ』といった感じでぬきる。

(避けられるかね……あの数を)

悠早は追加で無詠唱可能な極めて基本的かつ、小型の支援魔法を準備していく。

幾つかの魔方陣の輝きが強まるのを命綱に攻撃が始まる。

04 (後書き)

補足

Kyrie Eleison (キリエ・エレイソン)

通称はキリエ。Bishop、High Priest用支援テクニ

ック。

武器ランク

S+（神器）、S（準神器）、S-（伝説級）、A-F。

Aランク以上の武器は例外なく『古代金属』と呼ばれる物が素材。

身体の横数センチの空中を純粹な闇色の攻撃が通過する。全面から接近する追加の2弾攻撃の軌道を予測しながら、悠早は綱渡りを続けていた。

(左……右、びみよい)

数本の触手の襲撃を最小限の回避行動で躱していく。

外れた攻撃はすでに原型を留めないほどに碎かれ、破壊の跡が生々しいアスファルトを更に鈍い衝撃音と共に抉る。それなりに強度はあるはずであるが、薄皮を捲るように、余りにも容易に地面には傷跡が増えていく。

それに加えて時折混ざる闇属性の魔法弾。

一帯に漂う錆びた鉄の匂いが、悠早の集中力を乱す。

彼は血の匂いも、その見た目も好きではなかつた。血液検査などは大の苦手で、注射器の中に満ちていく血液を見ているだけで気分が悪くなるほど。そんな彼にとって、この空間は拷問場のような物であつたが、文句を言つても仕方がなかつた。

ただ脳が現実を拒否しようとしているのか、世界から色が失われている。

一面のセピア色の世界が彼の視界に広がっている。

それが精神をまともな状態に辛うじて保つてゐる有様。

ただ機械的に思考する。
身体を動かす。

自身の肉体とは思えないほどに思考と行動が繋がり、一致してい
る。

それを知るわけもなく攻撃は無慈悲に間断なく続く。

数本づつ時間差をつけての攻撃ポイントは的確で、行動パターンを把握されてしまっている。

慣れたプレーヤーであればフェイントやらを織りませて対処するのだろうが、悠早はそう言つた方法論を知らない。

(間に合わない……)

なんとか直撃だけは免れているが、それでも時折攻撃が身体をかすめて行く。

その度に自動防御が発動し、耳障りな甲高い音と共に淡い緑色の障壁がダメージを防ぐ。

(あれは……迎撃する、しかないか?)

悠早は右足を半歩分引く。

右手の杖を中段に構え、前方から飛来する1発の魔法弾へと照準を定める。

最低限の対モブでの戦闘訓練だけは習い、実践していたのが幸いだつたと悠早は心底思う。

そしてその師が『最強』と呼ばれるレティーシャや、下手な戦闘職よりも近接戦闘が強いが 何故か 純粹な『支援職』であるメイリアであつたこともまた良かつたと言える。システムに頼るのではなくシステム外スキル群を駆使する戦闘方法は彼女らからの伝であり、言い換えれば数少ない直弟子という幸運な身分であった。だからこそ、『下手なりにそれなりに戦える』のである。

これがここ数年の『ゆとり』プレーヤーであれば、支援は支援らしく、魔法使いは魔法使いらしく後方でじつとしているのが基本である。支援や魔法職が前へ出て戦闘をするようなこともなければ、

身を守る術があるかも微妙な所で、不意打ちに対して最低限の有効な防御も出来るか怪しい。そんな脆弱な後衛職を守るために、中衛的なポジションの身の軽い遊撃職をPTに加えるのがセオリートなつてている。

それに比べると悠早は、周囲に『戦闘ができる支援』ばかりであった。

彼らの教育の賜物で、ある程度は基本的な戦闘スキルが身に付いている。

型に従つて、右足から踏み込み杖を前方へと突きだす。

基本的な単発の突き攻撃である『Sinegōne Spike』を発動させる。

極初歩の攻撃に過ぎず、威力的には望むべくもないが使用後ディレイ 次のテクニックを発動させられるまでのディレイ が短く、硬直時間 行動不能時間 はほぼ存在しないため比較的扱いやすい。大技になればなるほど、使用後ディレイ、硬直時間、クールタイムは伸びていくため、使い所は限られていく。

青白い光を放ちながら杖の先端が魔法弾へと吸い込まれていく。魔法弾は音もなく破裂し、煙のような靄となつて霧散する。

(迎撃成功、更に2……弾幕シユーティングでもやつてる気分だな)

他の多くのVRMMORPGと異なりTWでは『魔法迎撃』が可能であるがゆえに出来る芸当。

それはシステム的に定義されているものでない。

バグか仕様かは不明と言う比較的広く知られた、メジャーなシステム外スキルである。

過去に運営会社に問い合わせを行つたところ、『問題ない』と言う返答があつたので建前上は『仕様』と言うことになつていて。実際には『修正不能のバグ』だろう、と言うのがプレイヤーの間の共

通認識である。

ある程度以上を持つ攻撃、もしくは対属性攻撃を叩き込む事で実現する。迎撃に求められる威力は迎撃対象の魔法の威力で決まると言われているが、実際のところ明確な基準は存在していない。要するに勘と経験が物を語る。

そのお陰で範囲魔法以外は『必中』の魔法攻撃は存在しない。

(ああきりがない……)

左足をバネに、後方へと数メートル跳躍。

半秒ほど前まで彼の居た地点を数本の触手が抉っていく。

2分。
3分……4分。

ただ無意味に時間だけが過ぎていく。

攻防は一進一退を続けていく。

悠早は道路が穴だらけになるまでは1箇所で踏みどまり、安定した動作が困難な状況になると数メートル単位で移動する。化物も本気ではないのか、それとも戯れてでも居るのか悠早を殺しに来ていはないような感触を受ける。

攻撃が彼のスキルで十分に対応可能な範囲に収まっているのが不気味だった。

そんな事を思考しながら、それをひたすら繰り返す。

その度に穴だらけになつて行く道路を何の感慨もなく横目に眺める。

相手の懷へ飛び込んでしまえば多少は楽になるのだろうが、20本近い触手の群れがそれを許さない。

距離にして10メートル弱。

一瞬で接近できるはずの距離が余りにも遠い。

「ユーリ、下がつて！」

永遠に続くように思われた奇妙な均衡は、その声を契機に突如として崩れる。

逆光を背にして、悪魔のような天使が舞い降りたように見えた。

断続的に響く道路に穴を穿つ破壊音

「ユーリが頑張てるのもありますけど……ヘルハウンドも本気ではないようですね」

優希は辛うじて崩落を免れたテパートの5Fの窓越しに、巨大な漆黒の獣の姿を見下ろす。

そして獣から前方へ10メートルほどの距離を保つて、青みがかった銀髪を振り乱す彼女の姿。

彼は窓枠に足をかけ、右手に杖を握りしめ、じっと静かに攻撃の機会を伺う。

すぐに出でていっても問題はないが、最初の1撃で可能なかぎり大きなダメージを与えておきたかった。

優希も一応は本質的には純粹な『支援職』の『Bishōp』であつて、接近戦闘は本職ではない。それでも倒しきる自信はあつたが、正面から殺り合うと少々時間がかかりすぎると踏んでいた。これが単なる雑魚であれば力押しするところだが、あれは『NM』であり特にHP的な意味で『NM』も弱いながらもボスでありHPは一般モンスターに比べて数倍多い削り切るのは、強力な攻撃スキルがない以上は骨が折れる。

幸いなことに、システム外スキルである『ステルス』を使用して

いること、そこに彼我のランク的差が加わっているお陰で、彼はまだ獸にその存在を察知されていない。

奇襲をするにはもつてこいである。

ただ、今敵の攻撃を一手に引きつけている友人のコーリの負担を考えるとあまり時間もない。

ある程度（支援としてみれば相当に優秀だが）の自衛能力はあっても、戦闘能力は遙かに劣ることをよく知っている。

優希は右手に固く握られた白銀色の武器へ視線を移す。

彼の杖、S O E S t a f f o f E l n i a は一見するどその穂先から槍のような印象をうける武器である。

しかし近くで見れば、いさか武器らしくない2対の飾り羽と、瑠璃色の宝玉、そして刃のない穂先の流れるような優美な姿であることが解る。遠目には槍のようであるが槍ではなく、杖のよう見えて杖ではないように見える。

その印象を受けるのは半分は正しい。

杖の中でも『M i g h t y S t a f f』^{マイティスタッフ}に分類されるそれは、その外見に比して巨大な攻撃力を秘めている。

一般的に杖は魔法攻撃力を增幅するために装備する。

しかし『M i g h t y S t a f f』はMPを消費して物理攻撃力を增幅する。

つまり、S O Eは杖の中では例外的に純粹な近接戦闘用の武器である。

（攻撃の合間……コーリには悪いけど、もう少し頑張つてもらわないと……）

全ての触手が本体から離れる瞬間を待っていた。

高威力の攻撃テクニックは消費MPは勿論、様々なディレイが大きく使用に制約がある。

打ち込んだは良いが、その後の反撃で大ダメージを食らっては堪らない。

「今だ……」

一瞬の隙を見逃さない。

トンと窓枠を蹴り、空中へと躊躇つことなく身を投げ出す。

「ユーリ、下がつて！..」

眼下で戦闘を続ける彼女に呼びかけながら、極小さな魔法を無詠唱で発動させる。

風属性のオリジナル魔法、名前は特に付けていないが周囲は『WA』とか『Wind Assisst』等と呼んでいるようであった。風を制御し、落下位置や速度に始まり、戦闘時の急加速、急減速から果ては空中機動までを実施することが可能なお手軽でありながら便利な品物。それでありながら極初歩的なコードしか使用していないので、魔法制御や風属性スキルが低くても使用できる。

『複雑で巨大な大魔法よりも、初歩の呪文の応用のほうが余程使い勝手が良い』

それは優希のTWでの友人であり、最強の魔法使いと呼ばれる彼女の言葉である。

多くのプレーヤーは見た目が派手で、一見すると 実際にダメージ量は大きい 破壊力の大きな大魔法を好む。実際にはMP効率と言う意味では、広範囲攻撃となると決して良くはなく無駄が多い。MP効率の良い単発系高威力魔法を使用し、多数を相手にするには呪文のMC MultiCasting 多重詠唱 を持つて当たる。

プレーヤースキルさえあれば、その方が圧倒的に優位と言つのは
プレーヤーの共通見解である。

そして、このWAは彼女の数少ないお墨付きを得られた物であつた。

体感時間が数百倍にまで加速されていく。

細かな制御で落下地点を獣の右の頭部へと向ける。

ほんの数秒という短時間。

ヘル・ハウンドも突然の乱入者の存在に有効な対策が取れずに居る。

そもそも数秒で十分な対策が取れるわけもない。

「それっ！！」

獣の1メートル以上もある巨大な頭部が眼前に広がる。

真紅の瞳が見開かれ、驚愕か恐怖かはわからないが、そう言った表情が怯えているように見えた。

振り上げた杖に最大量のMPを込めるべく、一気に眉間に振り下ろす。

テクニック名は『『PileDriver』』、優希がメイリアとして扱える最大威力の攻撃。

杭打ちの名の通り、槍もしくは杖を使用し下方へ向けて打ち込むための技である。

TW内ではそもそも槍や杖のようなリーチが重要な武器でこれを使わなければならぬような状態は、相手に懐に入られている状態であり、言わば『すでに終わっている』状態である。だからこそ使いどころがよくわからない攻撃テクニックと言っていた。

しかし、WAを使用した空中機動が可能であればそれなりに使い道はある。

鈍い衝撃が優希の腕に伝わる。

咄嗟に組まれた薄い魔法障壁に阻まれて、わずかにその威力が減衰される。

しかし十分な威力を秘めた一撃が眉間に深々と突き刺さる。

(よし…… 次)

優希はさらに穂先を引き抜くと、頭部を蹴り地面への落下体勢に入る。

攻撃の手を緩めず、Piledriverをコンボの起點として、次の攻撃へと繋げていく。

WAで落下速度を大幅に抑え込み、横薙ぎ単発技『Circular ar』へ、そして『Singl e Spike』と頭部へ容赦無く連續の攻撃を浴びせる。特に2段目のCircularはヘル・ハウンドの右目にクリティカル・ヒットする。

柔らかな眼球を深く抉る、生々しい感触が不愉快で仕方がない。獸が吠える。

優希は更に数発の単発攻撃のコンボを繋げ、地面へと軽やかにと表現するには程遠い……SOEを地面に突き立て急制動を掛ける形で、強引に着地する。その衝撃は流石に大きな負担であったが、耐えられないほどものではない。

ある程度はWAによって緩和されていた。

「ふう……」

20本近くも蠢いていた触手が半減しているのが見える。

ヘル・ハウンドは魔法を司る右の首のそれなりに深刻なダメージによつて、これまでのレベルで魔方陣を維持することができなくなつていて。これもTWであれば一時的なステータス・攻撃力の減少

に留まり、ある程度時間が経過すれば元の水準まで回復するところである。その辺りは現実的でないながらも、同時にゲームらしさが必要であった故の措置だろう。

しかし深く抉られ、完全にその機能を喪失した瞳が回復する兆候は見えない。

ヒールを含めた治癒呪文で回復させられるのかは、優希の興味のある所であった。

「メーさん、大丈夫！？」

優希はただ一度だけ小さいながらも力強く頷き返す。

先程までの攻撃を一手に引き受けた彼女も随分と余裕が生まれている。

触手の数は一気に10を切る水準まで減少し、魔法弾による攻撃は完全に停止している。触手による攻撃も鈍つており、それまで彼女を追い詰めていた切れ味はない。

（ちじじょうか……うん、勝てないことはないけどだるいかも）

片割れに深手を負わされ、左の首の表情に怒氣が満ちているのが見える。

遊びは終わりだ、そう瞳が訴えているように感じていた。

優希は、溜め息混じりに再び杖を構える。

余りにも非常識な数の死傷者に人手は全く足りていない。

彼女らと同じプレーヤーだったと思われる数人が治癒魔法で治療に当たっているが、焼け石に水の状態と言つて良い。

このままでは満足な治療を受けることも叶わずに死んでいく人々も多いのではないかと思えるような状況。実際に四肢の一部を失っている、明らかに速やかに手術が必要な深手を負っている重症者も多い。それに加えて、事件が人の集まる交差点、それも街の中心で発生したために怪我人はこの一帯だけではない。

我先に治療を受けようとする、受けさせよつとする人々の罵声や悲鳴は途切れることがない。

そこは完全に戦場であった。

「兄さん……」

そんな中で結子はじつと終わらない戦闘を見守っていた。

周囲では慌ただしく様々な人々が動き回っているが、彼女の目にはそれは映っていない。

幸いにも加勢があつたことで、危機的な状況は脱したといつてもそれ以上に事態が好転する様子はない。断続的に輝くエフェクトから確実に攻撃が行われ、ダメージを与えていることはわかつてもそれが終わる予兆はない。

少なくとも獣の動きはまだ鋭いままであると言えた。

「あれ、…………この人？」

ふと目に留まつたその姿に、彼女は見覚えがあつた。

170を越えるスラリとした長身。

刑事物によく出てくるようなトレンチコートが全身を覆っている。何よりも、お世辞にも目付きの良いとは言えない、猛禽類を思い起こさせるようなキツイ釣り目。右の瞳が翡翠色、左がダークブラウンのオッドアイ。いかにも白人系の美男美女の姿を取るプレーヤーが多い中にあって珍しい日本人風の顔立ち。そしてそれに合わせるように腰の下まで伸びた癖のないストレートの黒髪が白い肌に映えている。

加虐心の塊のような、気の強そうな美人の姿。

そして同時に和服でも纏えば、極道の人か何かだと思われても不思議ではないほどの威圧感を感じさせる。

実際に周囲の人々もチラ見はしても、堂々と鑑賞するような人間は見当たらぬ。

あの感覚は間違いない、と結子は確信する。

仮想世界、VRMMORPGの代表作『TW』においてランク的には日本最高位の『116』を所有。

そして世界でもトップ3の一角を占めたプレーヤー。

その割には、彼女自身はゲームにすべてを捧げるような廃人ではなく、社会人として生活の傍らでプレーしているだけであった。それもプレー時間による差がつきにくいスキル制であること、そしてVRゲームらしくプレーヤースキルが随分とものを言つ世界だからこそ可能な芸当。

数多のNMMどころかMAMBM 大アルカナになぞらえた21種のMBM を含めたMBMまでもソロで屠り続けるその姿から『MBM Freak』、『ボス狂』等の二つ名で呼ばれる。

中でも彼女の名を世界中に知らしめた1本の動画、MAMBMの1柱であるPEOこと『The Priestess Elena in Oblivion 和名：忘却の女教皇エルネアの亡靈

』ソロ討伐動画は、MAMBMを世界で初めてソロでの討伐に成功した記録として余りにも有名であり、語り草になつてゐる。そ

の後も数多のMBMをソロで葬りその様子を動画配信サイトに投稿し続けた。1年半ほど前の大規模アップデートにおいて、MBMの大幅な強化が行われたのは彼女が原因であると言つ都市伝説すら広まっているほどである。

良くも悪くも色々な意味、多方面で有名な彼女のその名を知らないプレーヤーは少ない。

「レティーサン？」

「……ん？」

彼女は『あんた誰?』と言いたげな怪訝な表情を向けてくる。

結子は自身の容姿が仮想世界のそれではなかつた事を思い出し、次に彼女が基本的に初対面の相手に対しては冷たい、そんな人物であつたことも大昔の記憶からついでに思い出す。

キツイ容姿と一匹狼つぶりから気難しいと思われている、そんな人物であつた。

彼女の仮想世界での名はレティーキャと書つ。

「ああ……えっと、ユイの中の人です。はじめまして」

「ゆいち?」

レティーキャは結子を上から下へと、あまり興味なさげに見渡す。その微妙な視線、絡みつくよつた感じはなく、舐めるよつた厭らしい物でもない……それに何とも言えない居心地の悪さを感じていた。

「はい、つて何をしてるんです?」

「うん、観戦……と言つても、今来たところなんだけど」

レティーキャは視線を黒い獣へ向ける。

「ところで、あそこでワンコと戯れてるのはコーリだよね？ もう一人がめーの字だってのはすぐわかるんだけど。ああ、でも流石にめーの字でもあればめんどくさそうだなあ」

「そうです……」

「さすがにこれ以上破壊活動続けられても嫌だし、ワンコをひっぱたいて来ますかね」

レイーシャは緊張感のない呑気な口調で言つ。

何よりもあの凶悪な化物を『ワンコ』呼ばわりし、尚且つ、あれをソロでも容易に撃破できてしまうほどの単純に『すごい人』であるという仮想世界での事実。それでいて普段接している分には大手ギルド等の連中よりも、何処にでもいそうな、割りと今時の何処かヤル氣のない普通の人見えて仕方がなかつた。

その性格的な面の軽さと、見た目、実力のギャップに結子も最初は戸惑つた物であつた。

同時に彼女の目は笑つていないことにも気づく。

「あれをワンコ扱いなんですね……相変わらず」

「犬コロでもいいけどな？」

レイーシャの機嫌はすぐぶる悪かつた。

彼女の好きな『街』を随分と派手に荒らされ、このままだと折角企画したオフ会がダメになりそうな事に対してである。何せ、彼女が呼んだ二人である悠早と『めーの字』ことメイリアーこと優希の両名が絶賛戦闘中であり、終わつたとしても警察か何かに同行を『お願い』されることほぼ間違ひ無いと言えた。

そんな彼女の口から、乾いた笑いが漏れる。

「…………そんのは、どっちでもいいです」

結子はさつあとあの化け物を始末して、戦闘行動を終わらせて欲しかった。

加勢が加わって安全性が大幅に上がったと言つても、何が起こつてもおかしくはない。

そんな不満を込めた視線をレティーシャへぶつける。

「身体慣らしでもしますか。まあ、30秒もあればいけるかね……」

彼女は頭を搔いて、「まかしながら囁く。

「…………はあ
System command - summon weapon.
」

彼女は淡々と流暢な英語でコマンドを畳える。
一呼吸おいてその武器の名を呼ぶ。

「The Grand Cross - Nemesis - - -

グランドクロス。

それは巨大な十字架を持つ、審判の効果を有する鈍器の一群の総称である。

その中でも特に彼女のそれは神罰の執行者ネメシスの名を冠した神器、神罰の代行者である者の証明と解説される。仮想世界での入手方法はM A M B Mの一つが稀にドロップする事が知られている。そしてそれ以上に、レティーシャの名と共に広く知られた、特に著名な武器の一つ。

全長は2メートル近く、十字架部分だけでも80センチを超える

ほどの巨大さ。

彼女はそれを悠々と素振りしてみせる。

「まだちょいと重いか……」

レティーシャはまだ力が完全に戻りきっていないことが不満であった。

僅かな反応の遅れ、そして鈍器に身体が振り回されるような感覚が不愉快なのである。

それでもあの程度の化け物の相手なら問題ないと言い切ることもできた。

結子は苦々しい表情で『早く行つてください』と訴える。
レティーシャはそんな強い視線に肩をすくめ、結子の頭にポンと手を載せて言つ。

「よし、真打は最後に登場するってやつだ」

ヘル・ハウンドの瞳ははつきりと彼女の姿を捉えていた。

悠早は急にヘル・ハウンドの攻撃の手が緩んだことを知覚する。獸の真紅の瞳も、既に彼と優希の一人を見ていない。

その鋭い視線は随分と離れた人「ミ」の一点へと向けられている。獸は攻勢から守勢へと転じ、必要以上に攻勢を誘わないように触手を引き戻していく。しかも、同時に小型で制御しやすい、もしくはきめ細やかな制御の必要がないつまり数を揃えられる質より量優先である 攻撃魔法を次々と組み上げていくのが見える隙を見せないその姿と振る舞いは、さすがに高知能の魔物と言つたところである。

「……ん？ なんだ？」

2本の触手による牽制も役目は終わつたとばかりに引いていく。悠早は突然の変化に何が起つたのか、状況を飲み込めずに居る。しかし、キリエの耐久度的に限界が近かつた事もあつて、それに合わせて数メートル後退する。

優希もまた同様に深追いはしない。

獸もそれに合わせるように、ゆっくりと後退していく。

（あとはティッシュに任せますか……ね、相変わらず美味しいところを持つていく）

優希はこの数十秒前から彼女の気配に気づいていた。

もつと正確に言えば、彼女の持つ武器……人間の創りえる物ではない神器に分類されるそれが放つ気配にある。

仮想世界においては第6感的なシステム外スキルも幾つか存在していた。

その一つが世界に満遍なく満ちていると設定されていた力の源である『魔力』もしくは『マナ』の波長の変化を読み取ることで様々な情報を得ると言うものであつた。これは特に捻りもなく『マナ・サーチ』やら『魔力探査』等と呼ばれていた。得られる情報は周囲一帯のモンスター やプレーヤー の位置情報に始まり、凡その強さや状態、装備の概要等がある。慣れればシステムで設定されている『索敵』スキルよりも優秀で、ソロプレーヤーならば必須に近いシステム外スキルであった。

特に固有の波長を持つ神器などの上位装備は、知つていれば判別するのは容易い。

優希は僅かな魔力の動きを感じ取る。

小細工なしに、前傾姿勢で正面から突撃してくる人影。

「小細工なしなんですね……必要があるとは思えないですけど」

「ええ……いや、ちょっと……」

優希は仕事は終わつたとばかりに、後方へと飛び退く。

それも右足をバネにした上にWAによるサポートを加えていふとは言え、静止状態から後方へ向かつて一気に10メートル以上もある。

その様子を『この場にオリンピック選手がいたら卒倒しそうだな』等と、半ば呆れ気味にどうでも良い感想を抱きながら悠早も後ずさることでさらに距離を取る。鼻歌でも口ずさむよひにしてキリエの再詠唱を行うことも忘れない。

攻撃の危険性は減つたと言つても命の安全が確保されているとは言いがたい。

(つて、やつぱりティッシュかい!)

悠早の横を長い黒髪をなびかせた彼女の姿が通りすぎていく。
獣が準備していた全ての魔法弾系の攻撃魔法と触手が、彼女と交差するそのただ一点を目指す。

ほんの数秒にも満たない時間が、スローモーションのように流れしていくのを悠早は体感する。

手始めに数本の触手。

それに數十分の1秒という僅かな時間差をつけて、多数の魔法弾と触手が続く。

ゲーム中ではMBM TWにおけるボスモンスター 戦でもなければ見ることが出来ないような、大量の魔法による攻撃が彼女の姿を完全に覆い尽くす。

彼女が攻撃を回避した様子はない。

アスファルトを食い破り、連續で手榴弾が爆発したように大量の粉塵が巻き上がり視界を塞ぐ。

悠早はその光景に、大丈夫だとわかっていても目を閉じてしまう。

「……」

次の瞬間、レティーシャは平然と獣の目と鼻の先にいた。彼女はしてやつたり、と不敵に微笑む。

光学的な残像を残し、短距離を瞬時に移動し相手を欺く秘技。彼女達の扱うオリジナルの中でも今のところ最上位に位置する特殊な補助魔法。

『擬似空間転移』

それはWAと結界を応用し、一瞬の間に急加速と急減速を行うことで実現する。

最大で約1.5メートルの距離を0.1秒程度で移動する事ができると言うモノ。

飛距離がそれほど長くない割には事前詠唱が必要で、消費MPも並の攻撃魔法など目ではないほど多い。そして間に遮蔽物が存在しない状態が大前提であり、万が一にも遮蔽物があつた場合には即死しかねないほどの大ダメージを仮想世界では受けていた。何よりも使用を困難にしているのは、開始位置と終了位置、そしてその3次元空間を正確に脳内で思い描く『空間把握能力』が必要である事だと言える。

連続で使えるものではない上に、何かと制約も多い。
それでも不意打ちをするにはもってこいの技。

レティーシャは落下制御をかけながら身を捻り、巨大な鈍器を振

りかぶる。

「くたばれ、犬口ロー！」

真紅のエフェクトを纏つたメイス用の単発重打撃『Skullib reaker』が発動する。

神の金属であり、古代金属の最高峰たるオリハルコン。その独特的な青味がかつた銀の金属光沢を放つ十字架の一端がヘル・ハウンドの左首、脳天へと突き刺さる。

絶大な一撃は防御結界、そして大抵の物理攻撃を緩和する体毛も意味をなさず、鋭利なナイフで切り裂くように皮膚を食い破る。それでも攻撃は止まることなく、更に深くへと浸透していく。肉を切り裂き、頭蓋骨へと達してもまだ止まらない。

骨が碎ける感触。

脳へと達した時点で彼女はようやく攻撃の手を意図的に緩める。これ以上深くめり込めば、引きぬくことが困難な状況に陥る可能性があると考えてのこと。

左の首は断末魔の悲鳴をあげることすらなく意識が途絶える。

「どうあつーー！」

血に染まつたグランドクロスを引き抜き、休む間もなくコンボによる追撃へと移る。

横殴りに頬へとオーバーキルの一撃。

傍から見れば全く意味のない行動に見えて、ゲームシステム上では意味のある行動。

それは単純に『コンボを繋げる』と言つたりにおいてのみこれは意味がある。

コンボはテクニック使用後の規定時間以内に、発動時の体勢などを含めて無理のないテクニックを繋げていかなければいけない。も

し規定時間が過ぎればディレイが始まりコンボは終了する。技を繋げるため、体勢変更のために、それ自体には意味のない攻撃を行つのは割りとよくあることである。

彼女はその勢いに乗せて既に意識のない左首を蹴り飛ばす。

オレンジ色のHフレクトと共に弧を描く3撃目は右の首の顎を抉る。

それで終わることもなく、文字通りに『空中を蹴つて』数十センチ飛び上がる。

その間にも鈍器は見事な円を描いて攻撃の初期位置へと戻り、そのまま手負いの右首の眉間に深々と突き刺さっていく。

顎を碎かれた獣は断末魔の悲鳴をあげることすら叶わず、意識が途絶える。

「よし…」

レティーシャは満足気な表情と共に、風に乗つて軽やかに地面に舞い降りた。

彼女は間違いなく強者であった。

そんな中で、悠早はかなり引き気味な視線を向けていた。

完全に両の首を破壊され息耐えた獣が、頭部から大量の血液を撒き散らしながら地面へと倒れていくのが目に映る。同時に、『システム』がヘル・ハウンドのHP消失を通知してきたことで、戦闘が終了した事を認識する。

それは勿論、声が聞こえたやら、メッセージが表示されたやらと言つわけではない。

ただ何となくそれを認識することができ、それを教えたのがシステムだと言つことが解る。

恐らく、頭の中に情報が流れこんでくると言つ表現が最も近い。

「うわあ……流石にあれは可哀想になつてくるのは氣のせい?」

まるで死体に鞭打つように横つ腹に一撃を加えるレーテーシャの姿。それを眺めながら、通りの反対側でやれやれと言つた様子で肩をすくめている彼女の言葉を思い出す。

『ティッシュは大の犬嫌いですからね……犬系のモブには容赦がないんです』

彼は本当にそうだと一人納得していた。

ゲームTWの説明はそのうちします、たぶん。

補足

MBM = Magnificent Boss Monster
ダンジョンやフィールドの最奥に潜むボスの総称。

強さはピンキリでソロでも比較的容易に撃破可能なQueen Antから、果てはランク100以上のプレーヤー数百人でかからなければいけないThe W.O.R.L.D.までレンジが広い。
倒して金銭的に割りに合つかと言つと結構微妙。

MAMB = Major Arcana MBM

全部で22種のMBMであり、TWを象徴するモブ。

MBMの中では最も弱いものでもMBMとしては中位の難易度。別にコンプリートしても得点はないとかなんとか。

いかにも警察署らしい、くすんだ色の壁の続く無機質な廊下。今時珍しいと言つほど珍しい訳ではないが、時代を感じさせる行事やら注意事項やらの貼られた掲示板。近年ではお役所ですらも、電子ペーパー技術を使用したモニタを使用した掲示が普及してきていると言うのに、この空間だけは20年以上前の平成の時代、下手をすれば更に前の昭和の世から時間が止まっているように感じられる。その割には各所の最新鋭の防犯カメラや、円柱形の全自动お掃除ロボットやらが動き回っているのが何ともおかしい。

悠早は硬いくすんだ緑色の、これまた年代物の安っぽい椅子に腰掛けている。

ところどころ化学纖維製のカバーが破れ、内部のウレタン素材が顔を覗かせている。

そして意味もなく、興味もなさげにただすることがないという理由で、何度もわからぬ回数を眺めながら過ごす。最初はネットの巡回をして情報を集めて暇を潰していたのだが、それも阿呆らしくなってしまっている。

彼にはとにかくする事がない。

そして、この暇を食べる手段を思いつかない。

「はあ……ヒマ」

天井のLED照明を眺めながら、悠早は深い溜め息をつく。

結子はと言えば、一応戦闘の当事者である3人に付いては来たものこの場所の雰囲気に耐えられなかつたようで外へ散歩に出でしまっていた。

署内は平常時ならば人の往来も多数有りそだといふのに入りの気配は少ない。

銀座3丁目交差点での『怪獣事件』と、池袋でのイグドラシルの現出、そして各地から入つてくる正体不明の謎の生物の出現等の対応に追われているそのうなで無理もない。池袋だけで死者・行方不明者は1万を優に超えると言われば、銀座の1件も死者数百名、負傷者はその数倍にも及ぶと見られている。実際のところ、未だに被害者の全貌はつかめていない。

救助活動に現場検証、危険地域の封鎖と人手はいくらでも必要だつた。

多くの人が現場へが出払つてしまつており、最小限の数しかここには人がいない。

そしてヒマであると同時に、悠早は奇妙な気だるさに支配されていた。

結子と一緒に外へ出なかつた原因もそれが大きい。

それは現実での初戦闘による気分的なものであるかも知れないし、また大量のMPを消費しての治療活動によるものかも知れなかつた。もしくはその両方であるとも言えた。

現場に曲がりなりにも仮想世界において『支援』と『治癒』を専門とする『プリースト系』の資格を所持していた人間が3人もいた。悠早と優希は支援の専門であり、支援系の最高峰である『Bisho-p』であつたし、レティーシャも近接戦闘が専門であるがそれなり『支援・治癒』能力もある『Dominicans』と呼ばれる、日本語にするならば異端審問官であつた。

流石に戦闘が終わつてすぐに退散するわけにも行かず、駆けつけた警察官らに事情を説明した上で救助活動に当たつていたのである。それによつて少なくとも数十人の命は救われた、と先ほど言われて胸を撫で下ろした。

その過程で明らかになつたのは、プリースト系の『ヒール』とメイジ系の『ヒール』では名前こそ同じであつても、その効果は大き

く異なるといつことだつた。ゲーム内でもプリースト系のヒールには状態異常治癒等の付加効果があるのは知られていた。それが現実になつたことで、より大きな機能の差が認められた。

結局のところメイジ系のヒールは浅い傷は癒せても重症患者にはほぼ効果がなく、プリースト系のものはある程度重症患者にも効果があつた。

それでも流石に、四肢切断といった部位損傷には対応出来なかつたのであるが。

悠早はレティーシャの気配を感じ取る。

冷たくなつていた頬に温かな 金属の感触が触れる。

「随分疲れているようだな？」

「え、ああ……まあ」

それだけ言つと悠早の目の前にボトル缶のロイヤルミルクティを差し出す。

それなりに有名なメーカーの、しかしレティーシャから見ると安い茶葉をコテコテのミルクと砂糖で味付けしてごまかしただけと言う評のろくなしだと語っていたシナモノ。悠早から見ればそこまで酷いものだとは思わなかつたが、凝り性の彼女から見ればそう言うモノらしかつた。

悠早はそれを両手で包み込むようにして受け取る。

「こんな安っぽい上に糞不味いもので悪いが、我慢してくれ」

「いえ……」

レティーシャは250ミリリットルのお茶のキャップを外すと、

喉へ流し込む。

そしていかにも不味そつなしかめつ面へと表情が変化するのが見

える。

最近発売されたばかりの新製品のようであるが、彼女の口にはお氣に召さなかつたらしい。

「ふう……つて、これもまた微妙いな」

「そもそもペットボトルの味に文句を言つても仕方ないんじゃ……」

「不味いものは不味い」

成分表示をしげしげと眺め、ウンウンと唸つてゐるのが見える。そして、何を思ったのか不満気な表情をそのままに、腰に手を当てるといふ風呂上りの牛乳を飲むように一気飲みをする。

その表情は苦い薬でも飲んでいるよつた印象を受ける。

「まつ、お疲れさん」

飲み終えたペットボトルを軽く10メートル以上先の『ミミ箱』へとポイっと投擲。

それを『流石に入らないだろ』と呆れ顔でその姿を眺める悠早を他所に、ペットボトルは見後な放物線を描いて『ミミ箱』へと吸い込まれていぐ。『ミミ箱』の縁に当たることもなく、ど真ん中への完璧なシューートに悠早は表情をそのままに固まってしまう。

レイーシャは余裕綽々といった表情を浮かべている。

「まあ、最近の特技だな」

「はあ……」

そんな特技はこりないと思つても、悠早はそれを口に出さない。

「本当にいろいろな意味で疲れましたよ……」

「いつも改めて人間つてのはホント自分勝手で我儘で口クでもね

えなと思い知らされた」

「ハハハハハ…… 同感ですけどね」

（この人も嫌いな物が多いよなあ…… ほんと）

悠早は腕を組み、壁に持たれる彼女の姿を見上げる。

悠早は自分達の治療行為があれで良かつたのかと思い返す。

医者はああ言つた異常事態であれば、少しでも助かる可能性の高い患者を優先し、助かる可能性の低い患者の優先度を下げる。助かる可能性の低い者に時間を裂くのではなく、切り捨てて一人でも多くの命を助けなければならない。つまり取捨選択を迫られる。

助けることができた人達や、その肉親や知り合い達からは確かに感謝はされた。

同時に、明らかに助けようのない患者の親族から浴びせられた罵声も、敵視や恨み混じりの視線もはつきりと記憶に残っていた。

慈善事業で文句を言われては堪らないと言つのが悠早の思うところだった。

「ほんと醜い…… 良い感じに人間嫌いに拍車がかかりそうだ」

「まあ」

優希はと言えば、黙々と事務的に、多重詠唱を駆使してヒールをバラ撒いていた。

レティーシャはそれに比べると『女嫌い』の彼女らしく男性ばかり。それも年齢の若い人から優先的に治療していくのを悠早は覚えていた。そして汚物でも見るような冷たい視線が随分と怖かったのもである。

そして何も言わずに後ずさる人々の姿がなんとも滑稽であった。

「ところでゆいちは？」

「ゆいなら、こんな所には居られません、つて外に出て行きましたよ？」

「そつか……めーの字はまだ事情聴取っぽいしなあ

レティーシャはやることなさ気な様子で、長い黒髪を指でも弄ぶ。彼から見れば何かを考えているようで何も考えていなさそうな姿でも、彼女を知らない人間が傍から見れば思考の海に沈む物憂げな様子は十分に絵になる。しかし、実際には『やっぱこの髪が邪魔だ、切るか』等と小言を呟いているのは聞かなかつたことにする。

（勿体無い……）

実際問題として、腰の下まである髪など、それだけで相当な重量があり邪魔である。

手入れなど想像を絶するほど大変なんだろうと見えながら、悠早は視線を黒髪へ這わせる。

そして、沈黙。

悠早は明日の日曜はともかく、月曜以降の生活について思考する。彼は極一般的な高校生の身分であり、それを放棄する訳にはいかないと考えていた。

同時に、この状況を学校側に同説するかは頭の痛い問題で、またほぼ間違いない話題の中心にされてしまうだろう未来に気が重くなる。どちらかと言えば、教室の端で馬鹿騒ぎもせず、交じらず、放つて置かれて、静かに慎ましく大人しく生活していることが彼の理想だった。

しかし、今の悠早の容姿は否応なく人目を惹きつける。それは恐らく何処へ行つても変わらない。

「ティッシュはビツがあるのです?」

悠早は極一般的な会社員をしているレティーシャがビツするのかが気になった。

その場にいるだけでも威圧的な雰囲気を纏つ彼女は、普通に仕事をしていけるのだろうかとふと思つ。

携帯を忙しないながらも滑るような動作で操作する、そんな彼女の横顔を見つめる。

「ああ、月曜からは普通に仕事だな……今休んだら大変なことになる」

「それはなむいお話で」

「全くだ。どこぞのバカがへマやらかしたお陰で無駄に仕事は増えるわ、妙なバグは出るわ、密は細かいわ、そのクセ今更設計変更とか出来るかつて……ああ

「まあまあ……」「……」

悠早はブツブツと小言を呟き、時折舌打ちする彼女をなだめるようになつた。

しかしレティーシャは視線を悠早へと向ける「」ではない。

「しかし、この格好で仕事するのもさすがになあ……」

「す」い怖がられそうですね

レティーシャは深い溜め息を吐く。

そして乱暴に携帯をポケットへ突っ込むと、何も言わずに廊下をトンと蹴りあげる。

「学生のコーリとめーの字が羨ましいぞ」

「うひむひむひで意外と気が重いんですけど?」

「いいじゃないか、可愛らしい美少女とか。ほんと羨ましいわ

そんな事を言いながら、悠早を上から下まで舐めるように見つめる。

変態セクハラオヤジ、もしくは奴隸商人から奴隸を買う金持ちに値踏みされる、多少まともな表現をするのならレズビアンなお姉様に見初められたような、どちらかと言えばガタイの良いゲイなお兄さんと言う方が近いかも知れない、そんな居心地の悪さ。

レティーシャの指が髪に触れるのがわかる。

手櫛で梳くような優しい指使いの奇妙な心地よさに戸惑う。

そして彼女は何度もウンウンと頷く。

「クラスの視線を独り占め間違いなしだな

「全く嬉しくない件について……？」

悠早の肩がガクリと落ちる。

レティーシャは格好をつけて右手の親指を立てているのだが、それが妙に様になっている。

これだけの美人であれば何をしても様になりそうなものであるが。

「二人はずいぶん早かつたんですね？」

ドス黒いオーラを纏つた彼女の出現に、レティーシャの身体が固まる。

その声はいつものゲーム内で聞くそれと変わらず、穏やかで優しい……ように見えて、いつもと違つてアクセントに何処か棘があるように悠早は感じる。些細な差はあるが、その微妙な違和感が喉に魚の骨がつっかえたような違和感をもたらしていた。

特に怒っているというわけではないが、あまり機嫌は良さそうで

はない。

いつもなら王冠のような輝きを放つ、華やかなプラチナブロンドも心なしかくたびれて見える。

(「うこうのを暗黒微笑つて言つのかね……）

飾り気のない漆黒のタートルネックのワンピース。手に抱えているのがコートではなく、大鎌であつてもそれほど違和感はないだらう。

仮想世界では優希は常に『純白』を基調とした服装であつただけに、一人からすると今のその黒い姿はやはり随分と強烈な違和感があつた。それは仲間だと思つて接し、信頼していた聖職者女の子が、実は魔王の手先でしたと言われるような感覚。

それでも、その姿が正しいと思えるほど似合つてこるのは間違いなかつた。

「めーの字、おつ
「お疲れ様」

一瞬の沈黙をレティーシャが破る。

それまでの不気味なオーラが存在していなかつたかのように影を潜めていく。

原因が自分達ではなかつた事に悠早は胸をなでおろす。

「ところで、ティッシュ？」
「うん？」
「オフ会はどうあるんですか？　さすがにこの時間からでは……もう無理ですよね？」

優希は壁掛け時計へと視線を移すと、残念そうな表情になる。

悠早や結子がオフ会とそれに付随する普段はあまり食べられないようなそこそこ値の張るスイーツを楽しみにしていたように、それは優希も同様であったらしい。それも学生である3人の支払いは太つ腹なことにレディースя持ちとなっていたのだから尚更である。

「ああ、大人組はこれから飲みだ。かーすけやリッチなんかは有楽町の縁の窓口で待ってるそうだ」

「はあ……？」

「この状態でもオフ会を続行しようといふレディースяに悠早は呆れるしかない。

どちらかと言えば『飲まずにやつてられるか』が正しいのであるが、悠早にはわからない。

「そういうわけだから学生組は大人しく帰ってくれ、仕事が忙しくならないうちに埋め合わせはしよう」

「…………いや、ティッシュ」

「それなら仕方がないですね、今日は引き下がりましょう」「メーさん！？」

悠早は『それでいいのか！？』と心中でツッコミを入れる。そんな複雑な表情の彼を他所に、二人は次のオフ会の日程の話し合いを始めている。

更に追い打ちをかけるようにその場の雰囲気を破壊する陽気な声が響く。

「姉様、ローンに今冬限定のチヨコの新商品が売つてたんですね！」

「ゆい……何でそんなに元気なのぞ？」

コンビニの名前入りビニール袋を右手に掲げてワサワサと振る姿
が目に入る。

そんな結子の脳天気な様子と発言に、レティーシャと優希は思わず吹き出してしまう。

優希は頭を抱えて、ムニャムニャと何かを呟いていた。

「なんでって、新商品ですから！」って……、レディーさんにメイ

「あんもおひです」

結子を見つめる一人の視線はとにかく生温かつた。

07 (後書き)

オチが上手く付かなかつた件について。
まあ予告通りの更新できたしいいか(マテ

悠早は突き刺さるクラスメートの視線に、早くも心が折れそうであつた。

仮想世界のスキル群やシステム外スキル群の効果・能力を引き継いでいるおかげか聞きたくもない・聞こえなくてもいいような囁きまで聞こえてくる。50歩ほどは譲つて『転校生』や『外国人』などは、まあまだ許せる範囲であつたし、そう思われても仕方のない現実があるのだから諦めても入る。しかし100歩以上譲つても『可愛い』とか『綺麗』等といった言葉を投げかけられるのは彼の精神に着実にダメージを与えていく。

別に歓声が上がるとか、そういう事はない。

しかし、仮想世界のシステム定義スキルやシステム外スキルの能⼒・効果が普通の人ならば聞き取れないような音ですらも認識可能とする。上位プレーヤーともなればシステム外スキルである魔力探査によつて、自身に向けられる感情の機微すらも読み取ることができる。

悠早にはそこまでの実力がないのはこいつ場合には幸なのか不幸なのかと、彼も考えこむ。

そんな能力があつたらすぐにノイローゼになりそうであった。

「最悪……」

悠早は誰にも聞こえないような小声で呟く。

そして教室の窓に映る今の彼の姿に『まあ可愛いけどね』等と、他人事のような視線を向ける。

濃紺のブレザーとチェックのブリーツスカートと言つ平凡な制服。かれこれ2年近くも間近に存在し、デザイン的にもありふれ見慣れた制服も着る人間が変われば随分と印象が変わるものだと、人事

のように彼は思う。ある意味では、自分が今では校内で一番似合っているのではないかと言つ奇妙な優越感すら抱いてしまう程に『彼女』は可愛らしかった。

何だかんだで巨乳のグラビアアイドルとまでは行かなくても、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。どちらかと言えば、均整のとれたスラリとしたモデルに近いスタイルはある種の芸術作品のような美しさがある。

そして流れるような銀の髪と美貌。

流石は仮想世界産の容姿だけあって非の打ち所が無い。

そんな彼を見る視線にはいい加減に慣れたと思っていたが、甘かつたと彼は痛感する。

特に男子生徒の視線などは気持ちが悪くて仕方がない。

街中の見知らぬ人間であっても、その視線は不愉快極まりないモノであった。

それが曲がりなりにも顔も名前も知った相手からだというのが、負の感情を増幅する。

(あのバカ……)

悠早は教室の真ん中の最後部に位置する友人を睨みつける。

何が起こったのかわからないといった様子で、口をアホみたいにあんぐり開けて啞然としている……そんな姿が不思議と彼の癪に障るのである。

視線が合うと、友人である高柳 洋一はピクリと肩を震わせる。ひそひそ話で『おいおい、睨まれたぞ』などの言葉が聞こえてくるが気にしないことにする。

「はあ……」

小ちく溜め息をつべと、教壇に立つ担任の横に並んで顔を上げる。

(初めての転校生体験とか……ほんとどうでもいいなあ)

田を細めて、いかにも不機嫌そうな表情で教室全体を見回す。ギヤルグやエロゲ、もしくはアニメやマンガなどであればこの辺りで『ニコリ』と微笑んでみせるサービスくらいはする所なのであるが、残念ながら彼はそこまでのサービス精神は持ちあわせてはいない。

結子がこの場にいれば『姉様はサービス精神が足りません！』などと声を張り上げるだろう。

いつの間にかすっかり呼び方が『姉様』で定着した妹の顔を思い浮かべる。

そして昨日、つまり日曜日の夕方に近所に住んでいるこの学校のOBのお姉さんに頼み込んで女生徒の制服を調達し、満足そうなドヤ顔で『ジャジャーン』と言う効果音が出てもおかしくない様子で、それを突き出した姿が思い出された。

悠早としてはあの行動力を他のところに向けてもらいたい所である。

「ええ、まあ……やう言つて駄目で土曜の事件の影響でこうなつたと書いてじらして」

意識が軽くトリップしている間にも担任が状況説明をしていたようである。

クラスメートの大半は頭に『?』マークを浮かべるか、信じられないといった表情をしている。

(まあ朝起きたら女子になつてました、テヘとかいう説明で納得する方がおかしいわな……うん)

悠早の視線は元凶　だと思われる　彼方にそびえる大樹へと向けられる。

今ではすっかり東京都心を覆う巨大な天蓋となつた世界樹、イグドラシル。

悠早や結子の予想よりも一回りほど大きく、全高は富士山のほぼ半分である1800メートルにも達し、緑の天蓋の直径は4キロにも達する巨さ。大地に目を向ければ根は池袋一帯を破壊し崩壊させ、池袋駅を超えて西池袋一帯にも達していた。その影響で池袋駅は閉鎖され、山手線を含めたJR、私鉄、地下鉄含めた各線は致命的なダメージを受け、復旧の目処は立っていない。

ちなみに山手線はJRの中の人のが相当に頑張つたらしく、『C』の字型で運行を再開している。

また一人が通学に使用していた有楽町線は未だに不通で、自転車通学を余儀なくされている。

「おーい、澤口？」

担任が彼を呼ぶ声が聞こえる。

悠早は再びじっとの遠くの世界へとトリップしていた意識を現実へと引き戻す。

どうやらここ数日で、すっかり現実逃避する癖が付き始めているらしい。

「何か言つておきたいことがあつたら言ひなさい？」
「はあ……？」

彼は特に『言つておきたいこと』は思い浮かばなかつた。
敢えて挙げるとするならば、それは『今まで通り放つておいてください』の一言に尽きる。

しかし、流石にそれをこの場で『つまび空氣』が読めないわけではない。

構われるのも面倒で嫌であるが、それ以上に無用な反感を買うような事をわざわざする必要はない。学校という自分の意志で環境を選ぶことのできない、ある種の『閉鎖空間』ではそれなりに周囲とは上手くやらなければいけない。例えそれが、一般的に言つところの将来の底辺の集まる学校ではなく、そこから遠い位置にある『進学校』であつても程度の差こそあれそれは変わらない。

悠早は別に、周囲の思いは別にして一匹狼を気取っているわけではない。

人付き合いが単純に面倒であり、特に同世代と話すのが苦痛だというだけであった。

結局のところ、仮想世界における人との交わりを彼が好む最大の理由は、普段関わることがないような年上の人間との関係が持てる、と言つその一点に尽きると言つても良い。実際に、彼の周囲は優希ことマイリアなどの数名を除けば、大学生以上、レティーシャなどを筆頭に不通に社会人をしているプレーヤーが多い。そう言つた人々から聞く話のほうが、余程彼にとつては有意義であり興味深く、面白かった。

言い換えるれば、同級生達との共通の話題が少ないとも言える。

悠早は『ふう……』と息を吐き出す。

纏わり付くクラスメート達の不愉快な視線に軽く吐き気を覚えながら唇を開く。

「いついう状況ですが、『今まで通りに』ようしくお願ひします」

「こんな一言で今まで通りになるとは悠早も思つてはいなかつた。

教室の窓際の最後部と言つたがこの学生が羨む立地条件。

「」の12月一杯の悠早の席は彼にとっては最高であり、そこで過
るすのは至福であった。

何故なら教室の中央や廊下側といつた喧しい地帯からは隔離され、
教師の目が届きにくい ように見えて実は目立つ と言つのは、
ワイワイガヤガヤと騒ぐのが性に合わない彼にとっては、それに巻
き込まれなくて済むのである。

その条件が今でも彼にとつて有利に働いていた。

こちらに近づこうとする生徒や、飛んでくる視線に対して確実に
睨みを効かせる事ができる。

後方の安全が確保されていることの頼もしさを実感していた。

悠早はふと左の中指に填つた銀の指輪を顔の前へかざす。
本来であれば校則違反なのだが、特例で身に付けることを許可し
てもらっていた。

それは大粒の紫色の宝石 名は知らない が特徴的なシンプル
な銀色の指輪。あまり高価そうな印象は受けないが、安っぽいと
いふほどチャチな作りでもない。数千円では買えないだろうが、2
万円以上はしないだろうと予想できる程度のシナモノである。

しかし、それこそが彼の武器である「OPの『装備解除』状態で
ある。

そして、コマンドを唱えることで武器の形状へ戻る事も確認済み
である。

「外れないか……」

悠早はむだだと判つていながら、指輪を引き抜こうと力を込める。
何度も試みても無駄であったように、指輪はうんともすんとも動か
ない。

校則違反と言われても、外れないものは決つにもならない。

「はあ……」

盛大に溜め息を吐く。

その原因は指輪だけではない。

むしろ指輪よりも、ついに悠早の唯一に近いこの学校での友人が接近してくる気配に気づいた事のほうが大きい。友人と言って良いのかも怪しいが、知り合いでは疎遠すぎるが、友人と言つまどには仲が良いかと言わると微妙な所である。

入学以来、5年間に渡つてつるんでいる、もとい絡まれている男。悠早と結子の通うこの学校は、中等教育学校と呼ばれ中高一貫教育を行つていて。

そのため修業年限は6年であり、前半3年間が『中学校』に、後半3年間が『高校』に凡そ相当する教育を行なつていて。実際には一貫校である利点を最大限に活用しているため、厳密に別れているわけではない。

ともかく、その男と悠早はこれまでの5年のうち4年間は同じクラスであった。

「悠早、それなんだ？」

「はあ……」

「何でいきなり溜め息？ ちょっと酷くない？？」

面長の顔に細い目と野暮つた黒縁メガネ。

そして切るのが面倒くさい上に金がもつたないと言つ理由で、無駄に伸ばした余り手入のされていない黒髪。前髪だけは切つているようだが、横や後ろは伸び放題と言つて良い。

学校の制服であるブレザーがことん似合つておらず、まだ学ランの方がマシだろう。

要するに典型的なオタクがそこに居た。

悠早から見れば『豚ではないだけまだマシだ』といひ評価。

「どうでもいい……それと、これはSOP」

「へえ……それってさ、呪文とか唱えると武器に変わっちゃったりするわけ!? あと実は一緒に変身したりするとかあるのかなつ!? その時があつたらぜひ録画させて欲しい件について」

「……ない」

クラスメートから同情の視線が集まるのが判る。

何を録画したいんだと、碌でもない妄想を脳内でタレ流している洋一に軽蔑の視線を送つてみるが、全く効果はないように見える。むしろ勝手に精神が異世界に旅立つていいよつて、戻つてくる気配すらない。

悠早はむしろ戻つてくるな、と心の底から念じる。

同時に、洋一の指へ視線を移すが指輪らしきものは確認できない。他にも、レティーシャは『何となく』と言つ理由でイヤリング形状を、優希はブレスレットと指輪と言つ形で身につけていた事を思い出す。持ち歩く際の形状は最初に一度だけ指定することができ、それはある程度自由に選択することができた。

それを思い出し、腕や首周りなどを観察するがそれらしいものは見当たらない。

ただ1回も呼び出していくには、そうであつても思議ではない。

(しかし、あれを持つてる洋一の姿は……似合わないな)

そんな事を考へながら「コテコテしい、如何にもゲームらしき武器の姿を思い浮かべる。

眩い輝きを放つ恐らく口輪をモチーフとした装飾過剰の綺羅びや

かな杖を掲げる、刺繡で飾つた純白のローブを纏つたオタク少年の姿。明らかに格好とイメージだけで選んだ光魔法 正属性魔法と光属性魔法はTWでは別物 を主力とし、後光を背負うその勇姿を。

悠早は思わず、可笑しそぎて笑いが溢れる。

そろそろ現実へ引き戻すかと、MPを捏ねて小さな魔力の弾丸を創りだす。

これも一部の間ではよく知られたシステム外スキルで海外では『Man a Bullet』と呼ばれる。

日本では一般的には『MP弾』と呼ばれ、開発者の周囲では『ヴァスマード』と呼ばれることが多い。

その効果は『無属性』魔法攻撃であるが、属性攻撃が容易にできることが売りの魔法攻撃でわざわざ無属性攻撃をする必要性はまずないので所謂『ネタスキル』である。売りは、威力の調整の幅も広く、デコピン程度から最大MPの半分を使用した数十ミリ口径の砲にも匹敵するようなレベルまでを打ち分けることができる事だろう。もつとも、最大威力で打つた所で、同じMPを使用した他の属性魔法には攻撃力で遙かに劣る。

それに加えて低威力では淡い光を放つだけで、派手なエフェクトもないで宴会芸にすらならない。

精々が、ちょっとしたイタズラ、脅しに使うのが関の山である。

ちなみにだが効果音もない。

「イテツ！？」

洋一は額に直撃を喰らつて 空気銃程度の威力だが ふらつく。

何が起きたのか全く判つておらず、明後日の方角を向いてキヨ

口キヨ口視線が彷徨つている。

一部では有名なスキルであるが、普通の大多数の人間はこういつた意味のないスキルに興味を示さないため、存在そのものを知らない人間のほうが圧倒的に多い。そしてそれは、洋一も例外ではないか、むしろ聞いたことはあつても記憶には残っていない。

「それで、洋一のあれは？」

「朝から絶好調さ、今日もビックリ……」

悠早は拳大の魔力弾を洋一の腹部へと遠慮なく叩き込んだ。

威力が少々過剰だつたようで、その後まる一日彼が死にかけていたのは別の話である。

しかし悠早は別に反省していない。

年開ける前に更新できた！！

補足

ヴェスマー（V . S . M . R ）

可変速MP銃（Variable Speed MP Rifle）
の略だと巷では言われるが、諸説あり。ヴェスバー（V . S . B .
R ）のモジリ。

世界樹（イグドラシル）

イメージは『この木何の木、きになる（iryu）の超でつかい版。常
緑樹で葉は薬になる。

蓄えられている膨大な魔力が放出されることで、魔力光と呼ばれる
青白い光を放つ。夜は綺麗。

昼休みだと呟つのに、何故こんなことをしてこらるのだらう、と彼は思つ。

悠早は背にもたれかかるよつにして存在している『天敵』に頭を悩ませる。

仲が悪いわけではなく、むしろそれなりに良好だと思われるそれ。それは何を食べたらここまで大きくなるのかと評判の、無駄に巨大に膨らんだ胸を首筋あたりに押し付けながら、楽しそうに悠早の銀の髪を弄くり回している。普通の男子生徒ならばアタフタともおかしくない、そもそもそんな経験をすることは滅多に無いだろうが、仮想世界である程度よくも悪くも慣れている彼は、割と平然とされるがままになつてゐる。

今も長い髪を左右にツインテールに纏め、何処から出でたのかレースの付いたリボンを留めている。

その存在が極めて鬱陶しいのは間違いない。

しかし、今のところ差して実害がないのだから、無理に振りほどくのも悪い気がしてしまつ。

机の上に置かれた手鏡越しに彼女の姿を覗く。
癖のない黒髪を肩の少し上あたりで切り揃えたセミロングの黒髪
に銀縁のメガネ。

アニメやゲームであれば、間違いなく委員長タイプと言つのが適切な第1印象。

特徴らしい特徴と言えば、無駄に育つた胸くらいのものである。可愛いか可愛くないかといえば、悠早からすると『まああんなもんじゃね』であり、『化粧すればそれなりに見れるんじゃ?』等とかなり失礼なコメントを持つて評される。要するに素材としては悪くないけれど、味付けがよろしくないと呟つところだらう。

悠早から見ればいかにも着飾った彼女というのは想像できないものである。

彼女は片瀬 沙奈と云い、洋一と同じくかれこれ5年の付き合いになる。

そんな彼女の視線が右手で突っ伏したままの洋一へと向けられる。哀れみやら嘲笑やら、色々な感情が混じつた複雑な表情……しかし、彼女は笑っている。。

悠早は何のことやらと窓の外へと視線を背ける。

「悠早、あれは流石にせつすぎるでしょう？」

そんな同情めいた、悠早への非難めいた言葉ながら彼女の表情は『いい気味』と語っている。

実のところ、洋一のあの程度のダメージは『ヒール』で全回復させる事など容易であった。

しかし、『あのままのほうが静かでいい』と言つ理由で放置されているのである。そしてクラスメート達もそれを『善』として受け入れており、悠早を非難するものはいない。洋一という人間の普段の行動を容易に察することができる良い証左だらう。

悠早は時折、沙奈に一発打ち込みたくなるのを必死に堪える。

流石に『一応』は女の子（笑）に攻撃するのはといつ、無駄な理性が正常に機能している。

「神様と言つか、イグドラシルが許してくれるなら、今この場であんたにも一発叩き込みたいところなんですが？」

彼の微妙にドスの利いた声に沙奈は肩をすくめる。

その割には呑気に鼻歌を口ずさんでいる余裕があるのでから、大して効果はない様子。

「ああ、怖い怖い……TW内のホワホワ可愛いコーリンちゃんは何処に行っちゃったんだか」

「そんな可愛い生き物は何処にもいなければ？」

悠早は口調やら振る舞いやらをどうするかと昨日一日随分と悩んでいた。

リアルワールドでゲーム内のように振る舞うのは違和感があったが、この姿で男言葉で話すのはそれ以上に違和感があつて仕方がなかつた。何よりも明らかな男言葉で話すたびに結子に悲しい表情をされてしまつたのがそれなりに効いていた。

結局は、可能な限り中性的に話そつ、と言ひ無難な結論に落ち着いた。

立ち居振る舞いについては流石に『それらしい』しないと落ち着かないという結論に至つた。

結子の評価は『及第点』である。

そんな悠早を眺めながら、沙奈は年末恒例行事の話を切り出す。

「でも、今年の冬の『』のコスプレは完璧だよ、うん。是非ともビシヨの戦闘衣装で売り子やつて欲しいんだけど。絶対人目を引くし、売上アップ間違いなし! ちょうど今回、セリフ系の本だし完璧すぎる、私の計画完璧、一寸の隙もないわ」

「いやね、やらないから?」

悠早は『やはり来たか』と露骨に嫌そうな表情に変わる。

沙奈の熱い語りに、クラスメートの冷ややかな視線が集中するのがわかる。

「やつてくれるなら、漏れ無くサークルチケットで入場させてあげ

るからつー…? 「

その言葉に心が傾く。

「ミケそのものに目的があるわけでもないが、彼はお祭り事はそれほど嫌いではなかつた。

ただ並ぶのが嫌いなためにこれまで参加したことはない。しかし、サークルチケットを使えば並ばず、一般参加者を尻目に悠々と入場できるのは美味しい。流石に何時間も朝の寒い時間帯から並んで待つなど、寒いのが嫌いな暑いのも嫌いだが、彼から見れば正氣の沙汰とは思えなかつた。

しかし、それ以上に彼は人混みが嫌いであった。

そもそも、ミケにそこまで苦労して行きたいほど思い入れもない。

「…………」

「どう?」

「…………」

「終わったあとで、何処かでお茶を奢らうじやないですか?」

「…………」

自分で「好いな」と思いながらも、悪くもないかと思えてくる。

「今一瞬揺らごだでしょ」

「…………気のせいだね、うそ」

「」で釣りられたら負けだらつて、悠早はとうとうせず否定をしておく。

そんな彼の様子をあともう一押し、と沙奈は彼女の切り札を切ることを決める。

「ちなみに今回の薄い本は、ビショ同士の丘モノです！…一応はR18です、ゲフゲフ」

流石に学校の教室と言つ場を考慮したのか後半はトーンダウンしている。

クラスメートの幾人かがピクリと反応した件については、悠早は見なかつたことにしようと心に決める。良くも悪くも沙奈がマンガやイラストなどを描いていることは広く知られており、ネット上でも積極的に公開していく、固定ファンもそれなりにいる程度には彼女は絵が上手い。おまけで学校の催し物などのパンフのイラストは大体は彼女が描いている。

それに加えて何冊かはラノベの表紙なども担当していたりもする。彼女もある意味で有名人なのである。

しかし、それ以前に『お前18歳未満だろ…』と全力で野暮なツッコミを入れるべきなのかどうなのかと真剣に考えこむ。

「……ああ、これだから腐女子って生き物は」「ああ？」

悠早は地雷を踏んだらしくと背筋が寒くなる。

「あんなホモ好きの生き物と一緒にしないでくれる？」「…………はあ」

「10年ほどは完全に腐女子＝女オタつてされてるけど、本来は腐女子＝ホモ好きな連中なわけだよ、おーけー？私は、あくまでも、『かわいいおにやのこ』が大好きなんだよ…普通のカツプルもいいし、百合もいいよ…ただし2次元に限る」「教室で叫ばない」

クラスメートが明らかにドン引きしているのが判るほどに空気が

冷たい。

悠早はとりあえず、心中で平穏な冒休みを搔き乱したことに対する詫びを入れておく。

しかし、沙奈の言葉は終わらない。

「ホモが嫌いな女子はいない、あれは嘘だ。なぜならわたしゃ嫌いだ！！」

「はあ……」

「……『ビリでもじょ』などと火に油を注ぐ度胸はさすがにない。

「ハアハア……そういうわけだから私を腐女子とか呼ぶな！」「わかつたから、わかりましたから」

そう呟く声には泣きが混じりつつある。

悠早は教室中から集まる冷たい視線に耐え切れず頃垂れてしまう。むしろこの状況で平常心を保っている、保つてられる沙奈や、それが可能な洋一は一体全体どれだけ頑強な精神構造をしているのだろうと常々思うのである。少なくとも、悠早はそこまで強靭かつ周囲を気にしないような精神は持ち合わせはない。
彼はまだまだ一般人であり、そこから外れるべきでないと心に誓う。

「と言うわけだから、売り子お願いねー！」

「了承した記憶はありません」

抵抗してもむづ無駄だと判りながらも、とりあえずは抵抗せずにいられない。

幸いないのは、そんな彼に直接向けられている視線は『同情』が

明らかに多いことであろう。

そんな気が重い悠早を尻田に、沙奈が真剣な表情で考え込んでいる様子が鏡越しに映る。

「今日は私もコスプレしようかなあ……せつかく衣装あるんだし」

そんな言葉が沙奈の口から飛び出す。

悠早は全力でその姿を想像して見るが、微妙な表情に変わっていく。

仮想世界における『聖職者』系資格の所有者には2種類の衣装が用意されている。

一つ目は『儀式装束』と呼ばれる如何にも聖職者然とした印象を与える物であり、純白のシルクっぽい生地を使用した全身をすっぽりと覆う『ザイン』のものである。地面に裾が引きずるほどに長く、機能性と言つて葉からは程遠く戦闘にはまるで向かない。メイリアこと優希などはこの衣装を平常時は好んで着ていた事を悠早はよく覚えている。

もう一つが『戦闘装束』と呼ばれるもので、動きやすさを重視したデザインの物であり、一般的に防具・装備と言つた場合にはこちらの衣装を指す。2次資格である『Priest』ならば黒を基調とした修道服であるが、全体的に身体のラインがはっきりと出る上に、スリットが際どいなど動きやすいが、余り好んで着たくないと言つのが悠早の感想であった。これが『Bishōp』になると生地が白と青を基調とした随分と華やかな物に変わる。

そして沙奈は2次の『Priest』が現在の地位であった。

悠早から言わせれば、『3次元だと大概に合わないよね、これと言つシナモノ。

そんなこんなで自然と同情一杯の表情に変わってしまう。

「…………」

「……………何れの可哀想なものを見るような田はつ！ い
くら自分が可愛いからつてひどくない！？」

悠早は随分と思考が顔に出やすくなりしこ。
彼はすぐに気を引き締め、何のことやらと言つた表情に戻すが既
に遅い。

「ああでもギリギリ有つと言えば有りなのか……でも、あの服つて
結構際どいよね？」
「じゃかましーー！」

沙奈の絶叫が教室中に響き渡つた。

「まつたく……兄さんは」

諦めにも似た咳きは誰にも聞かれることはない。

そんな冬場の冷たい空氣を更に凍りつかせるアホな遣り取りを、
結子は呆れ顔で眺めていた。

沙奈の腐女子じゃないトークの辺りからドアの付近に居たものの、
顔を出すタイミングを測り揃ねてそのままズルズルと今までその場
で待機していた。しかし、そう言う時ほど兄は片っ端から地雷を見
事に踏み続けているのだから、彼女としては呆れるしかない。内心
で『何でそこでそれを言うんですか！』やら『それは違います！
！』やら、ツッコミを入れるのを我慢するのも楽ではない。

悠早のクラスメートからの生温い視線が痛かつたが、ペコペコと
頭を下げる乗り切つた。

むしろ彼らとしては、結子に適当なタイミングでさつさと間に入
つて欲しかったのであるが、そこまでは上手く伝わっていなかつた。
ともかく、沙奈の絶叫は彼女に丁度よい介入の機会を与えた。

ツカツカとわざとらじじく足音を立てながら結子は一人の元へたどり着く。

「沙奈先輩と姉様は相変わらず騒がしいですね……」

何時になく随分と厳しい表情の結子に悠早はただ怯える。言い訳を必死に考えるが、そもそも自分は悪いことは何もしないという結論にしか彼の思考回路は行き着かない。

それを言つるのは明らかに命取りだと、それだけは確実だと言えた。

「あのね、ゆい……騒がしいのはこいつだけ」

「おお、ゆいちゃん。素晴らしいタイミングでいいところへキ・タ・ワア」

そんな空氣を読まないのが、後ろの沙奈といつ生き物である。結子は危険を察知し、仮想世界で身についた軽やかな且つ優雅、見事なステップをもつて身を翻す。

その姿が男子生徒たちの視線を惹きつけるのに彼女は気づいていない。

「姉様、私帰りますね？」

「ゆいちゃん、逃さないからね……？」

「……ヒツー？」

平熱の低い沙奈の手が結子の手首をガシリと掴む。

見事に三日月型を描く薄い唇に、ボブカットの前髪が彼女の瞳に深い影を落とす。

恐る恐る振り返った結子が思いついたのは『髪が長ければ間違いなく、サダメ』と言う、大概大抵どうでも良いことであった。

悲鳴が『キヤ』と言つよくな可愛いものでなかつたのは、純粹な恐怖から來たものであつた。

「沙奈先輩、それで」用件は何でしょつか……？」

「あのね、ゆいちゃん」

「はい」

結子は「ガクリ」と息を呑む。

「冬コミでコスプレして売り子してもらえないかな？ サークル入場チケットに加えて、終わつた後のお茶も奢つちゃうよ？ 更衣室使用料はもちろん私持ちで！」

肩がガクリと碎けそうになるのを必死に堪える。

横目に見える、遠い目でイグドラシルを見つめる悠早の表情、そして彼女に集まる生温い同情の視線が全てを物語つていた。女子生徒などからは、時折『可哀想』などと言う言葉が聞こえてくるのがわかる。

結子もまた、それなりにシステム外スキルは鍛えていた。

彼女は別にオタクというほどオタクではない。

確かにT Wが趣味になつてはいるが、特にアニメも見なければマンガを読みあさるようなこともなく、それ以外のゲームも殆どやることはない。それでも、ネットの様々なサイトを巡る中で得た『どうしようもない』知識だけはそれなりに豊富であった。少なくとも沙奈の発言の意味を正確に理解できる程度には彼女はオタク方面にも詳しい。

「ミケといふものにも興味はあつても、特に積極的に行きたいとは思わない。

でも行く機会があるのなら一度くらいは行ってみたい。

一般人でないとは言わないが、一般人であるとも言い切れない。そういう類の人間であった。

「ちょっとだけ心惹かれるものはあります……」「うんうん、そうだよね」

沙奈は何度も嬉しそうに頷く。

結子は息を吸い込み、それを一気に吐き出すと口を開く。こう言つ時の決め台詞を、結子は一つしか思い浮かばない。

「だが断る！」

凛とした声が静まり返る教室に響き渡った。

02（後書き）

すこしく中途半端な所でぶつたぎりました、文字数的な関係で。
自分ルールつてやつです、すいません（棒読み）
次回でオチをつけます（マテ

逐一オーバーリアクションだと、悠早は顔をムンクのヨビのよつにしている沙奈の顔を眺める。

どうやら、結子に断られたことがそれなりにショックではあったらしい。

「ヒヒ……お姉さん泣いちゃう」

「勝手に泣いててください……」

古典的にオヤヨと目を右手でこすりながら、アホな嘘泣き声を上げている。

それも、鬱陶しいことに悠早の頭の上で、である。

後頭部で頭突きでもして頸カツクンをカマしてやろうか、でも痛そうだよなど微妙にやる気が無くなる思考を繰り返す。しかし鬱陶しいのでいい加減に振り払いたいのだが、適当にお手軽な方法が見つからないのが悲しい所である。

しかし、突然に鏡に映る沙奈の表情が一ぱッと明るくなる。

(またろくでも無い事を……)

こいつが女でさえなければ顔面に全力のグーパンチを叩き込みたくなるような表情。

お友達パンチなどと言つ生温いものでは到底足りない。

そもそも悠早としては沙奈を友人として認めるつもりは根本的にないのであるが。

横目に見る結子も揃つて随分と険しい表情をしている。

「あ、といひで……」

「なに？」

「何ですか、先輩」

二人の視線が一点に集まる。

そんなに見つめられると照れちゃう、とか宣うて居たのが聞こえた気がしたが、悠早は聞かなかつた、聞こえなかつたことにする。つくづくこいつは社会に出してはいけない生き物、クリエイターにでもなつていってくれた方が社会のため、世のため、人のため、だと彼は思う。

結子は、半ばキレ気味なのを抑えながら後ろ手に拳を握る。

その目が笑っていない笑顔がなんとも恐怖を誘う。

それにも気づかない、気づいていても気にしないのが沙奈という人間である。

「メイリア様とか『ミケ来る予定とかないのかな！？』

二人は次に来る言葉を確信し、目を合わせる。

「…………… ゆい、これ半殺しにしてもバチ当たらないよね？」

「そーですね」

悠早は肺の中の空気を全て吐き出す。

回復系の技を殆ど取得していない洋一と違つて、こんなでも沙奈は仮想世界では支援を専門とする『P r i e s t』である。一応は、それなりの回復能力があり、最悪でも彼自身がヒールをかければいいかと、半ば諦めた表情になる。

聖職者系のヒールって便利だ、と悠早はしみじみと思つ。

内蔵にはダメージが行かないようちようじよ横隔膜の辺りを目標

にして魔力弾を叩きこむ。

それも明らかに洋一に打ち込んだものよりも高威力なものを。

「メイリア様とコーリの超美少女同士の絡みとか・マジで鼻血ものなんですか…………」

「はあ…………？」

沙奈の口から『グベツ』と言つ醜い声が漏れる。

彼女もまさか腹部に向けて攻撃が来るとは予想していなかつた。ヴェスマーハ呪文を必要とせず、尚且つ慣れればであるが、自身を中心にして360度どの方向へも打つ事ができる。それを応用することでの、全周に衝撃波モドキを発生させて雑魚を薙ぎ払うといった簡易範囲魔法としても使つこともできる。

知らない人間相手の攻撃には意外と使い道がある。

沙奈の身体が崩れ落ちて床にへたり込む。

タイミングがピッタリであつたようで、肺の中の空氣を全て吐き出したのかゲホゲホと苦しそうにしている音が聞こえてくる。

クラス中から『良くやつた』的な視線が向けられている。

「姉様」

しかし、結子の表情は険しいままである。

「…………うん？」

「もう少し友人は選んだほうがいいと思ひます…………」

全く以て反論の余地が無い。

「絡まれてるだけなんだけどねー!?」

悠早は無意味と理解していても、言い訳だけは欠かさない。もつとも、言い訳にすらなっていないが。

結子の冷たい視線を一身に受けながら、背後で蹲つたまま咳き込み続けている沙奈へ視線を移す。腹部を抑えたまま小さくなっている彼女は流石に哀れで、少し強すぎたかと雀の涙ほどの同情を向ける。

そんな彼の視線に、『何をしたのよとーー』と恨めしげな表情で睨みつけてくる。

洋一が突然『毒デムパ』でも受信したかのように起き上がる。

突然の問題児の復活を誰一人として喜ばないどころか、露骨に嫌そうな顔をする人間のほうが多いあたりにこの男の人徳のなさが判る。そのあまりの人徳のなさのお陰で、悠早はどちらかと言えば巻き込まれている被害者という目で見てもらえるので助かつているのも事実であるが。

洋一が格好をつけて 全くついていないが メガネを軽く押す。

「いやいや、レティー様に弄ばれる悠早ってのもあー……」

ドンという椅子が倒れる衝撃音と共に、洋一が後ろ向きに倒れていく。

教室内で拍手が沸き起り、よくやったと賞賛の声があがる。

悠早は立派に一仕事したと満足気である。

「ところで、ゆい？」

「はい」

「用事はなに」

悠早は妹が何故わざわざ上級生の教室に来たのかを聞いていなかつたのである。

結子はそうそう、と胸の前でパンと手を叩く。

「えっと、英和辞典貸してください」

二人しかいない静まり返った教室内。

BGMはペンの走る音と、ニュースを読み上げる男性アナウンサーの声。

優希は何をするわけでもなく、ただ呆然と空模様を眺めていた。昼ごろまでは晴れであった天気は、いつの間にか曇へと変わり、今では分厚い雲が空を覆っている。そして世界樹の上部を完全に多い隠しているところから見ても、雲の遙か上にまでそびえる大樹の巨大さが解るというもの。

空気は1段と冷え込み、一桁台前半だらうといえるほど寒さ。そして、何よりも天からちらつく初雪が、より一層その冷たさを引き立たせる。

灰色の空を背景に窓に映る、随分と変わった自身の姿。

今時、随分珍しくなつた深い黒色のセーラー服に赤いタイが映える。

それに比べて、その表情は無感情と言うのが適切なほど厳しくで、生氣のない白い肌は血の気が感じられない程である。今、写真にその姿を納めた写真を人々に見せて、出来の良い西洋人形か何かだと言われば多くはそれで納得してしまつかも知れない。

文句なしの美少女の姿は未だに現実感に乏しい。

その辺りは、所詮は仮想世界の存在である証左かもしれないと優希は思う。

『警察庁の発表によりますと、18日以降に発生した怪物事件は国内だけでも既に37件、死者326名、負傷は4500名を超えたとのことです。また、この異常事態に対し政府は自衛隊の追加派遣を決定し、警察への重装備の配備を検討しているとコメントしています。』

「へえ……」

携帯のニュースから流れるアナウンサーの声は内容に比して随分と淡々としている。

その仕事人らしさはさすがは国営放送と褒めたたえて良いと彼は思う。

少なくともヒステリックに叫び、わざわざ不安を煽るような物言いばかりする各種民放のバカどもよりは余程高評価であった。ニュースと言つ物を根本的に勘違いしているとしか思えない、その体质は数十年前から何一つ変わっていない。

そう、彼の父親は呆れていたのを思い出す。

「ふう……寒いです」

いい加減に公立高校にもエアコンくらいは導入して欲しいと優希は切実に思う。

ここ20年ほどの間に創設された、改増築したような学校でれば導入されているところもあるそうであるが、文明の利器に頼れない旧態依然とした状態はなかなか変わらない。古めかしいストーブは存在しているが、たった一人しかいないというのに付けるわけにも行かない。

こう言つ時に、火属性系の魔法スキルを上げておけばよかつたとつぶづく感じる。

今更言つた所で遅いのであるが。

そんな彼の独り言に近くの席に腰掛け、日誌と格闘している彼女が気づく。

優希から見れば、まあ凡そどこにでも居るちょっとと背伸びをしている女子高生、と言つた風貌の彼女。しかしギャル系というわけではなく、運動系の部活動に所属している活発な印象を受ける……その程度の認識でしかない。

彼も大概大概に他人への興味が希薄であった。

どちらにせよ、少なくとも彼よりは『リア充』と言い切れる人種である。

「本当だねえ……明日はまる一日雪だつて言つてたし」

「寒いのは嫌いなんですか、ね……？」

「私は好きだけどなあ、冬つて……ちょっと寂しいけど、悪くはないと思つ」

優希は冬も夏も、そして春も嫌いだった。

暑いのは耐えられず、寒いのは着こめばいいとは言え限度はある。春が嫌いというのは珍しいと言われることが多いが、単純に花粉症があるからというだけのことだと大した意味はない。結論としては1年の4分の3が嫌いな季節であり、快適に過ごせるのは精々10月と11月の秋、そして初夏の5月の3ヶ月ほどに過ぎない。

真介などは『その思考が悪い』と言つが、嫌いな物はどうにもならない。

(可愛い文字を書くね……)

彼女は黙々とペンを走らせる。

優希はそんな彼女のペン先を何となしに見つめている。

丸みを帯びた丁寧でありながら可愛らしい文字を見ながら、優希は自分がやはり男なのだと実感する。幼い頃から硬筆を習わされたおかげで、字が決して下手なわけではない。むしろ模範的といつても良い行書体はどうしても堅苦しい印象を与える。これが英語であれば、その筆記体は流麗で美しく、割と女性的だといえるかも知れない。

教師受けは良いが彼はあまり好きではない。

並んでいる2種類の文字を見るとその違いがはっきりと見て取れる、

「よしひ、終わった！」

「おつかれさま」

彼女は日誌で机を叩き、トントンという小気味よい音を立てる。

「藤宮さん、日誌の提出お願い！」

「わかりました」

優希は彼女から光沢のない時代を感じさせる学級日誌を受け取る。私立学校に進学した中学時代の友人の話を聞けば、IT化がほぼ完了していると言うのにこの学校のアナログさはいつになつたら変わらぬのかと考えこむ。一部の人達に言わせれば、そのアナログさ加減が良いらしげ、彼にはその感覚はわからない。

あと数十年もしたらまた違うのかも知れないが。

そんな思考の海に浸つていると、彼女は革製のカバンを掘み立ち上がる。

「それじゃあ、またね！」
「はい、また」

パタパタと随分と短いスカートを翻らせて、彼女は教室から駆け出していく。

その下に青紫色のハーフパンツが覗いていたのに、優希は苦笑いする。

両腕で学級日誌を抱えて、ゆっくりと階段を下っていく。昇降口で何やら話しかんでいる数名の男子生徒の中に、優希はよく見知った顔があった。

取り込み中の邪魔をするのも悪いだろうと、本音は面倒くさいことになりそうなので関わりたくないのでも、気づかぬふりをして素通りをしようとした試みる。これが先週であれば気付かれずに通り過ぎることも可能であつただろうが、今の優希は何よりも目立ちすぎた。

一人の男子生徒がその存在に気づき好奇の視線を向けてくる。

慣れつつあるとは言つてもウザいことには変わりはない。

しかし、それなりに出来た人間である彼は嫌な顔の一つも見せない。

「お、メイ。帰りか？」

友人の真介もそれに気づいたようで、手を振つて呼びかけてくる。キラリと白い歯の覗く、無駄に爽やかなイケメン面が何とも小憎らしくて仕方がないが、今はぐつと堪える。別に意識して格好をつけているわけでも、悪意があるわけでもなく、彼という人間の自然な振る舞いがこういうものなのだから文句を言つても仕方がない。しかし、女と言うよりも『女キヤラ』的な視線で見ると胡散臭くて仕方がない。

この感情は何なのだろうと優希はしみじみと思いつ。

「ええ、これを提出したらその予定ですよ」

真介に田で合図を送り、軽く会釈をしてそのまま通り過ぎる

「やつかやつか……ひやひやっと出しますか」

真介は適当に挨拶を済ませて、早歩きで追いついてくる。特に並んで歩くわけでもなく、数歩後ろの地点を付かず離れずといった距離を保っている。

差詰め、お姫様と従者と言つたところだらうか。

「そう言えば、コーリーデビッドだつたよ？」

「コーリですか？ そうですね……多分と言いますか、十中八九、中の人は男の子でしょうね」

そんな事は、実際に会つまでもなく判つていたことだ。

優希はコーリー キャラ名はコリアネだがコーリーと呼ぶプレーヤーが多いが初心者であった頃からよく知つている。そして、かれこれ3年近いその関係を一言で表現するならば愛弟子とでも言つのが適切なほどには親しく、付き合いも長い。

そして、彼がW.O.Yを手に入れるまで、長く愛用していたS.O.Pを託したのもコーリーであった。

出来の良い弟子かと言えば、それは相当地微妙な所であったが。

そしてその妹として紹介された『コイ』は女の子だと何となくすぐ判つた。

彼から見たコーリーは少々『良い子』過ぎたのである。

「まあそりゃそうだわな……うん」

「なんですか？」

「いや、あんな可愛い子が女の子なわけがないなと、ね」

「…………なんと言いますか、身の危険を感じますが氣のせいでしょうか？」

友人の言葉に優希は不躾に嫌な顔をする。
この姿で、ここまで感情を発露するのはこの友人に対する位のものである。

「氣のせいだと思つぞ」

「だといいのですけど……」

「まあ、あれだ」

「？」

それに続く言葉は嫌な予感しかしない。

「メイは可愛いんだけど、何て言うか怖くて触れないってかな……
こう壊れやすい人形っぽいっていうか？ ユーリのほうがまだ身近
つてか、人間っぽい感じがして、見た目はオレ的には好みだなあと。
まあもつちよい、あと3、4歳幼ければ完璧なんだが……」

「はあ……」

雪がちらつく凍えるような空気が、氷点下にまで急速に冷え込んだように感じる。

全身に鳥肌が立ち、凍死してしまひのではないかと感じるほどに体温が下がるのが判る。

露骨にその歩みを早めて距離を取る。

「メイ、何でそこで引くよ！？」

「私は変態さんには関わらない」とを是としていますから」

優希は『フン』とそっぽを向いて歩き続ける。

03（後書き）

この話の中で一番の常識人は多分『優希』だと思います。オチがオチになつていないうつむきな気が……むしろ蛇足、げふげふ。

しかし、6万字書いてようやく悠早のキャラ^{名登場}です。

ゲーム内での名前とかその辺の細かいこといろはそのうち書くかも。

12月23日の木曜日。
明日はクリスマス・イブであり街は何だかんでお祭りムードである。

悠早は学校から程近い飯田橋にある、チーンのコーヒーショップにいた。

雰囲気もムードも何もない店であるが、二人のいる一角は別世界のようである。

そして目の前には、美男美女ばかりのＴＷ内でも不思議と人目をひくと評判の彼女、メイリアこと優希が、何処のお嬢様ですかと言いたくなるほど上品に腰掛けている。英國や仏国の上流階級、貴族のお嬢様・お姫様と言われても全く違和感がない。

その一挙一動、優雅な仕草に悠早も不思議と目を奪われてしまう。路地裏の縁に囲まれた小さな公園の一角、半球状のドームを戴くガゼボ　西洋風あずまや　の下での光景を思い出す。周囲に多数の猫を従えて、白亜の椅子に腰掛け、いつも優雅に本を読んでいた姿。

午後の一時を人知れず静かに過ごす大司教。

優しい声音で『ごきげんよう』といつも迎えてくれていた。

悠早にとつては戦闘中のイメージよりもそちらの印象のほうが余程強い。

その現実離れした光景に比べれば、現状は随分と馴染みやすい。しかし、時折その姿が今の彼女に重なる。

「それにしても、日本はまだ平和でいいですね」
「平和と言えば、確かに、まあ平和なんでしょうけど……」

世間一般は断続的に発生する異変のお陰で騒がしくはあるが、それでも経済活動は止まらない。

優希はふと何かを思い出したように唇を開く。

「ユーリ、昨日のニュース見ました？ イタリアでしたっけ……」「大変らしいねえ」

異変が始まって以来、今のところ池袋を除けば最大の災厄の発生があった。

全世界のテレビ局がそれをトップニュースとして報道した。

それまでの断続的かつ小規模な『魔獣』騒ぎとは比べものにならない規模の被害。しかも、それは今後も似たような『異変』が発生する可能性は余りにも高いと、はつきりと断言することが出来た。だからこそ全世界が恐怖し、混乱の中にあると言つて良い。

それは日本も決して例外ではないのであるが、あまり大きな騒ぎにはなっていない。

北イタリア、ヴェローナ近郊の街でそれは発生した。

過去に土葬された大量の遺骨、それが『Skeleton』系のアンデッド・モンスターとして大量に地上に湧き出したそうである。それは一晩で街を丸一つ文字通りに『全滅』させ、更には死した街の住人達をゾンビという形でアンデッド化してその数を増したのである。今では完全なる死者の蠢く街へと変えていると言つ。バイオハザードも真っ青な状況が現実に展開していた。

その状況は上空からの偵察によつて、街は完全に不死者達に占拠された事が確認された。

更に郊外へと歩みをすすめる姿も目撃されている。

「よりもよつてアンデッドですからね……ＴＷ仕様だと相当地に厄

介なことになります

「ああ、そう言えばそつか……」

「ええ、あれは……」

二人は顔を見合わせる。

仮想世界、TWにおけるアンデッド系モンスターは、他のゲームとは大きく異なっていた。

一般的なRPGを含めて、モンスターにしろプレーヤーキャラクターにしろ『HP』が存在し、0になると『死』と見なされて存在が消滅するのが普通である。それはTWにおいても基本的には踏襲されていたが、いくつかの属性を持つモンスターはこの決まりが通用しなかつた。

もちろんTWにおいても、7年前のゲーム開始当初は他のゲームと同様の仕様であった。

しかし何故か、2年前の事実上のリニューアルにも近い大規模アップデート後にそれが変化した。

特殊属性として『不死属性』及び『霊属性』を持つ魔物は通常攻撃では倒せない。

物理攻撃や一般的な魔法攻撃ではHPは1までしか減らすことができない。

それでは倒すためにはどうすれば良いかといえば、完全に燃やしそうにしてしまうか、原型を留めないほどに破壊すると言うのが『誰でも可能』な対処方法であった。ただ、それは余りにも手間がかかるため、まともに狩にならない。

そこで最も簡単な方法は『聖職者』系資格を持つキャラクターが使用できるテクニックの中で、『浄化』効果を持つもので止めを刺すと言うものである。例えば『Temple Knight』が使

用可能な各種聖属性攻撃や、プリーストの『Asperatio』によつて聖属性付与した武器による攻撃などがある。

「」の謎仕様について、開発元はこれが本来予定されていた『仕様』であると言ひ張つていた。

当初は多くのプレーヤーが反発したものだが、今ではそういうモノだと認識されている。

もし、それがそのまま反映されていた場合には聖職者資格所有プレーヤーの数によつては、効果的に対抗するのが極めて困難になることを意味している。

優希などは近代兵器による爆撃で対処できるのではないかと考えている。

最悪の場合は『核』でも使用して焼き払えれば良いのでは、などとも思つてゐるが。

それがどの程度現実的かといえば、全く現実的ではない。

「あれは日本で起こり得ますからね……」

「そなんですか？」

「ええ、日本も江戸時代までは割りと土葬も一般的でしたから」「なるほど」

高火力を生み出すことが容易でなかつた時代では、何処の国でも『土葬』が一般的であつた。

当たり前であるが人体の70%は『水』であり、水を多数含む人体を燃やすのには莫大な燃料が必要である。産業革命以前の時代では『火葬』は困難であり、それは日本でも同じである。

今でこそ火葬が一般的であるために忘れがちなことである。

「でも、日本はまだプリースト系プレーヤーが多くたので、まだマジだと思いましたね」

「ああ、そう言えば海外はメイジやファイター系が多数ですっけ」

悠早はタブレット端末で去年のワールド統計を眺める。

全世界、各地域、各国ごとのプレーヤー統計情報は運営会社が半年に一度であるが、かなり詳細に公開していた。キャラクターの男女比に始まり、各資格所持者の比率、ランク帯情報などが代表的な項目であり、各国のプレーヤーが好むクエストやダンジョンと言った物も含まれていた。

流石に世界で5000万を超えるゴーザを有しているため、その情報はそれなりに有意義である。

結論としては、凡そ他のゲームと似たような傾向を示す。

日本、韓国、台湾辺りでは比較的、メイン・サブのどちらかで『Priest』を始めとして『支援』キャラを持つ、また魔法職のプレーヤーの比率が高い。逆に欧米だと支援系専門のプレーヤーが少なく支援も少し出来ますという程度の魔法職や、近接戦闘を好むゴーザが多いと言う結果が出ている。

それは世界ランク上位プレーヤーを見ても似たような傾向がある。

「その時はその時ですけれど……ね？」

「ハハハハハ……」

「日本国内で大量の砲弾が飛び交うような光景は余り想像したくな
い。」

日本国内で近代兵器の威力でどうにかなることを願わずにはいられないが……と言つても、既にそれは池袋近辺で実現してしまつてはいる。それも戦力増強確定のおまけつきである。

何時もの仮想世界のような何気ない日常の雑談。

それがログインできなくなつてまだ一週間も経つていないと

の、数ヶ月も顔を合わせていなかつたと思えるほどに懐かしく感じられた。以前はこうして特に何をするわけでもなく、時には何も話すことさえなく静かに揃つて本を読む、そんなただゆつたりと流れしていく時間を愉しんでいた。殺伐とした世界も、一步中心を外ればいくらでもそんな場所があつた。

仮想世界は現代人が失つた『ゆとり』を取り戻すには最高の環境だつたと、今の悠早は思える。

この所慌ただしかつたこと也有つて、こうした時間が随分と恋しい。

しかし、悠早は今日呼び出された理由が結局なんなのか気になつて仕方がなかつた。

「ところで、メイさん？」

「はい？」

「なにか話があるとかメールにありましたけど……？」

優希はさうでした、と表情を緩ませる。

同時に何かを期待するような、そんな目付きをしていくとも悠早は感じ取る。

「そうそう、ユーリは年末にヨミケとか行く予定はありますか？」

悠早はヨミケという単語にガクリと肩が崩れ落ちる。

優希の表情が『あれ?』と不安氣なモノに変わつていく。

「…………はあ

「あら、ひ……聞かないほうが良い事でした?」

そんな申し訳なさそうなメイリアの表情に、悠早のほうが悪いことをした氣分になる。

「まあええ……はあ、知り合いに戦闘装束を着て売り子してくれと言われましてね？」

「それはそれは……」

「…………って、メイさんも行くんですか？」「ミケ」

「私も実のところ似たような理由でして……従姉の手伝いに、何が楽しくてリアルでの衣装を着ないといけないのか」

「お互い大変で……」

要するに、旅の道連れが欲しいということらしいと理解する。実際、悠早も彼一人だったならば絶対に全力で拒否していたところであった。

何せただ参加するだけでなく、『コスプレ』と言つおまけイベントが漏れ無く付いてくるからであり、自分一人 沙奈は人数に入れていない での中に放り込まれるのは勘弁して欲しかったのである。

これについては、結子が最終的に折れたことで参加することを決めた経緯がある。

「でも、私はもう3回目なのでそれなりに慣れていますから」「慣れたくないんですけど？」

メイリアはバツが悪そうに目を逸らす。

「なぜ、そこで田を逸らすんですかっ！？」

「…………何故でしちゃうね」

優希は優希で色々と複雑な心境らしい事を察する。

何度も参加している人間だからこそ色々と思つたりもあるのだろうと、悠早は勝手に理解しておく。

彼としては、終了後にすくい勢いでまとめサイトに載せられそれが嫌で仕方がない。

コスプレ広場とやらにて近づかないよと心に誓ひ。

「あと、ジャンル的にはＴＷでいいんですね？」

「そうみたいですけど？」

「それならご近所さんかも知れませんし、ようしきお願いしますね」「いろいろお願ひします……はあ」

仲間が増えるのは喜ばしい筈なのに、嬉しくないのが不思議で仕方がない。

先ほどまでと打つて変わつて肩の荷が降りたのか、嬉しそうなメイリアを見ると『それも仕方ない』と思えてしまう。それだけで色々と許してしまつくらいに彼女の笑顔は眩しい。そして、自分が少なくとも『身内』として認められていることに対するやかな幸せを感じる。

悠早の打算的には『いろいろと借りもあるし』と言つぽくなる。

「あまり溜め息ばかり付いていると幸せが逃げてきますよ」

「もう数年分は逃げた氣がするのでもつ今更だと思いますけど……ね」

悠早は窓の外へと視線を背ける。

すると仮面ライダーのショックカーのように、人が放物線を描いて宙を飛んで行く。

「…………ん？」

悠早は見事な吹き飛びっぷりだと、変に感心した様子で吹き飛ぶ男の姿を目で追いかける。

汚い金髪のいかにもチンピラ、社会の肩、底辺と言つただらしない服装。

男はガードレールに背中から激突し、これまた見事な海老反りを見せた後に転がって止まるが、手足をピクピクと痙攣させており起き上がる気配はない。一見すると大きな外傷はないように見えるが、彼にははつきりと内蔵の何処かにダメージが入っていることが判る。腹部に正面から随分と高威力の攻撃を食らったのだらう。

(魔術攻撃……プレーヤーが居るのか？)

悠早はいざという時のために周辺一帯に索敵の網を張り巡らせる。それに対して、優希は大して興味がない様子で、素知らぬ顔で力フェラテを味わっている。

(メイさん、落ち着いてるなあ……)

数秒後に更にもう一人、数秒後には一名の追加が入る。
二人共揃つて一体何が起こったのか判らないと言つた表情をしているのが見える。

彼らも地面に激突して無様に転がる。

起き上がつてくる様子はなく、一人は仰向けの姿勢で血に塗れた口を金魚のようにパクパクとさせて、荒い息をしている。転がつている三人ともが致命傷ではないものの、全治数週間以上の重症を負つている。

悠早は助けに行くかどうするか悩む。

それ以上に、止めに入るべきかどうかが大きな問題であった。

「その必要はありませんよ、ユーリー」

優希は小さく首を横に振つてその考えを否定する。

「そうですか……」

「別に聖職者資格を持つているといつてもTVの中の話……リアルでは関係のないことです」

「…………」

「少なくとも、私には『あれ』に助ける価値があるとは思えません」「まあ、そうかもですが……」

悠早から見ればこれは一方的な暴行以外の何物でもない。

別に彼が正義感の塊であるというわけでもなく、どちらかと言えば日和見主義的であつてもこれを見過ごしてはいけないようなそんな気がしていた。何が行われているかを正確に把握しているからこそ、曲がりなりにも『法治国家』である日本である以上は止めたほうが良いのではないかと思つていた。

眼の前で行われているのは一言で表現すれば『私刑』の類でしかない。

それも、ここ数日で全国的に広く見られるようになった凄惨極まりない復讐劇である。

それまでに受けた『イジメ』の苦痛、苦しみを何倍どころか何十倍にも増幅しての容赦のないお返し行為。ただ単純に物理的な攻撃による短時間のものだけならまだ可愛いと言える。中には回復系テクニックを持つていてるプレーヤーによる、攻撃と回復の無限ループを使用した数時間以上に渡るような拷問も各地で発生している。

治癒魔法を持つてしても、完全に傷が癒えることはない。

代表的な例を挙げれば、表面的な傷は治せても失われた血液は戻らない。

ダメージはゆっくりと、しかし確実に蓄積し身体を蝕んでいく。

しかし、その回復テクニックの治癒能力の不完全さが、まだ救いとなつているとも言える。

少なくともマンガやらエロゲやらでよく見かけるような、完全回

復を前提とした永久の攻めは不可能なのだ。どれだけ治癒系テクニックが高レベルでも、長くて4、5時間で限界であるらしい。

それでも、最終的に心が壊れてしまった人間も少なくはないと報道されている。

そうでなくとも、一度と日常生活を送ることが困難なほどに身体を破壊されるのが標準である。

今ではすっかりお茶の間の常連となっている。

甲 高く耳障りな女の悲鳴が聞こえてくる。

しかし、周辺一帯の道行く人々は誰一人として彼らを助けようとしない。

関わればどうなるかを誰もが知っている。

この一帯でこれを止められるのは恐らく一人しか居ない。

「今は『彼』の好きなようにさせてあげれば良いでしょう」

そう静かに言葉を紡ぎだす『メイリア』の瞳は笑っていない。

彼女は明らかにこの状況を肯定しているように見えた。

「でも……アレのせいで評判悪くなるのは……流石に」

「今更だと思いますよ？」

ここまで感情のない彼女の声を聞くのは、それなりに付き合いの長い悠早も初めてだつた。

その表情は人形のように無機質で余りにも冷たい。

04（後書き）

相変わらず半端な所でぶつた切り。
この後の公開処刑を書くかどうかで悩み中、悩むなつて?
なくなりました。

悠早は全身はたっぷりと湯を張った浴槽に身体を横たえる。

流れるような銀髪も、今は頭頂部にタオルで纏められている。

温まつて平時よりもほんのりと桜色に色づき、血の氣のある肌は健康的で艶かしく見える。

ほんの1週間ほど前まではギリギリであつたバストルームそのものの規格も、身体が全体的に小さくなつた今となつては随分と余裕がある。170半ばあつた身長も今では162しかなく、体積的にも体重的にも7割程度でしかない。随分とコンパクトでありながら、高性能と言う日本製品のようなスグレモノである。

贅肉のない均整のとれた身体つきは女であつても見惚れるほどと結子は表現する。

と言つてもガチガチのモデル体型というわけでもなく、スリーサイズを測つてみた結子曰く『中途半端に現実的なラインを狙つてきましたね……兄さんらしいです』と何とも微妙な評価を下していた。追加するならばウエスト50センチ台後半が現実で標準だと思つているような、そんな意識が夢の中のオバカさんは数段マシなのだそうだが、何がマシなのかはよくわからなかつた。

そして、冬場でも瑞々しく、シミ一つない白磁のように滑らかな肌は水を弾く。

それもまた、羨ましくて仕方が無いらしい。

彼が言えるのは、現実よこめんなさい、と言つ程度である。

「はあ……」

悠早は天井をボーッと見つめながら溜め息を吐く。

何時もなら、思い切り身体を伸ばしてリラックスしている所だが、今日はとてもではないけれどそんな気分になれなかつた。

夕方の光景と、彼女の表情が脳裏にこびり付いて離れない。

女のようにみつともない悲鳴をあげながら、順番に身体の各部を破壊していく男達の姿。

手首、足首はまず最初に1撃のもとに粉碎され、それに続いて徐々に身体の中心へと近づくように骨を粉碎していく。顔面も腫れ上がり、鼻の骨も折られ、ほぼ間違いなく頸の骨も碎かれ、歯は全て抜け落ち、最後には原型を留めていなかつた。

あれでは確かにもう2度とまともな生活は送れない、それは間違いがなかつた。

そして、『彼』に引きずられるようにして路地裏から引き摺り出された女の姿。

全裸にひん剥かれ、何もかも公衆の面前に晒された上で　　その時点で既に両足両足の腱は切られており自力で動くのは困難だつた　　、彼は女達を犯しはしなかつた。代わりに、最初に何を思つたのか性器を破壊すると言つ行動に及んだ。

その時の絶叫は道行く人の全てが、その歩みを止めたほどに強烈なものであつた。

最終的には男たちと同じ道を歩んでいた。

本能的な恐怖に立ち去る事も出来ず、ただ立ち死く人々の姿。警官すら『何も』しなかつたし、出来なかつた。

「うう……」

吐き気が込み上げてくる。

喉元まで上がってきた内容物を辛うじて再び飲み込み、抑えこむ。人間が肉片に変えられていくのを見せ付けられて、平然としているほど彼は丈夫ではない。

そういう意味では『一人』は異常だったとしか思えない。

彼は愉しくて仕方が無いという様子だった。

三日月型に歪んだ口元からは所々欠けた歯が覗いていた。

満面の笑みを浮かべながらの復讐劇に、人間はこんな表情でこれほど残酷な行いが出来るものなのかと、背筋が寒くなつた。一体どれほどの恨み辛みを蓄積させればこれだけのことが出来るのか、しようと思うのか疑問であった。

そいつは同じ『プレーヤー』である悠早を見とめると告げた。

『邪魔をするな』

他にも恨み節を延々と呴いていた気がするが、それは覚えてない。

ただ、恨めしい表情をして悠早を見ていたことだけは、無駄にはつきりと覚えていた。

彼は誰にも止められる事なく、何処かへと消えていった。

「でもメイさんの……あれも」

彼女の表情を思い出すと、震えが止まらない。

メイリアはその状況にあって唯一人、余りにも冷静であった。

ただ、何を思っているのかも解らない無表情で、その光景をただじっと見つめていた。

それこそ虫けらが羽をもがれ、足をちぎられていく様子を遙かな高みから見下ろしている……悠早はそんな印象を受けた。そこには、変人奇人口ク『デナシ』や人間の肩の跋扈する『W上層プレーヤー』の中でほぼ唯一の『常識人』と祟られた彼女の姿はない。

彼女の見せたあの表情は悠早にとつては衝撃的だった。

「あれでよかつたのかなあ……ああでも、ゆいもこんな時に肉料理

にしなくても良いのに」

事情を知らない結子に文句を言つても仕方がない。たつた1文、事前にメールを出しておけばそれで済むだけのことをしなかつた悠早が悪い。

自分の名前が呼ばれたのが聞こえたのか、湯気で曇つた擦りガラス越しに結子が覗き込んでいるのが見える。テキパキと何かをしていたようであるが、悠早には何をしているのかは判らず、同時にさして興味なかつた。

悠早は特に意味もなく、顔を湯に沈める。

「大丈夫ですか、兄さん？」

その聲音は何時になく不安そつなものに思える。

そんな彼女にごめんと呟くが、その声はただの氣泡となつて消えていく。

「たぶん大丈夫……じゃないかな、きっと」

「食欲もなかつたみたいですし……何があつたかは知りませんけど、程々にしてくださいよ？」

「わかつてるよ、ゆい」

どれだけ綺麗事を並べても、ああ言つ連中を法は裁かない。

裁くことはできても、上つ面だけ反省している振りさえすれば許されてしまう。そして、のうのうと暮らしてまた同じ事を繰り返す。ああ言つ連中は反省などしないし、自分たちの行為を悪いとすら思つていらない。むしろそれを誇りさえもする。2000年代以降に普及したインターネットは『バカ』を炙り出すにはお手軽なものだつた。

それは20年以上経つた今でもまるで変わっていない。

どちらにしても、法が裁かないなら自分の手で裁く、ただそれだけの事にすぎない。

それが法治国家の根底を揺るがすとしても、仕方ないと思えてしまうのも妙な気分だった。

それをやつたらお終いだよ、と悠早は呟く。

「わかつてゐるけどね……そんなこと、ビリーハウツもなし」

こんな事をしていたら上せると判つていながら、再び全身が沈んでいく。

「本当に、仕方のない姉様ですね……」

結子のそんな咳きは届くはずもない。

これ以上、何も考える気が起きず悠早はそつと口を開じる。

どれだけの時間そうしていただか、暫く経つた頃にガラガラヒドリアの開く音が聞こえる。

悠早は何か注文したつけ、やら特に何も頼んでないはずなどと口を閉じたまま思考する。

しかし何も思い出せない。

流れこんでくる冷たい外気が肩に触れる。

「姉様、失礼しますね？」

妙にクリアに聞こえる結子の声に、亀のような動作で頭を上げる。横目に映る、結子の姿に『まだ幼い感じだな』などとピントのはずれた感想が浮かぶ。

いい加減に見慣れたユリアネとしての自身の身体や、彼女の仮想

世界の姿である金髪の美少女である『トイ』の姿に比べれば随分と幼い印象を受ける裸体。全般的に丸く、出るところはそれなりに、引っ込むところもそれなりにであるが、やはり女の子らしい身体つき。

それなり以上に肌には氣を使っているようだ、標準よりも随分白いが健康的な肌。

彼女が本当に母親似であることがよくわかる。

現実感があるようで現実感の全くない光景。

「…………」

悠早はまじう言ひ時にどうひつ反応をすべきなのだろうか、と真剣に考えこむ。

アニメやマンガなりば『おー！？』や『なにやつてんの！？』みたいなノリと様子で慌てふためくのだろうが、良くも悪く不思議と慣れているからこそ反応に困ってしまう。それは、もちろん現実世界の話ではなく、仮想世界の中の話である。

流石にこの年になつて一緒にお風呂に浸かる兄妹と言ひのは世間的におかしすぎる。

しかし、不思議と仮想世界TWだとそういう機会も多かった……。それも自分の身体であつて、そうでないという不思議な感覚のなせる技かもしれない。これがTW以外のVRゲームであればまた違つたのかもと考えられるが、悠早はTW以外をプレーしたことが無いのでよくわからない。

このくらいの事は割とよくあることだった。

だからこそ、T-Sしてから1週間も経っていないところに随分と冷静である。

現実と仮想世界の境界が相当に怪しい。

しかし何もツッコミを入れるのは野暮だろうと、悠早は言葉を

ひねり出す。

「それで、ゆー……なにしてるの？ セめてバスタオルくらい巻いたら？」

その言葉は結子の期待には沿わなかつたようである。

後ろ手にガラス戸を閉めた姿勢のまま顎に手を当てて、真剣に考えこんでしまつている。

しかし、悠早も言い終わつてからそれは違つだら、と呟づく。

「姉様、それは微妙にツツ『//』がずれている気がします」「そう言えばそつかも……じゃなくて」

「//」という場合に正しにツツ『//』は『兄妹』なのにおかしいよね？
と言つ系統のものだら。

同時に、今の状況を兄妹とするか姉妹とするかは相当に微妙な所であつた。

何よりも、かれこれ仮想世界ではあつてもこの姿の場合は、3年以上に渡つて『姉妹』として過ごしてきているのだから尙更に判断がつかない。現実では仲が良い兄妹としての距離感以上に近づくようなことはまず無かつたが、仮想世界では明らかに姉妹の距離感、同性同士の距離感であつた。

悠早は否定も肯定の言葉も思いつかない。

しかしやはり、色々とオカシイという感情が支配的であつた。

「せつかく姉様になつたわけですから、//のもたまには良いかな？、と思つただけです」

「たまにゆいの思考回路がわからなくなるよ……」

それでも、この行動は悠早の予想外ではあつた。

頭を抱える彼の姿を尻目に、結子はひょいとイスに腰を下ろす。

「そうですねえ……私、妹……姉でもいいんですけど、そういうのが欲しかったんです」

「あ…………？」

「だからこれはチャンスだなあと…………そつ思いまして？」

「前後の繋がりがちょっと怪しい気がする件について…………それは気のせい？」

「はい、気のせーです」

少々温めが好みな悠早と違つて、彼女は随分と熱い湯加減を好む。全身にシャワーを浴びながら、鼻歌交じりに湯の温度をほんの少し熱めに調整する。

そんな気持ちよさそうな妹の姿を見ていると『まあこれも仕方が無いか』と思考が傾きかけるが、それは何か違つだろと否定する思考が割り込んでくる。

なかなか1週間そこそこでは割りきるのは難しいらしい。

「でも、意外と…………と言いますか、反応が薄すぎて寂しいんですけど」

「お約束な反応が欲しかった？」

田を細めながら見せる、何処か残念そうな表情にどう反応すれば良いのかわからない。

そんなのを求められても困るけどね、と心の中でシッコリを入れる。

「かなり」

「なかなか難しい注文をしてくれるね…………」

悠早はここ数年で話題になつてゐる一つの言葉、症例を思い出す。それは結子も同様である。

「TW症……」

「たぶん、それかな？」

正式な症状名となつてゐるわけではないが、そう呼ばれる物が確認されている。

この世界でVRゲームと呼ばれるものが一般的になりだして、暫くした頃からポツポツと聞かれるようになつた症状である。ただ、技術的な問題で仮想現実には程遠い物ばかりであつたため、その症状が見られるることは極僅かであつた。それが一躍有名になつたのはやはり『TW』の登場と、2年前の大規模アップデートがキッカケであると言われている。

概要としては、仮想世界の感覚が現実側の意識・感覚に強い影響を及ぼすと言うモノである。

それが『TW症』と呼ばれるようになつたのは、やはりVRMMORPGである『TW』が現実との差を感じ取るのが困難なほどに出来過ぎた仮想世界であつたために、症状が現れるプレーヤーが随分と多かつたからである。

特に、性別を変えてプレーしている場合に、現実側が仮想側の意識に引きずられるように変化することが多い。例えば、行動や考え方、趣向、立ち居振る舞いなどの変化に始まり、ロールプレイをしている人であれば、2重人格に近い状態になる者も居るという。

悠早は、半年ほど前にこれを知つてなるほどと納得してしまった。

「今だから言いますけど……私すごく心配していたんですよ?」

「なにを……?」

「兄さんって、実はホの付く人だつたりするのかなあつて……1回

だけ思わず、あのバカ母に相談しちゃつべらこには

「ハハハ…………それは重症だね」

身体を洗いながら、結子は呆れ顔を向ける。

そして何かを思い出すように、遠くへ視線を向けてから語り始める。

「だつて、部屋を掃除してゐる時にさり気なく漁つてもAVも雑誌も含めてそーいうのが全く出て来ませんし。ネットの履歴とかいろいろ見ても、それらしいものを見る形跡もなく……まあでも、ホモとかゲイとかそつち系のサイトの痕跡もなかつたんですけど。あと、映画とかドラマなんかのラブシーンもすゞく淡々と見てますし?」

「…………あのね、ゆい

「あと沙奈先輩とか、結構ベタにスキンシップしてたのに平然としてたり…………ああ、あの人つて結局どうだつたんでしょうね?」

「…………知らない、それに知りたくもない」

「沙奈先輩が聞いたら泣きそうなセリフですね…………」

「それでいいと思うかな?」

悠早にとつて沙奈の扱いはその程度のものであるらしく。

「そんなわけで……実は、不能なのかな?とか……流石にちよつと心配になつたわけですよ……こつち側開けてください」

「ちよつと…………さすがに狭いから?」

結子はバスタブに腰掛けると、全身を捻つてそのまま湯に足を浸ける。

緩やかな坂を描いている側面にそつて滑り降りるよつこ、足技で無理やり自身の身体の收まるスペースを作りながら全身を潜りこませていく。湯がザバツという音を立てながら溢れるが彼女は全く意

に介さない。

一人であればそれなりに広く感じられるが、流石に一人で入ることは余り考慮されていないために狭い。

「細かいことは気にしないでください」

細かくないよ、と言つ悠早のシツコハ結子に華麗にスルーされる。

すぐに予想通りに、彼女の表情が険しくなっていく。

「…………相変わらず温いですね、ほんとにもつ」

結子は遠慮なく、断りもなく温度調整のシマリを捻り熱い湯をダバダバと流し込む。

ゆっくりとした速度で、しかし確実に広がつて侵食していく湯の温度変化に悠早の表情が歪む。

彼はぬるま湯に、だらだらと長時間浸かるのが好きな人間なのである。

満足気な表情の彼女を恨めしげに睨みつける。

「ちょっと、ぬるま湯につかるのがいいんじゃないーーー！」

「はあ？」

「なんでもないです……」

ガクリと肩を落として口元まで湯に沈んでいく。

ぬるま湯が好きだが、熱いのも決して嫌いではなく、むしろ温泉などは大好物なこともあってこの行動を全面的に非難することもできないのが辛い所であった。

そして、結子の満足気な表情を見ると、これも許してしまったそうになる。

悠早は妹に甘こなヒツジヒツジの聲。

「でも、T-W症って言葉を知つてなるほど、と納得しちゃいましたけどね?」

「ああ、うそ……」

やつそんな事はどうでも良かった。

05 (後書き)

H口にならなによつに頑張つてみた。
次で第2章終わりの予定。

温風が悠早の髪と、肌を撫でていく。彼も人に髪の手入れをしてもらつのが、ここまで心地よいとは知らなかつた。

結子の手が髪の束を掬い上げ、順番に馴れた手つきで、しかし壊れ物を扱うように纖細に水気を飛ばしていく。お風呂上りの兄の髪を乾かすのは、今ではすっかり結子の日常の仲の一コマになつてゐる。長いだけあって乾かすのには時間がかかるが、その内にうとうとし始める姿を見るのも彼女は好きだつた。

理由は単純で、初日の悠早の髪の扱いがA型とは思えないほどに、『余りにも雑』であつたからである。その様子を見た彼女は、『このままだと折角の髪が痛む』と、悠早の腕を掴むと椅子に座らせていた。

最初は教えるだけのつもりだったが、彼女にとつては思いの外楽しそうらしい。

悠早の髪は乾燥具合を見るには実に便利であつた。
濡れると何故か、彼の銀髪は淡い青紫色に染まるが、水気が飛ぶに従つて色が抜けていく。

この現象はTW内では見たことがなかつたので、現実になつて発現した仕様だらう。
どちらにせよ、髪の乾き具合を見るのにこれほどわかりやすいものはない。

「でも、ゆい……やつぱり、これは落ち着かない」

そうボヤきながら、悠早は視線を落とす。
素材は光沢からシルクだと思われる、淡いライトベージュのネグリジエ。

一見するとシンプルなデザインなようで、開いた首元や袖、そして裾を過剰にならない程度に花模様のレースが飾っている。長いスカートは丁度膝のあたりまでの長さと、程よく華やかでありながら大人っぽさを兼ね備えている。

結子が母親の寝室から『無断』で引っ張り出してきたものである。悠早などはいつ購入したかしらないが、年考えよなどと思わず心の中でツッコミを入れた。

それ以上に、そもそも『家に帰つて来ないんだから必要なくね』である。

もしくは『寝袋で会社に泊まりしむ』人間らしくないである。

「いいじゃないですか、似合つてますし？」

「それはそうだけど……ううん」

「何処かの国のお姫様みたいですよ？ 私はどうみても従者ですけど」

「こ丁寧にも正面に置かれた鏡の中の悠早は、そんな感じである。前から見るかぎりでは大分髪が乾いてきたようで、ほぼ何時もの銀色に戻っている。

「ゆいも自分で着ればいいじゃない……」

「イメージ的なものです」

「そうですか」

「はい、せっかく可愛いんですから私を楽しませてください！」「それが本音ね……」

悠早は肩をすくめながら、横髪を持ち無沙汰な左手で弄ぶ。鏡から視線を上げると、テレビの国営放送がいつものようにニュースを淡々と報道している。

ニュースの内容はここ数日は大して代わり映えがない。

ほんの1週間前であれば凶悪事件であつたようなモノですら、今ではトップを飾ることはまずない。人を2、3人殺したとか、一家惨殺とか、どこかで魔獣が出現し数十人死亡やら、その程度は日常茶飯事になりつつある。

そんな今日のトップニュースはまた頭が痛くなる類であった。

『本日、午後……男が**県**の小学校へ押し入り、児童数十名を人質にとつて立て籠もる事件が発生しました。警察は説得を続けていますが、男はそれに応じることはなく沈黙を守っているとのことです』

そんな、ぐだりから始まる事件である。

総合すると、TWのプレーヤーの一人、それも無職の引き籠もりらしい。が、何を思ったのか小学校に乱入し、恐らく教師数名を殺害した上で立て籠もつたということになる。脱出した児童の話によれば、男は反抗した者は容赦なく刃渡り1メートルを優に超える片手剣で叩き切り、女子児童に暴行と言う名の陵辱を加えているらしい。

悠早などはせめて中学校か高校にしろよと、また何処かピントの外れた事を思う。

近辺のプレーヤーが警察に協力し、解放を目指しているとも聞く。そうなれば男の命はないだろう……TWベースの戦闘はそこまで生温いものではない。

本当に、最近は年末だというのに、こんなニュースばかりである。今、二人の周辺が平和なのはある意味で奇跡的なのではないかと思えてくる。

「失う物のない人間ってのは怖いねえ……」

「そうですね、ほんとに」

今はその幸せを精一杯享受しようと悠早は思う。

いずれ、これが崩れる口が来るのだと……本能がそり出すている。
田蓋が重い。

テレビの淡々とした声と、髪の手入れの心地よさが悠早の意識を
微睡みの中へ導いていく。

そのまま田蓋を開じてしまえば、そのまま深い眠りの世界に誘わ
れてしまいそうになる。

結子は髪を撫でながら物思いに耽る。

「また髪伸ばそうかなあ……」

悠早の耳が結子がそんな事をボソリと呟くのを捉える。
彼としては今の髪型のほうが余程結子らしいと思っていた。

1年ほど前までは、彼女の髪も今の悠早と同じ程度　肘の下あたりまで　のロングヘアだったことを思い出す。ある日、本屋へ立ち読みに行つて戻ってきた時には、それはもうバツサリと髪を切った妹の姿があつて驚いたことを思い出した。何かあつたのだろうかと思つて聞いてみれば『重いですから』と言ひ答えが帰ってきて、微妙な心境になつたものだつた。

それが本心かは別として、彼女はそれもつあつからかんとして
いた。

髪の長い悠早としては、TW内ではシステムによつてそれほど重
さを感じなかつた髪が、現実の重力下ではここまで重いとは思つて
なかつた。TWがそれなり以上の現実感とプレーのしやすさのバラ
ンスを取つていたことが、今ではよくわかる。

できればバツサリと切りたいといひであるが結子は認めないだろ
うと考える。

「確かに重いから切つたんぢや？」

「もうなんですかじね……姉様もメイリアさんも、レティさんもみんな長いですし？」

「やっぱり、いいなあって」

そう宣ひ結子の声は、何処か遠い物が感じられる。

「実は切つた翌日に後悔したんですね」

「そう……」

ドライヤーの風の向き先は毛先へと移っていく。

髪を痛めないよう細心の注意を払つて、彼女の手順で進む。

悠早は微睡みに耐えられずに閉じかけていた目蓋をそつと降ろす。

「でも、今のゆこの髪型好きなんだけどね……」

悠早は深い闇に落ちてこく中で、ポツリと呟く。

結子はそんな兄の姿を微笑ましく眺めながら仕上げをしていく。
癖のない髪は梳けば絹のように滑らかであった。

そして最後に、端に避けてあつたネグリジエと同色のカーディガンをそつと肩にかける。

それなりに厚手といっても、暖房が利いてないければ肌寒いほどにそれは薄い。

このままお姫様抱っこでもして部屋まで運べないこともないのだけれど、補助魔法を使った身体強化と充分に高いステータ値から考えれば可能、それをするのもどうかと言つひとと二つもの様に部屋へと毛布を取りに向かう事にする。

横目に見るその寝顔は余りにも穏やかで、本当に天使のようだつた。

そんな姿を見ながら結子は小さな溜め息を吐く。

「相変わらず、仕方のない兄さんですね……」

この1週間、ずっとこの調子であった。

それまでのよつこ、食べてTWにログインし、風呂に入つてTWにログインしと言つ生活は完全に過去のものとなってしまった。以前よりも、規則的かつ模範的な生活リズムが生まれつりあり、現実世界で一人で過ごす時間も随分と長くなつた。

他のゲームに手をだそとは一人とも思つていない。

それだけTWは特別なのである。

彼女はそつと耳に唇を近づける。

起きていれば騒がれそつであるが、幸いなことに起きても分配はない。

「もう言わると伸びしへくなるじゃないですか……」

結子は嬉しそつに兄への抗議の言葉を吐き出す。

こんな生活も悪くはない、とうと思えた。

明日で学校も終わり、ちょうどクリスマスのその日から冬休みとなる。

少々面倒なのは、学校が一期制を採用しているために、まる一日しっかりみつちつと授業があることくらいだろう。そして、クリスマスが終わればすぐに年越しの準備があり、今年はコミケへの参加と言うイレギュラーなイベントもある。準備するものは大してないのだが、一応は一度くらいは着てみるべきだつと考える。

そもそも、無事に開催されるという保証もないが。

それ以上の懸念が彼女だけでなく、世間に広く広まっている。

クリスマス中止を掲げてデモやらアホなことを繰り返す連中や、無駄に大きな力を手に入れた引き籠りやフリーター、大して失うモノのないプレーヤーたちによる『大規模テロ』行為の可能性は高いと言われている。

クリスマスの行動を自粛すべきだという呼びかけも行われている。しかし、それがどれほどの効果があるかは定かではない。警察をどれだけ配備しようとも防ぐのは難しい。

「明日は24日……クリスマス・イブ」

手に嫌な汗が吹き出していくのがわかる。

どれだけの被害が出るかなど、まるで想像がつかない。

「どれだけの血が流れることになるんでしょう……あまり考えたくはないんですけど」

結子は耳障りなテレビの電源を落とす。

暖かな空気を送り出すエアコンの動作音だけが室内に響いている。

「はあ……」

窓の外を見れば、青く淡い光を纏つたイグドラシルの大樹がある。目を凝らせば、それは単なる靄ではない事がわかる。

万病に効く薬となると称される葉から零れ落ちた無数の魔力の塊、それが青い花びらのように散っている。ゆっくりと東京都心の明るい闇夜に溶けて、淡い靄となつて消えていく。それが、大樹全体を覆つて輝いている。

それはライトアップされた夜桜が散るような、幻想的な光景。

これがゲーム内であればどれほど良かつただろうと彼女は思う。

「兄さん……姉様？」

正面から、悠早の細い首に腕を回す。起こさないよう、注意を払いながらゆつたりとその身体を預けていく。

ほんの少しだけ、まだ冷え切っていない体温の暖かさが伝わってくる。

結子は再び耳元へ唇を寄せせる。

「私は、余程のことがない限りは兄さんの味方ですか。それだけは覚えていてくださいね」

この年が、このまま無事に終わることを彼女は祈る。

ちょっとしんみり纏めてみた。

次回、幕間?……ティッシュと西澤が色々と語る?

その後、第3章で『聖夜に死神は舞い降りる』。
最強の雑魚と呼ばれるGGRが相手になります。

人物紹介 + TWの設定など（読みなくとも問題なし）（前書き）

適時と言つ名の、気が向いたときに更新します。
これ以降の登場人物は適時別途紹介。

人物紹介+TWの設定など（読まなくても問題なし）

『登場人物』

澤口 悠早 (17)

たぶん主人公。

今ではストレートロングの銀髪が特徴の美少女。

それほど強くはないがぎりぎり3次資格持ち、作るよりも応用する方が得意。

メイリアの数少ない愛弟子の一人で、武器のSOPは彼女のお下がりである。

愛称はユーリ。

キャラ : Julianne Ernest (ユリアネ・エルネスト)

資格1 : Bishop (司教) 格:Bishop (司教)

資格2 : Sharman (シャーマン)

ランク : 91

Weapon : 杖 - Staff of The Prop
het - Elaris Almacina S - (預言者アルマキナの杖)

澤口 結子 (15)

悠早の実妹、黒髪セミロング+プチツリ目気味。

風属性+斬撃特化のアタッカー、3次資格を目指しているが先は長い。

キヤラ : Yui Elnest (ユイ・エルネスト)

資格1 : Sord Fighter (ソード・ファイター)

ランク : 79

Weapon : 片手片刃直剣 - Howling Wind

A+ (ハウリング・ウインド)

安祥 優希 (17)

プラチナブロンドの東欧系美少女、かなり人形っぽい。

国内ランク33位、国際ランク247位、Meilia Familiy ("Meilia Spellbinding Diagram") のElde r。

支援職としてはTOP3の一角、それ以上に下手な近接戦闘職よりも強いことで有名。

キヤラ : Meilia Sypheed (メイリア・シリフィード)

資格1 : Bishop (司教) 格: Arc Bishop

p (大司教)

資格2 : Sharman (シャーマン)

ランク : 108

Weapon : 杖 - The Wand of Yggdrasil S+ (世界樹の杖)

杖 - Staff of Elnia S-

(エルニアの杖)

レティーシャの中の人 (28)

黒髪の美人だが、見た目はかなりキツく怖い。

国内ランク1位、国際ランク3位、最強の聖職者、唯一の『Car

d i n a l 格所持者。

「つ名は『ボス狂』、『B O S S F r e e k』などなど。
愛称はティッシュ。

キヤラ : Letitia Hirvela (レティーシャ・
ハーヴェラ)

資格1 : Dominicanis (異端審問官) 格：
Cardinal (枢機卿)

資格2 : Dancer (ダンサー)

ランク : 116

We a p o n : M e i s - T h e G r a n d C r o s s
- N e m e s s e i a S + (グランドクロス・ネメセイア)

高柳 洋一 (17)

悠早とは5年来の付き合い、悪友の類で何処からどう見ても立派な
オタク。
あんまり強くはない。

キヤラ : 未定

資格1 : Wizard (ワイザード)

ランク : 74

We a p o n : 杖 - B

片瀬 沙奈 (17)

悠早の悪友その2、腐女子じゃないB-L以外ならなんでも食べる雑
食女オタ。

見た目は立派な委員長だが、中身は結構びづじょづもない。

キャラ : 未定

資格1 : Priest (プリースト)

ランク : 76

Weapon : 杖 - B

遠野 真介 (17)

優希の付き合いの長い友人、無駄な超イケメン、ロリコン、マッチヨ好き。

TW内では大手ギルド所属のアタッカー、それなりに強い。

キャラ : Physalis (サイサリス)

資格1 : Court's Knight (宮廷騎士)

資格2 : ???

ランク : 94

Weapon : 片手両刃直剣 - Mysterious

A+ (ミステイック・カノン)

『解説色々』

1・システム基本

名前

全てのキャラクターはFirst nameとLast nameを持ち、アカウント内では共通となる。

Last nameは共有が可能で、家族であることを示すことが出来る。

結婚した場合には夫婦同姓、夫婦別姓、好きな方を選ぶことが出来る。

上記の紹介で英語名をIN (International name)、

日本語名をJ-LIN（JapanLoca1Name）と呼ぶ。キャラ作成時にどちらか入力すれば、もう片方はシステムが勝手にどうにかしてくれる。

ランク

スキル制のTWにおけるプレーヤーやモンスターの強さの指標である。

現在時点における最大値はプレーヤーが120、モンスターが150となっている。

その判断はシステムが勝手に判別しているため、基準などは不明である。

プレーヤーの最高ランクは世界で116が3名である。

スキル

スキルというのは熟練度を表すパラメータである。

TWは純粹なスキル制のゲームであり、ステータスに影響するような『レベル』は存在しない。

他のゲームでは独立している『Star』『Age』と言ったステータスに関わるものもスキルである。

プレーヤーはステータスと技能、生活のそれぞれのスキルを自由な割合で上げることが出来る。

そこで、自信があるプレーヤーはステータスを抑えて、技能に多く回すということができる。

システム外スキル

システムで定義されていない様々なプレーヤースキルの総称である。どこまでが仕様で、どこからがバグか判らないほどに大量に存在している。

むしろシステム外スキルのほうがシステム定義スキルよりも遙かに自由度が高い。

その代表が詠唱で紹介する『Spelling Dogagram』である。

テクニック

他のゲームで言うところのアクティブスキル・パッシブスキルにある。

テクニックはスキル値と資格に紐付いており、反復使用することで効果が上昇していく。

システムで定義されていない、プレーヤーが開発したテクニックを『オリジナル』と呼ぶ。

オリジナル

主にアクティブスキルにおいて、プレーヤーは独自にテクニックを編み出すことが可能である。

物理+魔術の融合攻撃や、連続技などが知られている。

格

2年前に導入された比較的新しい概念で、『資格』に紐付く。強さそのものには関係がなく、どちらかと言えば権力的な強さを示す。

Priest系3次資格は『High Priest』『Bishop』『Dominicanis』『Pontifex』がある。格は『High Priest』『Bishop』『Archbishop』『Cardinal』の4種類があり順に権力が強くなる。メイリアはArchbishop格のBishop、ティッシュはCardinal格のDominicanisである。

Main Credential

人物紹介内の資格1が該当し、他のゲーム的に言うところのジョブである。

1次から3次まで順にランクアップすることができる。

Sub Credential

人物紹介内の資格2が該当し、他のゲーム的に言うと2ndジョブである。

3次資格を取得することで、1つだけ取得することが出来る。

場合によっては3次資格の取得と同時に自動的に割り振られることがある。

ただし、組み合わせによる制限があり、好き勝手に取れるわけではない。

Guild

最大メンバー数は50人で、ゲームにおけるプレーヤー組織の基本単位である。

基本的には仲の良いもの同士、目的を共有する者同士で集まって構成されるのは他のゲームと変わらない。

Clan

特に強大な実力も有するギルドが盟主になり、その下に多数のギルドを従えて構成される。

大規模なものとなると盟主の下に中小規模クランを従えるようになり、階層構造を形成する。

4大クランと呼ばれるものは全体で数百のギルドと、万に近いプレイヤーを従える。

確保した街や鉱山などの利権を守るために大型化し続けている。

Alliance

階層構造を取り封建制度的なクランに対して、名目上は対等な同盟関係を結んだものである。

実質は幾つかの有力ギルドによる合議制であり、彼らによる支配体

制であった。

その構成要素はより規模の小さなアライアンスやギルドなどからなつていてる。

民主主義的なのは良いが、クランに比べるとどうしても意思決定速度が劣る事が多い。

最大規模のアライアンスである3大アライアンスは4大クランの規模と同程度である。

独立系

4大クラン、3大アライアンスに所属しないギルドや小規模アライアンスは数多存在する。

その中でも、それらの大組織に所属する必要性がないほどの実力のあるものを指す。

Japanese Seven Sisters (JSS) or
big7

4大クランと3大アライアンスを纏めての呼び方。
単純に「Sisters」と呼ばれることがあるが、日本人は「big7」の方を好む。

何故「姉妹」かと言えば、クランとアライアンスがこのゲームでは女性名詞扱いのため。

4大クラン

規模の大きなものから順に列挙する。

- ・アスカリ亞聖会：通称は「聖会」
- ・黒龍幻想旅団：通称は「黒幻」
- ・プロキシマ騎士会：通称は「プロマ」
- ・Heaven's Gate：通称は「天門」

3大アライアンス

規模の大きなものから順に列挙する。

- ・北部イルネス自由都市同盟：通称は「イル同」
- ・東ルグルヴェリア海上同盟：通称は「東ルグル」
- ・西ルグルヴェリア海商會連合：通称は「西ルグル」

三猫同盟

独立系最強と呼ばれ、プレーヤーの平均ランクは95を超える。主人公帯の所屬する独立系アライアンスであり、以下のギルドからなる。

- ・C a t ' s L i v i n g : ギルマスはメイリア
 - ・A R I A C o m p a n y : ギルマスは氷の魔女アリア
 - ・子猫のお茶会 : ギルマスはユアナ
- 多数のトップクラスプレーヤーを有することでも有名。
- 国際ランク100位以内に6名が名を連ねていて、真祖が一人
メイリアとアリア いる。
- レティーシャが言つにはラスボスは「アリア」だそう。
通称は『三猫』である。

3大グループ

世界的に規模競争の様相を呈し始めた状況に対応するために結成された。

- ・ルグルヴェリア海上連合会 = 東ルグル + 西ルグル
- ・イルネス大同盟 = 天門 + 聖会 + イル同（三猫はオブザーバー参加）
- ・蒼き宝石の帝都連合 = 黒幻 + プロマ

規模最大は帝都連合であるが、資産的にはルグルヴェリア海上連合会が最大。

Gift（恩寵）

盟主やそれに近い位置にある有力ギルドは、他のギルドを従わせる

ために『Gift』を使用した。

高性能な装備品や、オリジナルのテクニック、諸々のアイテムを貸し与えていたのがそれである。

それらは無償付与であり、大人しく従っている間は好きだけ使うことが出来た。

そしてそれを反抗すれば奪うと言つ、飴と鞭の使い分けである。

2・詠唱法

TWを象徴するものは『詠唱法』である。

Spellingodiaogram (Family) = 呪文系統

TWを象徴する魔法体系である。システムに依存しないオリジナルの魔法詠唱が可能になるTWにおける詠唱技術体系。

その基礎技術開発者を『Elder』『真祖』と呼び、そこを頂点にツリー状に多くのプレーヤーが利用する。

頂点に近いほど核心に近い技術と知識を持つことが多く、効果的な詠唱ができると言われている。

同時に、人間関係の縮図でもある。

複数の系統を混ぜて利用するプレーヤーは背教者と呼ばれ嫌われる傾向がある。

古くからのプレーヤーはSDと呼ぶことが多く、新しい者はFamilyと呼ぶことが多い。

SD間には互換性はなく、サポートしている機能にも差がある。

今のところ最も高機能なのはAriasisDであるが、難易度も最も高い。

元々はSDの開発者を称していた言葉。

Mage系の『格』の最高峰にElderが追加されたため近年は『真祖』の方が使われることが多い。

確認されている範囲で18人おり、その全員がランク100を超える上位プレーヤーである。

日本人ではメイリア、氷の魔女アリア、狂人コイギスの3人が該当する。

詠唱法

TWにおける詠唱法は大きく2つに分類される。

1つはシステム上で定義された日本語呪文による標準詠唱である。2つ目は、魔術古語と呼ばれる謎言語を直接用いて詠唱する方法であり、古語詠唱と呼ばれる。

全てのSDの詠唱方法論は古語詠唱を前提としている。

Multicastin g(MC:多重詠唱)

複数の魔法を同時に構成する方法論の総称で、以下の利点がある。

- ・MP的な面から見ると、多重度を2、3と上げても消費MPは平方根程度にしか増えない。
- ・詠唱のワード数も同様であり、多重度を上げれば上げるほど攻撃密度が上がる。
- ・使用後ディレイは、MCした技の中で最もディレイの長いもの1回分のみが適用される。

しかし、多重度を上げれば上げるほど詠唱の難易度は急上昇する。普通に読み上げるだけでは3重詠唱あたりが限界と言われる。

FreeCasting(FC:フリー・キャスト)

これはSDに依らない技であり、魔法詠唱しながら動きまわる技術のことである。

これについては留つより慣れりである。

C astin gcast at uschan ge (CCS : 詠唱中斷・再開)

詠唱途中の魔法を中断する場合は通常はファンブルさせる事になる。その場合でもMCなどは僅かながら消費されるために無駄になってしまつ。

魔法詠唱の状態を一時的にスタンバイ状態に落とし、必要なときにアクティブ化させる詠唱法。

C antar eC astin g (C C : 歌唱法)

MCの多重度が3多重度で限界に達するのを打破するための技術。古語詠唱は詠唱時のリズムや音程などを正しく刻むことで格段に安定性が上昇する。

正しく歌えう技術が高ければ高いほど多重度を上げられることを意味する。

これにより実現する5多重以上のMCをSMC (SuperMC) 、7多重以上をU ltr aMC (U MC) と呼ばれる。

10多重以上の詠唱可能なプレーヤーは世界で数名しか居ない。

V aliableC astin g (VC : 可変詠唱)

MCも大多数は事前に教えられている呪文を詠唱する形を取る。それに対してVCは変幻自在にMC用の呪文を構成する技術のことを指す。

P rogressiv eP rovis ionin g (PP : 隨時発動)

CCSの応用技であり、魔法の発動タイミングをMC中に自由自在に制御する。

これによつて時間差をつけての攻撃、緊急時の防御魔法発動、などを
を行う。

Casting-linkage (C- : 協調詠唱)

複数人で一つの魔法を詠唱する方法である。

非常識な規模の範囲殲滅魔法の詠唱などに稀に使われることがある。

古語詠唱とSpelling-language

古語詠唱を構成する要素は『ECC = Elemental Code』と『CCC = Control Code』の2つである。

このうちECCは実際に『火を起す』『水を出す』『凍らせる』と言つた事象を生じさせる要素である。

ECCの命令はCIRC的であり、例えば『水を出し凍らせる』と言つた物が多数存在している。

そして、CCCはプログラムで書つ『if』『for』『jump』と言つた制御命令に相当する要素である。

古語詠唱の呪文はECCとCCCがほぼ交互に繰り返され、繋がつてゐる構造を取る。

Spelling-languageの基本原理は以下の通りである。すべての呪文でCCC部分はほぼ共通であるので、この部分を共用化する。

基本的にはECCを連続で唱え、収束させた上でCCCを唱え、拡散させ次のECCを唱える。

その中で食い合せが悪いECCとCCCの組み合わせがあつた場合には、互換性のあるコードに置換する。

また必要に応じて呪文の詠唱順序を入れ替えて、それらを正しく制御する。

これらを実現する方法がプログラム言語が様々に存在するよつて、元

いろいろある。

そのために、多数の系統のSDが存在し得る。

MCが詠唱時間、消費MPの劇的な減少に繋がる理由は以下の通りである。

ECは1ワード、もつと正確に言えば1音節であり、同様にCCも1音節である。

結局のところ、古語詠唱においてはECとCCの比率が5・5から6・4程度である。

そしてMCの場合はCC部分の長さが多少増えるが、そこが共通化される事になる。

2重の場合はEC部分が10に対してもCC部分は4から6程度になることが多い。

よって、元は20かかっていたものが14・16程度に短縮される。これはMP消費量にもそのまま当てはまる。

そして多重度を上げれば上げるほど1魔法辺りの効率は高まついく。

標準詠唱

標準詠唱は古語詠唱のようないわゆるECとCCの区別が存在しない。

完全に連続した一つの呪文となってしまっているので、呪文を変えることができない。

箱によつて定義された古語詠唱の上に、無理やり開発者が追加のレイヤーを被せたようなものである。

この辺りは、ゲームシステム開発者である西澤の魔法への理解不足であると言える。

それでも、わかりやすいために魔法職の間口を広めるといつ意味で意味はあつた。

武器ランク

上からS+、S、S-、A+、A、B、C、D、E、Fである。

S+：神器

S-：準神器

S-：伝説級

A+：準伝説級

Aランク以上の武器はすべて古代金属製である。

古代金属

ゲーム内で加工はできても、現在では生成する事が不可能な金属の総称。

オリハルコンやミスリル、ホワイトゴールドなどがこれに当たる。

4・モンスター

MBM = Magnificent Boss Monster
ダンジョンやフィールドの最奥に潜むボスの総称。

強さはピンキリでソロでも比較的容易に撃破可能なQueen Antから、果てはランク100以上のプレーヤー数百人でからなければいけないThe World Leaderまでレンジが広い。倒して金銭的に割りに合つかと言うと結構微妙。

M A M B M = Major Arcana MBM

全部で22種のMBMであり、TWを象徴する。

MBMの中では最も弱いものでもMBMとしては中位の難易度。別にコンプリートしても特典はない。

No.02 The Priestess Elnia in Obligation (忘却の女教皇エルニアの亡靈)
ランク113 属性：不死、闇 種族：不死 型：人型 特殊：不死属性

No.06 The Lovers in Captivity (囚われの恋人たち)

ランク114 属性：闇、念 種族：悪魔 型：無形 特殊：結晶体

No.13 The Scarlet Shadow of Grem Reaper (死を呼ぶ深紅の影)
ランク122 属性：魔、炎 種族：悪魔 型：無形 特殊：霊属性

No.15 The Archfiend Baphomet (魔王バフオメット)

ランク124 属性：魔、闇 種族：悪魔 型：亜人

No.21 The W.O.R.L.D. (世界と呼ばれたモノ)

ランク150 属性：無 種族：無 型：無形 特殊：混沌

《資格紹介》

- - 2nd Credential - -

Priest

基本的な支援・治癒・退魔・聖属性魔法の能力を有する。

基本支援と呼ばれる物を提供する、PTの縁の下の力持ち的な存在。

S o r d F i g h t e r

汎用戦士である『F i g h t e r』からクラスアップすることでなれる剣の専門家。

非常に大きな括りであり、ビルドの幅は異常に広い。細剣使いから両手持ち大剣使いまでの全てがこれに含まれる。

K n i g h t

汎用戦士である『F i g h t e r』からクラスアップすることでなれる騎士の基本系。

S o r d F i g h t e r に比べると資格取得条件が厳しいので普段の行いに注意が必要。

これもまた異常にビルドの幅が広いので自己紹介するのが面倒。重装鎧を纏つたタンクから攻撃特化のアタッカー、バランス型となるでもあり。

武器も剣、斧、槍、鈍器、鎌、及びその複合武器と幅が広い。

W i z a r d

M a g e からクラスアップする汎用魔法職、何でも屋、器用貧乏。攻撃魔法、防御魔法、治癒魔法、補助魔法、召喚魔法と何でもできる。

扱える属性も火・水・風・雷・地に加えて、光・闇まで扱える。これも自己紹介が面倒くさい。

- - 3 r d C r e d e n t i a l f r o m P r i e s t - -

H i g h P r i e s t

P r i e s t からランク80以上でクラスアップ可能で、プチ強いP r i e s t。

ランク95以上でB i s h o p、D o m i n i c a n s、P o n

Pontiffにクラスアップできる。

事実上の2・5次資格。

Bishop

Priestからランク90以上でクラスアップ可能で、支援と治癒を専門とする。

単体支援が中心のPriestに対してPT全体支援能力が高い。

Dominicans

Priestからランク90以上でクラスアップ可能で、退魔戦闘を専門とする。

悪魔、不死などに圧倒的な攻撃力を誇り、魔法系ビルトと近接戦闘ビルトの2系統がある。

前者は退魔プリ、後者は殴りプリと呼ばれる系統の発展型である。

Pontiff

Priestからランク90以上でクラスアップ可能で、聖属性魔法を専門とする。

退魔特化のDominicansに比べるとかなり汎用性が高いが、中途半端とも言われる。

Priest系4職の中では人口が最も少ない。

-3rdCredentia from Knight -

Court's Knight (宮廷騎士)

Knightからランク90以上でクラスアップ可能で、攻防のバランスが一番良いと言われる。

癖が無いので迷つたらとりあえずこれがおすすめ。

Temple Knight (聖堂騎士)

KnightsとClericの複合クラスであり、Knightsからランク90以上でクラスアップ可能。

基本的な支援・治癒・退魔能力を持ち、持久力ではCourts

Knightsを上回り、攻撃面で劣る。

Knights系の中ではMPが多い。

Paladin(聖騎士)

Knights系の中では最も資格取得が困難で、圧倒的に数が少ない。

Courts Knightsの事実上の上位互換資格であり、Knights系最強と言われる。

Baron(重装騎士)

男爵が転じて重装騎士の意味であり、Knightsからランク90以上でクラスアップ可能。

全資格中で最高の防御力を誇りタンクに最適、ただし忙しくなる動くような戦闘には向かない。

Conquistador(征服者)

KnightsにおいてPT支援能力を持つ特殊なクラスで、ランク90以上でクラスアップ可能

防御力に少々難があるが、攻撃力は高く、魔法攻撃・防御や治癒魔法も限定的ながら使用可能。

他いくつか

01・一人のハンジニア

時間は夜も10時を既に回っており、辺りの人影はまばらだった。気温は氷点下まではいかないもののほぼ0度に近く、人々の吐く息は白い。

近くに10年ほど前に再開発されたオフィス街があるが、この一帯はその中心から外れている。

そのせいか人通りは疎らで、年齢層もパツと見るかぎり高めである。

最終的に失われた30年と呼ばれた時期を、生き抜いてきた人達だろう。

彼女のその鋭い視線は彼らの姿をはつきりと捉える。

その存在は、この場には些か場違いであつた。

道行くサラリーマン達の視線が明らかに彼女の姿を見止めては、様々な感情を向けてくる。

レティーシャこと新条は店の古風さに肩をすくめる。

昭和の時代を感じさせるような、くすんだ赤煉瓦の外壁と年代物の木製の扉が迎える、小洒落たガード下のバーが静かに彼を迎えている。近代的なビルの中に収まるようなお洒落なバーや居酒屋はあるが、まだまだこの国にもこう言う場所が多く残っている。

そのためには都心部であれば数本裏道に分け入る必要はあるのだが。

この辺りは行動圏内ではないため、このよつな店の存在は知らなかつた。

この場所を選んだのはあの男らしいと彼は思つ。

仮想世界T-Wを生み出した『IZANAMI Entertainment』の本社はこの界隈にある。

だからこの界隈に呼び出されるのは必然であった。

ドアを開けるとまた古風な鐘の音がカラランカラランとなつて客を迎える。

一部の客の視線が『彼女』の姿に釘付けになる。

それを一顧だにせずに、新条は目的の人物の姿を追う。

(居た居た…… 湿氣た顔をしてるねえ、無理もないが)

新条の第一印象はそんなものであつた。

カウンター席にゆつたりと力なく前屈みになつて、酒を仰いでいる男の姿が目に留まる。

そこには世界最大のVRM M O R P Gを作り上げ、エンジニアとしても一個人としても充実した、自信に満ちた表情で街を闊歩していた彼の面影は微塵も存在していない。それどころか随分と急に体重が落ちたせいなのか、ストレス的なものなのか明らかに以前よりも頬がこけている。事業に失敗し、全てを失い多額の借金を背負い込んだ経営者のような、一人の中年男性の姿がある。

その表現はあながち間違つてはいらないだろう。

彼とその友人達が築き上げた会社はもう長くは持たない。

救いはほぼ無借金経営をしていたことと、十分なキャッシュフローが存在していた事だろうか。

少なくとも借金で首が回らなくなるような事はあるまい。

それよりも彼らは自分達がどう裁かれるかの方が、よほど差し迫つた現実的な恐怖だろう。

「はあ…… 見てられない」

さすがに暖かな店内では邪魔な、羽織つていたPコートを脱ぎ去り、右腕に抱える。

彼はツカツカと辛気臭い彼の友人であり、大先輩の元へと足を速

める。

「久しぶりですね、西澤さん」

「……ん？ レティーシャ・ハーヴェラ……………そうか、新条か」「その通りで」

西澤は一瞬誰だかわからないと言つ表情だった。

基本的には開発者側である彼はTWに一般プレーヤーとしても口グインしていたが、それほど頻繁でもなかつた。仮想世界においてレティーシャと実際に顔を合わせることなど殆ど無く、普段はWI Sでの遭り取りが中心だつた。

キャラクター名が表示されるわけでもない現実世界で、すぐ判るようなものではない。

そして、それに気づいて苦笑いが漏れたのを新条は見落とさない。少々意地悪をしてやううと、悪戯心が疼く。

(さて何を頼むかね……)

新条が壁掛けのメニューを見ていると、西澤は『好きな物を頼め』と弱々しい声で呟く。

その言葉にニヤリと口元を歪めて、西澤の酒を横皿に觀察する。

「ああ、マスター。これと同じのをロックで」

西澤は大の酒好きである。

特に高い酒を飲んで、湯水のように金を酒場に落とす。

それを新条もよく知つており、こういう形の注文になるのである。それが何処の国産のなんて銘柄か、そしてその金額が1杯幾らかは知つた事ではないが、少なくとも安いものではないと断言できた。間もなく失職する人間がいい気なものだと新条は苦笑いするしか

できない。

西澤の表情が険しく歪むのが露骨にわかる。

「お前なあ……相変わらず遠慮が足りないな?」

「あら、迷惑料としては安いさぎると想っていますが?」

新条はわざと、とびきりの悪女のような笑みを浮かべる。

「はあ…………まあいいや」

溜め息をつきながら、Jijiは西澤が大人しく折れる。

そして、珍しくチビチビと、それも頻繁に溜め息をつきながら酒を飲んでいる。

時折、何かを口に出しゃつとしては、何も発するJijiなく閉じられてしまった。

(小走りな……)

かれこれ10年近い付き合いの中で、西澤の様々な姿を新条は見てきた。

東工大を主席で卒業し、外資系SIEにて入社し順調に晋升を重ねたと言つのに、それを捨てて退社後は世界最大、並ぶものないゲームを創りだし、ヒート街道で胸をはって来た男の姿とは思えない。

良くも悪くも『半端な天才』と呼ばれた新条からすれば羨ましいことであった。

凡そ10年前の当時、ようやくVRゲームの可能性が広がりつつあった時代。

その当時最も活気のあった非VRのMMORPGで出会い、VR

と言つ時代の波に乗つて幾つかのゲームを渡り歩いた果てにTWの開発へと至つた。新条もTWの開発を聞かされた時、そしてそれを動かすマシンに『箱』を使用すると聞いたときは驚きと共に、期待が膨らんだ。コンセプトは『真なる異世界を創造する』であつた。

莫大な演算能力を持つ『オーパーツ』をサーバに使用した前代未聞のオンラインゲーム。

全ての演算をサーバで完結させ、クライアントはただ送られてきた情報を処理し、それを脳へとインプットするだけに留める。仮想世界を表現するには余りにも貧弱なクライアントマシンの演算能力を、当時最速のスパコンよりも最低でも数百桁高速の『箱』で補い、圧倒的な情報密度に基づいたリアリティを実現する。

数百万のプレーヤーの同時接続にすら『箱』なら耐えられる。

本当の意味で仮想世界が実現する。

それを聞いて心躍らないわけがなかつた。

しかし、最初期のTWは意図的に技術水準を抑えたために不完全だつた。

それも年を経るごとに徐々に『箱』の機能を開放することで、TWは現実へと近づいていった。

真の姿が解放されたのは2年前のことになる。

全てのNPCに人に極めて近い高度な人工知能が搭載、NPCも仮想世界で生活する。

決められた動作しかしなかつたモンスターの挙動も別物に変わつた。

空気感は完成され、唯一『酔わないVRゲーム』を冠するに至つた。

その余りに圧倒的な現実感に、本当の異世界に迷い込んだのではと恐怖したプレーヤーが山のように居たほどである。ログアウトボタンが存在し、それが正しく機能することでプレーヤー達は安心した。

あらゆる」ことが可能となつた。

唯一実装されなかつたのは、それこそ『性行為』関連位のものだらう。

それも単にプロテクトが掛けてあつただけで、それをシステム側で外せば可能だつたのだが。

(それにしても、一体何を実装しようとしたんだ?)

新条の疑問の一つはそれであつた。

既に完成していたものに継ぎ足すようなものがあつたとは到底思えないのである。

(まあ今さらどうでもいいか……)

彼は長い思考を絶ち切つて、西沢へ視線を向ける。

西澤も同じように彼を見ていた。

ついに重い口を開く。

「ところで新条、悪い事実と、かなり悪い事実がある

新条は世界が滅ぶとか言い出すなよ、と苦い顔をする。

「またベタな事を……」

「本当だな……」

「それならお約束に従つて、悪い事実から聞きましょうか」

一体何が飛び出すやらと、興味半分恐怖半分といった状態である。彼にただひとつはつきり言えるのは、何が起こつてもおかしくない、それだけに過ぎない。

「つむ、悪い知らせと書つのは……オレのPCに表示されるログの中に『SSGR Create』を含むログがあった」

「SSGR……それはまた難敵だね」

新条はSSGRと略されるその姿をはつきりと思い描くことが出来た。

実際に仮想世界では何度も剣を交えてきた相手だからである。

2年前のMBM大幅強化前は2度ほどはソロで撃破に成功し、その後もメイリアを含めて身内十数名で挑んでの討伐に成功していた。それを一言で表現するならば『真紅の死神』である。

正式名称は『The Scarlet Shadow of Greem Reaper』であり、JLN（日本語名）は『死を呼ぶ深紅の影』である。大アルカナになぞらえたMAMBの13番ランクは実に122にも達する化物。ランクの低いプレーヤーであればその姿を見ただけで、動くことすらできなくなると言われる。優に2メートルを超える体躯と、3メートル近い大鎌を武器とする。

紅い靄のような身体を薄汚れた漆黒のマントが覆い隠す。その中で一際強い輝きを放つ真紅の瞳。

そして、もう一つこれの討伐が厄介な原因がある。

旧SSGRにも匹敵する強さを持つモンスター、SSGRを守護する『蒼き死神』であるGGRこと『Ghost of Green Reaper』が7体も取り巻きとして付いているのである。それ単体でもランクは107にも達すると書ひ、多くのMBMよりも遙かに強力な『雑魚』モンスターである。それが原因でSSGRの討伐難易度は、ランクから想定される物よりも遙かに高い。

「出現場所によつてはこれまでのモンスター騒ぎの比じやない被害

が出るのは間違いない』

「そりゃ、そうでしょう?』

それが出現した時に、どれだけの戦力を揃えられるかを新条は計算する。

彼自身とマイリアを中心として、彼らのギルド『Chat - S - i - v - i - n - g』の中で東京近郊に居住しているメンツの顔を思い出す。何人もソロで時間をかければGGRを撃破可能なプレーヤーが揃っているため、とりあえず抑えこむには充分であるが、倒すには明らかに『火力』が足りないという結論に行き着く。

彼は頭を抱えるしかない。

そしてそれ以上に悪い話があるといつのが、気を更に重くする。

「それで更に悪い事実ってのは?』

西澤はすぐには答えない。

はつきりしたことは言えないが、と前置きをした上で言葉を紡ぎだす。

「あの箱の中で何か巨大なプログラムが起動を始めている臭い』

「はあ?』

「今までに見たことのない規模のところを見ると……嫌な予感がする』

西澤は自宅のPCのモニタに流れ続ける不気味なメッセージの流れを思い出す。

ログの解析が全く終わっていないために、何が起こっているのかの全体像を掴めていない。それでも端々に見当たる語句を見る限りだと、まるで世界そのものを根本的に作り変えようとしているような、そんな印象を受けていた。

しかし確信は全くない。

少なくとも、現実世界は一応の均衡状態に陥っているように彼には見える。

世間一般から見れば異常なこの現実も、彼から見れば異常なほど安定しているのである。

「西澤さんの危機感の程度がわからない……でも、あなたがそう言うなら相当なんだろ?」

「むむ」

西澤は重々しく頷く。

「オレも注意はしておぐが……」

その言葉は余りにも歯切れが悪い。

今、世界中でこの事態の進行に関する最も精密で、重要な、そして最も多くの情報を有しているのは間違いなく彼だった。その次が、彼から情報を得ている『日本国政府』であり、ついで同盟国の米国だろう。それ以外の国々となると、まともな情報は流れていらない可能性が高い。

しかし、彼がこの場で新条に語れる内容は多くない。
政府から山ほど釘を刺されているのである。

それを最後に会話は途切れる。

西澤は時折、その頭脳で何を考えているのかウンウンと頷いているがその理由はわからない。

まるでそれを話すべきか、話さないべきかを迷つてゐるよつて、その表情は見える。

新条は、そんな彼を横目に極上のウイスキーを　他人の懷で
気持ちよさそうに味わつ。

流石に水のようにとはいが、次から次へと遠慮無く注文しては飲み干していく。

「これは……機密にしておいて欲しいんだが
「…………ん？」

彼はそういう類の話は出来れば聞きたくなかった。
こういつ場合の機密事項とか言うものには碌な物がないと、勘が
告げている。

しかし、一人で抱え込めないのだろうと大目に見ることを決める。

「それと、この国ではないんだが……中位MBM級のヤツが近い
ちにもう一體顕現する」
「…………は？」

新条の動きがグラスを手にしたまま見事に硬直する。
中位のMBMと言えば、MAMBMの下位と強さ的にはほぼ同程
度に当たると考えることが出来る。

具体名を上げるのならば、2番のPEOことINが『The P
riestess Elina in oblivion』、JL
N『忘却の女教皇エルネアの亡靈』辺りが同格になる。恐ろしく強
いと言うわけではないが、取り巻きなしの単体であつても、ランク
100以上の上位プレーヤー5名程度のPTを最低でも編成しなけ
れば倒せない程度には手強い。

しかし、日本でないなら別に良いかと彼は思つ。

「場所はわかつてゐるのか？」

「ああ……恐らく、始皇帝陵だ」

世界遺産である兵馬俑が突如動き出すのは、年が開けて暫くした

頂の話である。

01・一人のハンジニア（後書き）

幕間をもう一本入れるか悩み中。

後日追加予定、3章に進めます。

12月24日、深夜。

間もなく日が変わる時間帯であるが、まだギリギリでクリスマス・イブである。

街はカップルで溢れ、家族たちがその一夜を楽しんだ後。

一部では『聖夜』をモジッて『性夜』等と呼ばれる時間帯。

今年のクリスマスは24日夜から25日にかけて予想されていた降雪もあって、見事なホワイトクリスマスの様相であった。これが何もない、平年であれば街は沸きに沸いただろ。

大雪とはなっていないが、空から白い氷の結晶が落ちてきている。東京都心部でも1センチ程度の積雪が予想されていると、ニュースが報道していた。

多くの人々が幸福な1日を夢見ていたし、そうなると確信していただろう。

ほんの1週間ほど前までは、である。

そんな平和な予想は、残念ながら凡そ大方の予想通りに否定された。

既にこの一夜の惨劇を何と呼ぶべきかとネット上では論争が繰り広げられている。

無難な『血のクリスマス』『血塗れの聖夜（性夜）』に始まり『カップル共ザマー見る記念日』『我が人生最良の日』などと言づ露骨なものから、『審判の日』などまで多種多様な案が寄せられる。しかしそれも決定打には欠けており、議論が収束する見込みはない。

そんなくだらない議論で盛り上がる程度に、ある程度は平和なのであるが。

去年までは恒例行事となり、笑つて済ませていた『クリスマス中

止テモ』は笑えない形で収束したと言える。

どれだけの血が流れたかは、明日に明後日にもなれば判明するだろ。う。

「ハアハア…………なんだよ、あれ……」

彼は舞い降りる雪の中を逃げていた。

それも全力で、ひたすらに走り続けている。

立ち止まれば、少しでも速度を緩めれば命がない……そう思えて仕方がなかつた。

振り返ることもしない。

今日ほど、深夜にわざわざ『なにかつまむ菓子が欲しい』と言う理由で、コンビニへ出かけたことを後悔する日は2度と来ないだろう。

これまでの人生で初めて人の『死』を確かに見た。
それも安らかというには程遠い、忘れてても忘れられないような凄惨な死に様をある。

(死神……あれば、そうとしか)

彼が目にしたのは、腹のあたりでバッサリと真つ二つに両断された人であつたものだつた。

帰宅途中のカツブルか何かだつたのだろうと予測する。
まず最初に見かけた小奇麗に着飾つた男。
そこから暫く離れた地点に転がつていた今時の女。
そして、蒼く輝く大鎌を掲げる、感情の感じ取れない『靈のよう』な『死神』の姿。

(でも、あれってモンスターってやつだよな……)

彼も、頻発する化物騒ぎをニュースでは知っていた。

しかし、それがどれほど危険なものなのかはまるで認識ができないなかつた。

目の当たりにして、初めてその恐ろしさに氣付かれる。

死神は音を立てる事なく追つてくる。

空中をホバリングしているのだろうと、彼はそんな事を考えている自分自身がおかしかつた。

大声で叫んで助けを求めるとい、しかし助けが来たといひでじりてこない。

あれにこの辺りに住んでいる住人が対抗できるとは到底思えなかつた。

家に帰れば助かるとは到底思えなかつた。ドアを締め鍵をかけ、チェーンを付けたとしてもあの化け物は容易く、決して薄くはないドアを裂いてしまうだろうと彼は思う。警察署、交番へ駆け込むのも意味はないだろう。あの化け物たちに対し警官達が無力だとうのは公然の事実であり、だからこそ対応のために自衛隊が出てきているのだ。

それこそ戦車砲まで使わなければ撃退できない相手に、拳銃程度で立ち向かえるわけがない。

あれに生身で対抗できるのは『プレーヤー』達だけだつた。

(どうするよ……家中へ逃げても)

助かる可能性は限りなく低いが、それがベターだろうと判断する。少なくとも余計な犠牲者を増やさずに済むのだから、死後に文句を言われるようなことはないだろう。

死んだ後今まで『あの男のせい』などと陰口を叩かれるのは堪つたものではない。

見慣れた家の姿が目に入る。

ドアの前へにたどり着くと乱暴に取つ手を回して、一気に引っ張る。

精々10分程度しか出かけないのだからと、鍵をかけなかつたことがこんな所で幸いするとも思つても見なかつた。

ドンという鈍い音を立てて、乱暴にドアを閉じる。

視界の端に蒼い死神の青い手が映つていたような気がするが、もう気にしない事にする。

鍵をかけ、チエーンを繋ぎ、靴を履いたまま玄関から続く廊下を走る。

階段を駆け上がる。

自分の部屋に駆け込み、更に内側から鍵をかける。

窓が正しく施錠されている事も確認できた。

「ハアハア……まだ死にたくねえよ」

彼はその場に崩れ落ちる。

ベッドの掛け布団を引っ掴むとそれを頭からかぶる。

あんな死に方は真つ平御免だつた。

あの二人は即死できたのだろうかと、そんな嫌な想像を巡らせる。もし万が一にも暫く意識があつたとすればそれは地獄だろ……そんな状態、死に方は想像したくもない。これから自分が同じ目に会うかも知れない。差し迫つた死の恐怖に、体温が下がり体が震える。心臓が早鐘のように打つているのが感じられる。

頭の中に思い浮かぶ自身の死の光景を必死に振り払う。

どれだけの時間が過ぎたのか、彼には判らない。数分かも知れないし、數十分かも知れない。

彼の精神は少しづつ落ちしていく。

「…………来ない？」

その夜、部屋の片隅で小さくなる彼のもとに『死神』は姿を表さなかつた。

24日、夕方。

「ねえ、姉様……それにしてもオタクの妙な結束力って凄いですよね？」

結子はシニジミとした表情でそんな事を言つ。

「そうだねえ……」

「見事にオールスター勢揃いです……しかも海外からの支援もありますよ？」

「これとか、フランス系の大手じゃないつけ？」「だと思います」

悠早は目の前の情報が示す事実に、呆れを通り越してもはや笑うしかない。

二人はタブレット端末に表示されたとあるページを見ている。

ここ数日のネット上におけるTWの　自己中で有名な　日本国内4大クラソと多数の　自分本意な　大手独立系ギルドの動きを見て、そう評さずにはいられなかつた。

V R M M O R P G であるTWにおいては他のゲームと同様に、プレーヤーの創設できる組織が存在していた。少々変わつてゐるのは『Guild』に加えて『Clan』、そして『Alliance』の3種類が用意されていた事である。一応はギルドが構成の基本單位で、大きくとも50名以下の規模であり、仲間内のための組織で

ある。それに対しても、クラランは、特に強力なギルドを頂点、つまり盟主として多数のギルドを傘下に治めて纏めたものである。逆に多数のギルドが名目上は対等の関係、実際は有力なギルドによる合議制である。で同盟を結んだものがアライアンスと呼ばれる。クラランは戦闘職による組織で、アライアンスは製造者や商人達の組織であることが多い。

クラランやアライアンスも小規模なものは数ギルド、大規模なものは数百ギルドからなる。

巨大な物になると数千人、下手をすると万を超えるプレーヤーを参加に傘下に納めている。

クラランやアライアンスは彼らが勝ち取った街を始めとした様々な利権を共有し、他の巨大組織から守るために組織されるものである。特に外国勢力との抗争も頻発していたTWでは、大規模な対抗組織の創設は必須だった。

日本国内に目を向ければ、4大クラランと3大アライアンスが特に巨大化した。

それらは中規模クララン・アライアンスを巻き込んで、更に同盟関係を結び3大グループとなつた。

しかし、全てのプレーヤー・ギルドがそこに属していた訳ではない。

それら大組織に属さないギルドの中でも、特に大きな戦力を有する上位ギルドは『独立系』と称される。その数はそれほど多くはないが、大組織からの圧力を跳ね返すために、独立系ギルド同士は緩やかな協力関係を敷くのが標準であつた。

悠早や結子が所属するメイリア、レティーシャ、そしてマリアの3名を創設者とするクレリックギルド『Cat's Living』もそうした独立系の1つである。一応は、レティーシャの友人である氷の魔女アリアの魔法使いギルド『ARIA Company』とマリアの友人が作った『子猫のお茶会』の3ギルドで小アライア

ンス『三猫同盟』、通称『三猫』を形成している。

もつとも、ソロプレーヤーの集まりなので、まとまりとか集団行動と言う言葉からは無縁のギルドである。個人の戦闘能力は無駄に高いが、PTとしてのバランスも悪く 何せ前衛職が異常に少ない

集団としてはお世辞にも強いとは言えない。しかし、たまのギルディベントで行う狩りやMBM討伐でもなければ揃うことはないでの、大した問題ではないらしい。

かつて4大クランの一つとのいざこざがあつた際に、その主戦力と正面衝突した事もあつた。

それに対しても、アライアンスでこれに対抗し、洒落にならない損害を与えていた。

それ以来、触れるべからずな雰囲気が蔓延している節があつた。

「あの、黒幻が……」

「びっくりですよね……本当に」

「三猫も賛同者に名前上がつてるけどね？」

結局何かと言つと『ロミケ警備賛同クラン・アライアンス』の話しがある。

様々な行事に対する破滅的思考、愉快犯的なプレーヤーによるテロ活動の宣言が各所で行われている。それはコミケも決して例外ではなく、10万単位の人間があの狭い空間に集まるのであるから、むしろ格好の標的となっていた。

それに対して、4大クランの一つである『アスカリニア聖会』がプレーヤー達にコミケに積極的に参加し、警備を行いテロリスト共を叩き潰そう、と提唱したのである。それに対する反応は気がついてみれば『4大クラン、3大アライアンス』の全て、更に中堅クラン・アライアンスや独立系ギルド等が次々と賛同を表明している。このまま行くと日本国内のプレーヤーの多くが、会場の治安維持に参加することになるのは確実であった。

何故なら、彼ら大組織の下つ端を縛る『鎖』が存在しているからである。

上層部の意向に背けないのである。

その『鎖』をそのまま残したシステムは性質が悪いと上層部の人間は笑う。

仮想世界において頂点に座る盟主達は『恩寵』『Gift』と言った形で様々な物品を無償で貸し与えた。

それは、例えば超高難易度ダンジョンでしか産出しない古代金属や上級金属製の優秀な武器や防具といった物から、製造などに必要な高級材料、時にはオリジナルのテクニックなどまで様々だった。一般プレーヤーにとつても有力組織の下につくことは、強くなる上で大きなメリットがあった。盟主達はそれを餌にして、次々と勢力を拡大していったのである。

そして、それらは恩寵を受けていた者が反抗すれば、ボタン一つで『回収』して奪い取る。

そのシステムは現実にゲームが投影された今でも『有効』である。優秀な武器や防具がなければいざという時に、モンスター やプレーヤーに対抗できない。

装備が失われれば、奪う側から奪われる側に落ちる。

多くのプレーヤーがそれを恐れていた。

殺生と奪の権利を盟主を始めとした上位ギルドが握っている。

それが現実においても、そのまま盟主達の権力を保証していた。

すでに毎日の参加者の名簿作成が進んでいる。

そうなれば半端なテロリストでは太刀打ちができなくなる。

仮想世界での喧嘩合戦や軋轢は、一体全体どこへ行つたのかと思えてくる。

「今日の夜は寂しい限りだつていうのに……」

「笑うしかないですねえ」

「笑っちゃいけないんだけどね?」

悠早はロイヤルミルクティで喉を潤し、体を温める。そして時計へと視線を送ると、すでに7時を回りつかという時間になつている。

「でもメイリアさんが知らんぷりするとは思いました」

肩を寄せて隣に座る結子の表情は、本当に心底以外といつものだつた。

「何となくそんな気はしていたかな?」

「そうですか……」

「メイさんも、めんどくさがりだからね……それも相当重症な、ね?」

「確かに……」

「でも、期待されたら期待されたなりに、それに応える人でもあるんだけど……」

しかし、クリスマス・イブを前に緊張が高まっている。

コミケ賛同者リストの盛り上がりに比べると、クリスマス護衛などは賛同者が集まらずに苦労を強いられている。

確かに、何が楽しくていやついているリア充共を横目に、大して感謝もされない活動をしなければならないのかと、そういう話である。割りとナチュラルにリア充どもがどれだけ死のうと知ったことじやない、と呟つ意見は多い。

結局は権威あるプレーヤーが号令をかけないために大きな動きには成り得ない。

三猫も個人の意志に任せます、とメイリアとユアナが共同で宣言

してしまっている。

アリアは音信不通状態が続いているが、『ARIA Company』（以下AC）もそれに従うと表明している。

これは一部には大きな失望を与えた。

ソロプレーヤーが中心の三猫は、個々の索敵能力が異常に高い。ほぼ全員が程度の差はあるが、魔力探査のシステム外スキルを身につけている。

特にマイリアや、レティーシャを始めとした『殴りプリ』、ACの魔法使い、魔法剣士集団は半径100メートルを遙かに超えるような広大な索敵能力を有している。これは警備を行う上で圧倒的に大きなアドバンテージとなることは間違いない。

しかし、揃いも揃つて各個人が不参加を表明している有様であった。

要するに『誰がただ働きするか』と言つ考えである。

ソロプレーヤーというのは何だかんだ自分本位の人間が多い。

マスコミなどはそんな彼らの行動を当たり前のよう非難する。それに対して、アスカリ亞聖会の代表は『お前らが給料をきっちり払ってくれるなら、いくらでもやってやる。ついでに、それ前払いな』と、全てのメディアを煽っている。彼らトップから見れば、力のある人間の力を懷も傷めずに、タダで借りようとするのがおかしいのである。

やるならボランティア精神に溢れている人間だけでやれば良い。利がなければ彼らは動かない。

そういう思考回路だからこそ、彼らは頂点にいる。

「ティッシュとか、『そんな事やつてて給料減つたらどうしてくれるんだ！？』だつたつけ……」

「仕事が大変なんでしたつけ？」

「そり、なんでもこれから大晦日まで職場に缶詰だとか」

二人は仕事つて大変なんだとしみじみと思う。

これで納期が伸びれば数百万単位の赤字になると、レティーシャがWebカメラの前で頭を抱えていた姿を思い出す。そして、そうなつたら減給間違いなしだとかで、『ふざけるな！』と珍しく怒り狂つてもいた。

数人がかりでなだめすかして居たのは昨日の夜のことだ。仮想世界に入れない代わりに、ギルドのメンバーたちはまめに連絡を取り合っている。

むしろゲーム内よりも緊密になつていてるほどだ。

「もうすぐ……か

止まることなく、黙々と時は刻まれていく。
惨劇の幕開けまであと数時間。

01（後書き）

すごい勢いで地の文ばかりです。
今まで出てこなかつたゲームシステム的な部分の解説がこれから少
し増えるかも？

鎌の記述を追記。

システムが現実世界に実装した『Gift』は大別すれば2種類である。

しかし、今のところ大多数の一般的なプレーヤーが認識しているのは『プレーヤーがプレーヤーに与える』ギフトだけである。これらは明確にわかりやすい形式で実装され、ご丁寧にもイグドラシル・システムによる『周知』まで実施されたからである。

それが行われたのは21日の事である。

それまでは無制限に大きな力を手に入れたと喜んだプレーヤーの多くは一転して恐怖した。

しかし、これが副次的なものに過ぎないと言つ事は、勘の良いプレーヤーは気づいていた。

制度としての『Gift』の本質は『System Yggdrasil』が『プレーヤー』に与えるモノである。

事実上の新たなる神であり、主たる『System Yggdrasil』を頂点とした、もう一つの『Gift』システムは静かに極少数のプレーヤーにのみ周知される形で実装された。それが今日24日の明け方のことである。

それまで、『聖職者』系資格を含め『格』は意味を持たなかつた。実際的な力の象徴である『資格』に対し、仮想世界での『権威と権力』の象徴であつた『格』は現実世界において意味のないものと見なされていた。実際に顯現当初それらしい何か力が与えられたわけではなかつたのだから当然である。

システムは現実世界に、データを投影するにおいてプレーヤーの『格』を調整した。

仮想世界では単純にランクによつて『格』は決定されていた。

システムは多数のプレーヤーの『資格』はそのままに『格』の格

下げを行つた。

神の代理人として相応しいものに相応しい地位をである。

その結果として聖職者系では格の階層構造が見事なピラミッド型に整形された。世界中で5000を超える数が居た『Bishop』格『所持者は僅か300名程度へ減少した。多くのプレーヤーは『格』のみが『High Priest』や、更にその下の『Priest』へ格下げとなつた。そのため仮想世界ではシステム上有り得なかつた『資格』よりも『格』が低い状態が一般的となつたのである。

それをプレーヤー達は特段気にしなかつた。

意味のないものを気にして仕方がなかつた。

しかし、ついにそれが本当に力を得たのである。

仮想世界では『教会監督官』と呼ばれた制度の実装である。

主たる『System Yggdrasil』は、その権威と権力の代行者に『教会監督官』の代わりに『Servus Serorum Dei』の称号を与えた。キリスト教から引用されたそのラテン語の意味は、日本語に訳すならば『神のしもべのしもべ』である。

オセアニアから東南アジアを経て台湾、日本までの一帯『東太平洋管区』の『代理人』は2名が選出された。

その権限は『プレーヤーが与えるギフト』等とは比べものにならないほどに大きい。

『システムの与えるGiftの与奪をSystem Yggdrasilに進言する権限』

システム的な名称を使えば『破門』を宣告する権限である。

言わば、プレーヤーからあらゆる力を奪う権限そのものであつた。

そして、逆にプレーヤーでない人間にプレーヤー達と同様の『シ

ステムに乗る権利・ギフト』を与える権限も同時に付与された。また、他の『Bishop格』を所持するプレーヤーを『代理人の補佐官』としてシステムに『推薦』する権利も当然のように加えられた。

これらは『代理人』が『破門』を宣告すればそれがただちに有効になるわけではない。

その是非の最終的な審判は『System Yggdrasil 1』が行う。

システムが認めて初めて有効となる。

それでも盟主達が有する権力と比べるものあほらしいほどの権力、そして権威。

新たなる神であるシステムの力に裏付けされた強大な力。しかし忘れてはいけないのは、システムはこの権限をいつでも取り消すことが出来ると言う事。

余りにシステムの意に沿わない行動を取れば権限は剥奪される。

大多数のプレーヤーが『格下げ』をくらつた中で、優希は数少ない『格上げ』を受けていた。

仮想世界での『Arcbishop格』から『Cardinal 格』への1階級特進である。

彼の他にも10名ほどのプレーヤー達が同様の格上げをされていた。

「はあ……」

ベッドに仰向けに体を横たえながら、胸元のネックレスを弄ぶ。材質はオリハルコン、希少な薄水色の宝石『イグドラシルの欠片』を使用したレアアイテム。

今日の朝になつて突如として現れたそれは、システムの代行者の

証明であった。

そんな権限を仮想世界に引き続いだ『えられた、マイリアこと優希はたまたものではなかつた。

しかも、北米の有名プレーヤーがそれを既にネットを通じて公表してしまつたのだから、優希としては頭が痛かつた。彼としては、何もせずに可能な限り『大人しくしてしていよう』と思っていたのである。教会監督官が北米『管区』に登場し、その権限の内容と共に、他の地域にも居ると宣言されてしまつた以上は、日本国内であれば『マイリア』の名が挙がるのは必然である。実際に日本を含む東太平洋管区の監督官の一人はマイリアで間違いないだろうと、ネット界隈では満場一致で結論が出てしまつている。

下手をしなくてもほぼ間違いなく、山のよつな苦情や陳情が舞い込んで来るのは明らかである。

いや、すでに舞い込んできているのである。

その最たるもののが、昼頃にメールが飛んできた『クリスマス護衛企画』の代表のものだった。

「ああ、もう知らない……やつてられない！」

優希は何時になく荒れていた。

普段のマイリアとしての表情はそこにはなく、歳相応の幼を感じさせる。

「何が楽しくて、あんな仕事やつてたと思つてんだろうね？　もう、どいつもこいつも勝手なことばかり……」

寝返りを打ち、枕に顔を沈める。

今の優希の指示は日本国内のプレーヤーひとつには『勅令』その物であると言つて良い。

彼にその意志があるかどうかは関係なく、彼らの力を剥奪する権

限を持つた存在が居るというのは純粹に脅威でしかない。4大クラシや3大アライアンスの掌を返して、締め付けと脅迫に変わった『やり方』の問題で、多くのプレーヤーが疑心暗鬼に陥っている。

とにかく、今現在においてプレーヤーの多くを動かす最も効果的な方法は『メイリア』に勅令を発して貰うことである。

どう見ても、10代の未成年に任せるべきことではない。

「頑張つてください！とか他人事のように……それに、おめでとうございます、とか喧嘩売つてるのかな」

激励のメールも各所から山のように寄せられていたが、それは明らかに逆効果である。

既に旧来のメールアカウントは既に使用しておらず、新アカウントは極親しい信頼に足る人達　二猫同盟関係者が中心　のみにしか教えていない。流石にアカウントごと消してしまえば不審がられると言つことで、沈黙を守つて居ることにするための措置であった。

世界各地の『代理人』達の中で知らん顔を決め込んでいるのは、実はメイリアだけである。

それに対して東太平洋管区のもう一人の代理人は苦言を呈している。

理由は単純で『地域の担当者』を決めるためには『代理人双方の同意』が必要なのである。

そう、『メイリア』が承認しなければ何も決まらない。

それを優希は完全に失念していた。

その時、携帯の着信音が響く。

出来れば出たくはなかつたが、LEDの青点滅が親しい人物だと示していた。

優希は重たい身体を引き起こすと、ベッドの間に置かれた電話を

乱暴に掴みとる。

「電話……誰からだよつー? つて、……ティッシュ?」

たつた一度だけの深呼吸。

それだけで、スイッチが入ったように『優希』であつた表情が『メイリア』へと切り替わる。

「はい、メイリアです」

『おお、めーの字。こん』

電話越しに聞こえるレティーシャの声は徹夜明けのナチュラルハイのように思えた。

そして実はその予想は全く間違つていない。

「仕事は大丈夫なんですか?」

『大丈夫ではない』

「もう……」

ほじほじにしてくださいね、と呆れ気味の声で労る。

忙しいのは理解できるがしっかりと休みをとつて、健康に気をつけて貰いたいところだった。

よくあることではあつたけれど。

『まずは、代理人の就任乙』

「ありがたくないですが、おつありです

レティーシャがハハハと豪快に笑う。

『そろそろ、オーストラリアの代理人がぶち切れてるぞ?』

「どうしてですか?」

『めーの字が、承認しないと地域担当への権限委譲ができるないと?』

「…………」

『どうした?』

優希は怒り心頭ですっかり忘れていたその事実をようやく思い出す。

現実問題として、地域担当を少しでも多く任命しなければ自分の仕事が増えるだけなのである。

基本的に地域ごとの顛末な問題は彼らに処理させ、どうしてもその地域内だけで完結できない、もしくは重要度の高い問題を処理するのが『代理人』の仕事である。そして地域担当が居なければすべての事案が彼らのもとに上がってくるのである。

彼はこの電話が終わったら早速、地域担当承認の決済を始めようと決める。

そして日本国内に居る『Bishōp格』所有者達を地域担当に推薦しなければならない。

そこまで考えて、一つの事実に気づく。

日本国内の『Bishōp格』所持者の多くが何故か三猫、それも彼のギルドに集まっている。

システムが決めしたことなので仕方が無いとは言え、体裁は余りよろしくない。

それもあとで考えようと、問題を先送りにする。

「いえ……実はそれをすっかり失念してしまって…………」

『おい wwwwwwまで wwwwww』

その声には明らかに草が生えている。

優希は穴が目の前にあれば入りたい気分になつてくる。

「それから、ティッシュ」

『なんだ?』

「ティッシュの」ともしつかりと地域担当に推薦しておきますからね?」

『仕方ない、そのくらいは受け付けてやるさ』

「ありがとうございます』

レティーシャは即答した。

流石に断られることはないと思っていたが、万が一の可能性はあった。

彼女は仮想世界においてメイリアが管区から離れる際には、教会監督官の地位を委譲されて引き継いでいた。それはもう多数のプレイヤーに恐れられ、レティーシャが監督官をしている間は明らかに風紀が引き締まっていたと言われるほどである。そして、メイリアに再交代すると治安も悪化するが、それ以上に活気が戻っていた。メイリアははつきり言つてしまえば甘かった。

そうして権限を一時委譲するたびに、随分と嫌そうな顔をされたのを覚えていた。

優希は心から感謝の言葉送った。

しかし、その後レティーシャの口調が日に歯切れの悪いものへと変わる。

短く『心して聞け』とだけ言つと、深呼吸するの音が聞こえる。

『それで、重大かつ非常にマズい報告がある』

『もう、今の状況以上にマズイって……どれだけですか?』

『そうだなあ……例のヘルハウンドが生まれたての子犬に見えるくらいの化物が出現する』

『へっ?』

今のところ、日本国内で最大の被害を出したモンスターは初日の『ヘル・ハウンド』である。

獣系では上級のランク88のNMであった、それを上回る物となれば……それも、レティーシャがヘルハウンドを子犬とまで表現したくなるシナモノが何であるのか予測していく。その辺りから推定できるのは『ランク100以上』であり、PT向けのモンスターであろうという事。

すると可能性は事実上はMBM以外には存在しない。

問題は、それが何であるかという点に集約される。

『SSGRがついに降臨するぞ?』

「…………ええ、つと…………」

『生きてるか?』

「…………」

呆気に取られて言葉が出てこない。

ギルド、アライアンスと言つ単位で、討伐可能な組織は世界を探しても片手で数えられる。

それは、MAMBMの16番以降 塔、星、月、太陽、審判、世界 の色々と強さがオカシイ奴らを除けば、現状では最も難易度が高いと言われるモンスターである。単体での強さは勿論であるが、それ以上に取り巻きとして付き従う『GGR』は強化前のSSGRにも匹敵するほど強力で、強化後の半数以上のMBMを上回る強さを有する雑魚であつた。

事実上SSGRはMBMが取りまくMAMBMである。

優希はレティーシャがどうしてそんな事を知っているのかと疑問に思う。

何が出現するのか判るのなら、もっと効果的な対処を打てるはず

であった。

「本当ですか？」

『まああの男がSSGRの現出が完了したと言っていたからな……まあ間違い無いだろうな』

「あの男？ 何故そんな事を知ってるんですか？」

彼はレティーシャの知り合いの顔を当たるが、それらしい名前と顔は思い浮かばない。

『実は、長い付き合いの大先輩がな……今だから言つが、TWの開発者だ』

「…………」

『いや、実は自分もさ……TWのゲームデザインに暇つぶしに関わつてたんだが』

「なつ！？」

優希は言葉を失う。

何年前の話かは知らないが、初耳であり衝撃の事実である。

少なくとも『暇つぶし』で関われるようなレベルの事ならば、本当に初期段階で関わっていたのだろうと推測する。無駄にどうでも良い思考を巡らせていたことに気づくのは、数十秒という長い時間を要した。そして、それが終わっても尋ねたいことが後から後から湧いてきて収集がつかなくなっていく。

レティーシャは硬直して、話が頭に入つてこない彼を他所に言葉を続ける。

『で、その人にイグドラシル・システムつてのがご親切にも大きなイベントを告知してくれるらしい』

「…………」

『それでだ、SSGR降臨の可能性は3、4日前に聞いてたんだが……ついに正式においてなさつたらしい』

何でそのことをもつと早く話してくれなかつたのかと、ぶつけたくなるがなんとか堪える。

問題は、それが何処に出現するかである。

場所によつては人をかき集めて、PTを編成するのも困難であろう。

招集をかけて、討伐へ向かうとしても大人数となりかなりの困難が予想される。

レティーシャが話さなかつた4日と言つ時間があれば、最低限の準備は可能だつた。

出現地点が東京都心から近いことを優希は祈る。

「ティッシュ、降臨場所はわからないのですか？」

『そこまでは無理らしいな……』

「……そうですか」

優希はそれを聞いて肩を落とす。

三猫だけではなく、盟主ギルドの上位プレーヤーを含めて招集可能な面子の顔を思い浮かべる。

必要なのは何よりもSSGRのタゲを持つタンクを務める重装騎士と、近接攻撃でダメージを与えるアタッカーである。魔法職は『Aria Company』があり、GGRの相手であれば彼のギルドでの人員で充分に対抗できる。それでも討伐しようと思うと、交代要員も組めて三猫のほぼ全戦力を投入する必要があり、安全マージンを確保するには、それでもかなり足りないと見積もる。何よりの不安要素は氷の魔女に連絡がつかないことだつた。討伐が可能か不可能かの答えは可能である。しかし死者が出る可能性が余りにも高い。

優希だけで結論を出せぬよつな問題ではない。

『しかし、雪降る聖夜に死神は舞い降りる……か、システムも粋な事をしてくれるものんだ』

レティーシャの言葉に優希は唇を噛む。

02 (後書き)

こんなクリスマスは勘弁して欲しいですね。
そろそろ急転直下でゆるい話を書きたく(え

後に言つところの『流血のクリスマスイブ』が明けて25日の土曜日。

東京では渋谷や新宿を始めとした繁華街で1000人を優に超えるほどの被害は出たが、それでも幸いなことに当初予想されていた最悪のシナリオまでは被害は拡大しなかつた。

特に大きな被害が出たのは渋谷であり、システム定義された、氷と風属性の複合魔法であり、最大級の範囲攻撃である『Storm Gust』による物であつた。吹き荒れる氷塊の直撃で即死できた者はまだ良かつたが、死にきれなかつた者や、程度の差はあるが凍傷を負つた者などは悲惨であったと言える。それを撃ち放つたプレーヤーは、警戒に当たつていたプレーヤーによってその場で始末されている。

他にもラブホテルに武器一振りを片手に切り込み、ドアを蹴破り室内で行為に及んでいた客が多数惨殺すると言つた事例も多数確認されていた。たつた一人のプレーヤーにより一つのホテルの客が全員死亡すると言つた事もままあつたと言われている。

未だに被害の全貌は明らかになつていない。

殺害まで行かなくとも、強盗・強姦などは想像を絶するような件数だという。

犯人グループの死者は東京近郊で37名、全国で54名に上り、検挙者はその数倍に達した。

その数が多いのか少ないのかは評価が分かれる所である。

最大の問題点として、索敵能力の不足が大きかつたと言つ声は多い。

その理由は単純でシステム定義スキルの『索敵』では、システム外スキル『ステルス』を会得し、使用しているプレーヤーを発見する

ことはできない。それを見破ることが可能なのは、同じくシステム外スキルである『魔力探査』だけである。

警察や警備側プレーヤーも無傷とは言えず、少なくはない被害が出ていた。

そんな彼らを英雄のように讃えるメテイアを、盟主達は鼻で笑っていた。

悠早と結子は、暖房のしつかり効いたリビングで寛いでいる。

窓の外を見れば一面の雪景色、数年ぶりの積雪である。

今も、深夜に比べればマシになつたが、今日一日は雪のぱらつく天気になると言つ。

こんな日は、家中でゴロゴロとだらしのない生活をするのが王道である。

「タツと猫が居ないのが少々残念なところだ。しかし、何故か冬場は常備されている 祖父母からの支援物資 オレンジ色が鮮やかな、ミカンだけでこの場はよしとする。今も、テーブルの上に置かれた、竹製の籠に6つほど入れられている。

しかしやはり片手落ちであることに違いはない。

悠早は朝食というにはばしいぶん遅い、ブランチと言つのが妥当な軽食をちまちまと口へ運ぶ。

ほんの一週間前であれば、休日であつても7時には希少な朝食も摂らずに仮想世界へログインし、ゲームない時間で凡そまる一日を過ごし、昼食を取つて更にまる一日、夕食後による一日、と完全に仮想世界が中心の生活であった。それなりで過ごすなど考えられないと思つていたが、実際そうなつてみると意外と生活できる物だと、悠早はしみじみと思う。

それ以前に、このところネットで何かをする時間も減つていた。

「拒否権がないって辛いですね……」

「全くだね……何でこんな事になつたのかすごい不思議だわ」

二人もそんなメディアの報道姿勢が不愉快極まりなかつた。もつとも、今現在の二人にはそんな事は割りとどうでもよかつたのである。

何せ、彼らにとつてそれ以上の厄介事が降り掛かっていた。

「日本国内だと67名が対象なんですね……見事にキャラ名全員分出てます」

「これは名誉なのが、嫌がらせなのかどっちだろうね?」

「システムのささやかな嫌がらせじゃないですか?」

「…………はあ」

メイリアのブログを見ながら一人は口々に感想を漏らす。途中から悠早はこめかみを押されて、何処かに沈んでいたのであるが。

理由は単純で、メイリアが日本国内の全ての『Bishop格』以上の格所有者を代理人補佐官に任命すると宣言してしまつたためであった。この宣言そのものはSevenSisters 4大クラン、3大アライアンスをまとめてそう呼ぶからも、即日で賛同を得られていた。そもそも、代理人であるメイリアの最初の『勅令』に文句を言う度胸のある人間は居なかつた。

そして運悪くイシステム・イグドラシルによる『格下げ』をくらわなかつた優希もその頭数に入つていた。

彼としては心底勘弁して欲しかつたが。

しかし、メイリアとしても補佐官を身内だけで固めるわけにもいかない。かと言つて、今から対象者リストと過去実績を元に人選をするような面倒な事は嫌だつた。

そんな半ば投げやりな決定で、このような処置となつた。

「つづのギルドは多いですよね……16階つづりなんですね？」

「ああ、イリュさんも入っているんだ……なむ」

リストには見慣れた、もしくは知っている名前がずらりと並んでいる。

聖職者系プレーヤーの中ではそれなりに名の知られている……これが良くも悪くもである。有名人達に混じって、自分の名前が並んでいるのが彼には何とも違和感がある。これも、システムが恐らく雀の涙程度の善意で『メイリア』の補佐をさせるために『格下げ』が無かつたんだろうと書つことが予想でき、こうなつて初めて納得が行つた。

その中にある優希の兄弟子の名前も当然こよりに入つていたのがその確信を強めた。

彼女も悠早とランク的には大差はない。

ギルド『Cat's Living』の平均レベルを押し下げているような、一般人でしかない。

一番の押し下げの原因は『結子』なのであるが。

「でも、『ミケで沙奈と洋一をしばかないと……ね、ハハハ』

深夜3時という時間に送信された『就任祝い(笑)』のメールの内容を思い出す。

「兄さん、ちょっと怖いんですけど……」

「今まで生きてきた中で、あれ以上に殺意の沸くメールはなかったと思うよ」

その時、タイミングよく悠早の携帯の着信音が響く。

「つて、誰だる……びつかせ洋一だらうかび

「あれじやないですか……姉様の声で罵られたいイケナイ願望に目
覚めちゃつたとか?」

「あのね、ゆい。ありえそうな怖いこと言わないでくれる?」「
でも、この所毎日のように悶絶していたじゃないですか

「…………」

脳内で女王様に踏まれて悶えるバカの姿に、全身に悪寒が走る。
またろくでも無い事を想像してしまつたと、激しく後悔するが既
に遅い。

しかも何故に、彼がユリアネの姿で行為に及んでいる光景を想像
してしまつたのかがわからない。少なくとも悠早は、アブノーマル
ではないと自負していた。確かに、洋一を吹き飛ばしているのは、
ナ力ナ力に爽快感はある事は否定できないのであるが。

しかし、それをやるとすれば、それはレティーシャの仕事だろう
と彼は考える。

明らかにその方が『似合つ』からである。

実際に、彼女が原因で妙な性癖に目覚めてしまつたプレーヤーも
居るとか居ないとか言つ。

「ふふふん」

結子は何を考えているのか、なぜか妙に楽しそうである。
何を考えているのかは聞きたくもなければ、想像もしたくはなか
つた。

「…………ん?」

携帯を手に取ると、ディスプレーには見たことのない番号が表示されている。

悠早はその番号に全く心当たりはない。

可能性としては間違い電話か、TWの知り合いからだらうと予想する。

「はい、コリアネですが……」

「最近はTWの知り合いしか電話などかけてこない。

携帯で知らない電話に出る時は、自然とキャラ名で応対するのがデフォルトになっていた。

別にリアルネームで会話していても問題はないのですが、やはり姿がゲーム内のものがあるので『なんとなく落ち着かない』と、話し合いの結果としてそうなっている。

今では、ギルメンやその他の個人的な知り合いも含めて、主要なメンツとは連絡を取れるようになっている。

まだ数人の番号が不明だつたが、それもいずれ埋まるだろう。

とにかく、この1週間は悠早はそれで全く問題はなかつた。

何せリアル知り合いでかけてくるのは洋一か両親、あとは祖父母くらいのものである。

彼は友達が少ない。

「…………え？」

表情が「やつてしまつた」と言つものに変わつていぐ。

まさかクラスメートの一人から、それも根本的に番号すら教えていない相手であつた。番号を交換する以前に、この4月からの間で片手で数える程度、それも恐らく挨拶を交わしたとかその程度のことしかないクラスメートという以外は接点がまず存在しない相手。彼のような日陰で生きている人間とは対極にある、交友関係の広い

リア充である。

それも女生徒と来た。

悠早は『何でこの番号知つてゐるんだよ』と内心でキレる。

彼女は『コリアネ』と言つキャラ名を名乗られて、その声は明らかに混乱しているようだった。

その名前はクラスメートだと沙奈は別クラスがあるので、洋一しか知らない。

この家には固定電話などと二つものは存在しない。

どうやら様々なルート経由で、悠早の携帯番号をわざわざ調べたらしく。

悠早にとっては、一体どんなルートで番号の情報が漏れたのかは気になるところだった。

一番可能性が高いのは教師経由である。

しかし、休日にわざわざ担任に連絡をとつてまで聞くかとこいつを少々疑問が残る。

「って、佐倉さん？ なんでもまた？」

結子は随分と希少な相手からの電話に興味津々といった様子で、瞳がキラキラと輝いている。

彼の表情が徐々に曇つていく。

「え、魔物？」

「何があつたんですか？」

結子は『魔物』と言つ單語に不穏な気配を察する。

時間が経つに連れて、悠早の表情が『めんどくさい』から『ちよつとまで』へ、そして『マジですか』と確実に悪化していく。電話の声も『ええ』とか『はい』とか『そう』と重なる程度だけに減つてこぐ。

兄の背筋が震え、全身から血の気が引いていくのがわかる。携帯を持つ手が小刻みに震えている。

「…………えつと、確認しますけど、それ本当ですか？」

電話越しの彼女の声も、深刻な事態だと判ったのか不安が見え隠れする。

その、兄のただならぬ状態に、結子がそっと悠早のセーターの裾を摘んでいる。

「わかりました……ああ、一人知り合い連れていきますけどいいですか？」

結子はそれが『メイリア』の事だと理解する。

彼女を引っ張り出さなければならない事態というのが、その深刻さを表現している。

大抵のモンスターであれば、悠早の気はあまり進まないが、最悪は悠早と結子を前衛、洋一を後衛、沙奈を支援としてPTを組めば対処できる。ランク80くらいまでであれば、多少手こずる可能性はあっても倒すには充分な戦力がいる。それでダメなら、学校の漫研辺りに所属しているプレーヤーに協力を依頼すれば良い。

それで対処ができない化物が出たと言つことを意味していた。

最低でもヘル・ハウンドクラス以上。

彼女の脳内で、様々な上級モンスター達の姿が次々と思い浮かんでは消えていく。

しかし、曲がりなりにも　武器性能の助けはあるとは言えランク90を超えた3次資格取得者がここまで恐れる化物となると、それなりに数が絞られる。

竜族ならばその大きさや威容からもっと話題になるだろうし、既に大きな被害が出ているだろう。そういう意味では大型獣に属する

『フーンリル』なども除外される。小型中型となつてくると、悪魔系やオーガを始めとした亜人種などの名が上がる。

彼女は直感的に『悪魔』もしくはそれにちかい類でないかと推理する。

実態を隠せる化物であれば、普段は目立たないために話題にも上りにくい。

どちらにしても、その感情は『怖いもの見たわ』に近い。

裾を摑む手に力が籠る。

「それでは、今日の午後2時に飯田橋の東口で」

メイリアの予定も都合も確認せずに、日時を決定してしまった兄に結子は少し呆れる。

それだけ、悠長なことを言つている余裕もないほどの強敵というのが何であるのかが気になつて仕方がなかつた。

眼力めがからで悠早に回答を催促する。

「それで？」

悠早はその名前を二三回出すべきかどうか悩む。

数分間の睨めつこと、結子の根気に彼がいつものように折れる。

「GGRが出たっぽい……みたいだよ?」

「あの青い死神ですよね……超嫌がらせモブの」

一人もそれには何度もPTを全滅させられた痛い経験があった。結子も全てを納得する。

03（後書き）

最後のほうをばっさりカット。

場所は今週3度目となるチヨーンのコーヒーショップ。

こうして彼女と顔を合わせるのは何回目だろうと悠早は思う。始まりの日からまだ1週間ほどしか経っていないのに、銀座での初日も含めればもう実に4度目である。

ベージュのタートルネックのセーターに、膝下、灰色のブリーツスカートと言う、随分と色味のない地味な装いの彼女を目の前に眺める。仮想世界では髪を下ろしている事ばかりであったので、今のように黒いレースのリボンでポニー テールに結んでいる姿はなかなかに新鮮だった。何時もの大人っぽい雰囲気も和らいで、歳相応の幾らか可愛らしい印象が強い。

地味であるが、初日の黒一色に比べればまだ色見がある。

それに比べると悠早は、若緑色の膝下丈のワンピースの上に、襟や裾に多様なフリルをふんだんに使ったクリーム色のガーディガンと随分と可愛らしい。21世紀初頭風に表現するのなら『森ガール（笑）』とでも表現するのが妥当そうな、そんな姿。

今ではすっかり結子の着せ替え人形にされているのは間違いかつたが、それもいい加減に諦めが入りつつある。彼女が着ないような、もしくは似合わなさそうな物までも遠慮なく何処からともなく調達してくれる。

鏡を見ている分には、ただ単に可愛く見えて、妙なテンションに乗せられてしまう。

外に出てから後悔するのももうお約束だった。

メイリアの生暖かい視線が微妙に痛い。

クラスメートとその知り合いの男子生徒との面会が終わっても、

二人は話を続いている。

相変わらず店内やら道行く人々の視線を集めているが、気にしな

いことにしている。

当初に彼らが思っていたよりも、ゲーム内の容姿が現実に反映されたプレーヤーは随分と少なかつたということが判明しつつある。確率的には三千人に一人と言つたところだらうと言うのが定説になつてゐる。それが正しいとするならば、120万人のプレーヤーが居るという日本国内では4千人程度ということになる。

ラッキなープレーヤーを見かけることは思いの外少ない。

そんな二人の話題はと言えば、目と鼻の先の問題である『GGR討伐』と『SSGR潜伏先の割り出し』そして、近く行われるだろうMAMBMである『SSGR』討伐が主な話題であつた。前者は遅くとも水曜まで、後者も可能であれば新年開けてすぐの実施が目標となつてゐる。

少なくとも見た目は見目麗しい少女である一人でするような会話ではないが仕方がない。

やりたくもない事だが、やうざるを得ない。

「それで、メイさん……SSGR討伐PTはどんな感じになるんです？」

「えつと……今のところですが、取り巻きを抑えるPTが7つ、SSGRを抑えが2つ、支援PTを2つ、魔法攻撃PTを2つ、予備戦力1で、計画上は14PTの編成ですね」

「はあ……」

メイリアを中心として進むSSGR討伐計画は悠早の予想を遥かに超える規模の物になりつつある。

これが仮想世界内であれば、現状の計画の半分程度の人員でも十分に討伐が可能のことから見て、彼女がいかに慎重に慎重を期しているかが見て取れる。

「レイドの人数は130人を超える予定です」

悠早はその数字に思わず息を呑む。

仮想世界でこれまで組織された中で最大規模のレイド ボス討伐などの大集団 は、過去2回実施されたM A M B Mであり、全モンスター中最強の『The W . O . R . L . D』討伐である。その時には、世界中のランク100以上のプレーヤー540名、50P Tからなる前代未聞の規模のレイドが編成された。この規模がすごいのか、この規模でも戦力的にギリギリだったと言う『The W . O . R . L . D』が恐ろしいのかは判断に悩む所である。

それから見れば、小規模のように見えるが難易度から見ると明らかに過剰である。

しかもその規模ともなれば、日本国内の上位プレーヤーをほぼ根こそぎ動員することになる。

「随分と大規模に……」

メイリアは「クリと頷く。

彼女の表情はどうにも冴えず、何かを口に出すのを躊躇っているように見える。

「タイミングと当たり所が悪ければ……即死しかねませんから。どうしてもゲーム内よりも多めにバツファを見ないと、ですね」

「そうですよね…………」

「ええ……、私もこの規模のレイドの指揮を取ったことがないので……」

「聖会のあの人頼むくらいしか?」

「それが無難だと思います」

メイリアはいけ好かない軽薄な男の顔を思い浮かべる。

あんな男がどうして4大クラランの一角を占める通称『聖会』こと

『アスカリ亞聖会』の盟主ギルドのギルマス ギルドマスターが務まるのか不思議で仕方がなかつた。もつとも、ギルマスなどと言うのは凡そその場合は盟主ギルドをまとめる為の単なるお飾りでしかなく、クランの実務的な部分はその他の人間が取り仕切るのが常である。

それだけ回りに優秀な、人間的に良く出来た面々が揃つているとも言える。

三猫の面々は大規模レイドを指揮した経験はない。

あるのは、教会監督官権限を使用した中華系業者等の討伐作戦の企画程度でしかない。

それも、あくまでも企画までであつて、具体的な編成や実践指揮は大手ギルドに丸投げしていたと言うのが実情である。彼らを直接指揮するのも不可能ではなかつただろうが、何から何まで経験が物を言う世界であり、まるで勝手が違う。かと言つて、大手クラン・アライアンス間の戦争行動ともMBM討伐は異なる。遙かに秩序だつて、統制のとれた行動が必要である。

実際のところは、MBM討伐を指揮できる人間は随分と限られる。メイリアもレティーシャもMBM戦などは、大イベントを除けば身内での経験しかない。

大抵の場合は、その身内だけでどうにかなつてしまつていたのだが。

そのお陰で『善きに計らえ』以外の指揮らしい指揮もなかつた。

「今日は、三猫が主力で大同盟の協力を得る形ですね……それ自体は何時ものことですが

「他の面々は?」

「コネがありませんから……あつた所で、何を吹つ掛けられるか解つたもではないですね」

「…………まあ、それもわかりますけど」

この状況だからこそ、多くの上位プレーヤーの力を借りたいという気持ちは勿論あった。

しかし、同時にある程度は顔の知れた面子での討伐のほうが連携が取りやすくなるとも言えるのが中々に難しい所だった。それ以上に、ある程度力関係、役割分担のはつきりしている大同盟こと『イルネス大同盟』だけの方が指揮の一本化も容易だつた。

ここで、他のクラシやアライアンスを巻き込めば、最悪主導権争いが起きる可能性もある。

もう一つに、ドロップアイテムの問題もある。

モンスターがこの世界でも素材などをドロップするのは既に広く知られている。

それがM A M B MのドロップやM V Pアイテムともなれば、優秀な装備や材料であることが期待できる。

そう言つたゴタゴタはとりあえずは避けたい所である。

「それと申し訳ないですが、東京近郊に居住している補佐官は強制参加です……」「一リや、イリュちゃんにも参加してもらいます」「……やっぱりそうですよね？」

悠早はやはりうかと溜め息が漏れる。

予想していたことだつたが、実際に言われてみると気が重くて仕方がない。

「身内に甘いと言わると、尾を引きそ�ですので……純粋に『支援』としてなので、まだ安全だと思います」

「仕方がないですね……イヤですけど」「すいません……」

メイリアが深々と頭を下げる。

「メイさん、あの……ですね」

「謝のべりこしか出来ませんから……」

そう言われてしまつと、悠早として返す言葉を思いつかない。

ここで『気にしないでください』などと言つ訳にも行かず、ここで文句を言つほど事情を判つていかないわけでもない。

「あとは……私は、前に回るのと、W.O.Yはコーリカイリュちゃんかどちらかに託します」

「W.O.Yですか……」

「高性能装備を遊ばせておく余裕はありませんからね?」

悠早のスキル値的には装備するのに問題はない。

ただ、神器級の武器と言つのじや往々にして、武器が使用者を選ぶと言われる。それはこのメイリアのW.O.Yは勿論であるが、レイシャのネメセイアや氷の魔女の『The Wand of Aria』なども同様であった。それらの武器の一群は所有者以外が使用すると、本来の性能を發揮できない。それでも、隔絶した性能を出せるが故に神器なのである。

悠差にとってW.O.Yは余りにも『重い』のである。
あれは暴れ馬の類いだと彼は思つ。

武器に振り回されるような奇妙な感覚をよく覚えてこむ。

「ただ……」

「?」

メイリアは深い溜め息を吐く。

その深刻な表情に、悠早は身構えてしまつ。

「アリアちゃんが参加できそうにないんですよね……困ったことと

「アリア様がですか」

「お陰でごく戦力ダウンなんです」

悠早は氷の魔女の戦闘を間近で見たことはない。

様々な噂を聞いてはいたが、どれも背ヒレ尾ヒレが付いているようで、メイリアやレティーシャなどはそれを聞くたびに大笑いしていた記憶がある。それでも、そのうちの幾つかは事実であつたらしく、複雑な表情で苦笑いしていたのも思い出す。

しかし、その姿は何度となく見かけたことはあった。

箱入り娘と言うのがぴたり当てはまる、黒髪の旧華族令嬢。特注品と思われる鮮やかな和服姿が、ファンタジー世界に不思議と溶け込んでいた。

「ずっと音信不通なんですっけ？」

「ええ……何処でどうしているのか気になります」

イグドラシルの現出が始まつた先週土曜日以来、氷の魔女との連絡はとれていない。

メッセンジャー・やメールなどに対しても返信が一切無く、近況が全く掴めていない有様である。

仲が特に良かつたレティーシャにすら同様であるという。

「どうにしても……」

彼女が聞いた限りではタイムリミットはそれほど遠くはない。

それはレティーシャの大先輩であり、TWの開発者であるらしい西澤という男が語ったと言つ。

それによると、今現在SGRはゲーム内で言つたところの『世界の狭間』に存在しているらしく、そこで力を蓄えている状況ではないかと言つところらしい。ゲーム内では『表世界』は『狭間』を

通して『イグドラシル界』と呼ばれる場所へと繋がっていた。そして、イグドラシル界へと繋がる『門』を守護していたのがMAMB Mであった。

そこから化物が現実世界へ出てくるまでのコリシートが遅くても一ヶ月半ばくらいであるそうだ。

そして、表世界である『現実』から狭間へと繋がる『門』も既に開いているらしい。

コリシートとこののはこの門をSUGARが自由に行き来できるようになるまでの時間だと誓つ。

彼と国などの必死の努力でログの解析が進んだことで、判った成果であるらしい。

「遅くとも来年、1月10日までの討伐を目標としていますが……門を探さないといけません」

「そうなりますよね」

その前段階として取り巻きであるSUGARと門の発見である。可能であれば、その上でSUGARを討伐し取り巻きの数を減らすことができれば尚良かつた。

要するに上位プレーヤーで追いつかなければ話である。

「ええ、とにかくあれがこの世界に出てくる前に決着を付けないと

……」

悠早はただ小さく頷く。

「でも、終わったら国から報酬が出るやつですか

「はあ……」

「このへりこ、ですね」

メイリアは左手の指を3つ立ててみせる。

3万では安すぎるが、30万でもまだ危険性を考えると随分と安いと言わざるを得ないと悠早は思考する。しかし一人頭300万はありませんないだろうとも思える。その次に、これで死亡した場合は保険金やらのお金は貰えるのだろうか、などと現実的な方向へ思考が傾いていく。

しかし、SSGRの危険性から見ると成功報酬300万でも安いように思える。

生きて帰ることが出来れば、暫くは不自由のない生活ができるのだが。

それ以前に、そもそも既に国と話が付いていると言つ状況が少々意外でもあった。

政府は未だに事実上の大規模武装組織であるクランやアライアンスに対して有効な手立てや懐柔策が示せずに居る。30ミリ以下の砲ではまともなダメージの通らないモンスターに対抗するのが困難なのはまだ仕方がない。実際にはそれどころか、この一大事に、国際はと言つと無責任な罵倒大会を繰り広げ、内閣不信任だなんだと意味不明な政争を繰り広げている。

金を積んででも懐柔するべきだと叫ぶ者も多いがそれも中々に難しい。

あの既に支配者気取りの盟主達が、たかが端金で国に大人しく従うとは、彼には到底思えない。

しかし彼らを敵に回して討伐するのも困難であった。

どちらにしても、そんなアホ共の下で働かされている警察や消防、自衛隊には頭が下がる。

「あの……メイさん、あまり言いたくはないんですが。それ、割りに合わなく無いですか？」

メイリアはただ、肩をすくめて苦笑いするしかなかつた。
当面の目標であるG G R討伐日程が確定するのは翌26日のこと
だつた。

04（後書き）

次からGGR討伐の予定、と言つても余興ですが。

あと數十分もすれば日が変わる。

間違いなく氷点下と言つ凍える寒さの中で、総勢13名が思い思
いに一時を過ごしている。

白を基調としたゲームの聖職者らしい格好を中心に、皮鎧を身に
付け腰に鞘を下げた剣士、チャイナドレスのような物の上に全身を
すっぽりと覆うローブを纏つた魔法使い風の女。その様子はさながら
コスプレパーティーか何かのようであり、ここがこの一帯を管轄
とする警察署のロビーや、駐車場であつたりすると言つ事実が奇妙
な違和感を感じさせる。

三猫の面々がこれだけ揃つのはいつぶりだろつと悠早は思つ。

そもそも彼の所属するギルド『Cat's Living』のメ
ンバーですら、殆ど顔を会わせる事がなかつた。精々が四半期に一
度だけ、集会的な催しで全員が揃つことがあつたが、それだけだつ
た。そのまどまりの無さゆえにメンバーの平均的な強さはトップク
ラスだが、集団として見るとバランスも悪く異常に弱い『はず』等
と言われる。そう言つて喧嘩をふっかけ、数倍の戦力で返り討ちに
あつた『聖会』の例もあるのだが……。

彼が割りと頻繁に顔を会わせる人物となると、メイリア、レティ
ーシャ、カイヤ、そして今、抱きついて頬ずりしている、天敵のア
ゴくらいの物だろう。

本日の主催者のメイリアはと言つて挨拶回りをしている。

悠早もそんな中で、Bishōpの戦闘装束に身を包んでいる。
白と瑠璃色を基調とした格調高い印象を与えるようしていて、動き
やすさを重視した太腿の付け根辺りまでの左右のスリットが随分と
際どい。そしてその隙間から、白のオーバーコートとガーダーベル
トが覗いている。激しく動きまわるような戦闘行動を取れば、服装

の重力演算が制御　と言つ名の制限　　それでいた仮想世界ならともかく、現実ではパンチラなんてものではどうみても済まない。

防御力が皆無のように見えて、魔法防御は勿論だが、付与魔法効果で鉄や鋼製の下手な金属鎧も真っ青なほどに物理防御も強化されている。もちろんそれだけでなく、重要部位には革製の軽鎧が裏側に仕込まれ、防御をより厳重にしている。

雑魚に挑むならともかく、相手がGGRである以上は身に付けていなければ危険過ぎる。

こんなデザインそのまま現実に持つてこなしても良いのだと彼はボヤく。

「やめて、離れて、ああもう……」

瑠璃色がBishopを象徴するなら、Dominicansを象徴するのは『緋色』である。

背後から彼を羽交い絞めにしている彼女は随分と楽しげである。ライトブラウンに染めたロングヘアは緩やかなウェーブを描き、明らかに手間暇のかかっている化粧が目鼻立ちのはつきりした美人と言ひ印象をより強めている。160半ばより少し高い身長と、スラリと伸びた長い足、胸こそ小さいものの正規の3次元としては整整のとれたモデル体型。

彼女が『モデルやつてます』と言えば、凡ての人は『なるほど』と納得するだろう。

情報が正しければ年齢的には20代半ばだと聞つのに、その姿は随分と若々しく見える。

彼女、キャラ名は『アロ』が言つたのは、仮想世界の容姿こそ貰えなかつたが、7、8歳分くらい若返つたらしい。

本人はそれを『残念賞』にしては豪華だねと笑っていた。

「もう、ほんとメーたんもそうだけど、このまま襲いかかりたくないに可愛い、肌もぷにぷに、真っ白でスベスベ、お姉さん羨ましいわ」

「ヒツ……ー？」

もう襲い掛かってるじゃないかと言つツツコミは野暮である。

彼は、肌に触れる息や首筋を撫でる髪がくすぐったくて仕方がなかつた。

右手に握った神器『The Wand of Yggdrasil』で頭部を引っぱたきたい感情に襲われていたが、流石に自分の持ち物ではない神器でそれをやるのもどうかと必死に堪える。そんな使い方をしてもマイリアは何も言わないだろうが、どちらかと言えば杖の機嫌を損ねたくないのである。

神器を持つプレーヤーは揃いも揃つて『神器には意思がある』と語る。

その意味は悠早には解らないが、要するに大切に扱えということであるらしい。

そんな様子がアコの被虐心を刺激しているのだが、解つてもどうにもならない。

その様子は昭和の世の酔っ払いセクハラオヤジにしか見えない。そんな二人の様子を、男性陣は苦笑いしながら時折チラ見しては視線を逸らし、女性陣は『またやつてる』とでも言いたげな生温い視線で見守っている。マイリアですらも出来れば関わりたくないようで、知らんぷりを決め込んでしまつているのが見える。端の方では『何故か』付いてきた結子が合掌している。

「怯えなくても大丈夫、優しくしてあげる、からね？」

「あなたが言うと冗談に聞こえないんですけどー！」

「あたしが冗談なんて言うわけないじゃない？」

親指をピンと立ててのドヤ顔に、逆に氣力が抜けていくのを感じる。

「なんでそんな得意げなんですか……」

「かあいい子は別腹?」

「あんた旦那持ちでしょ!？」

悠早は腹の底から叫ぶ。

彼女は三猫でも珍しい既婚者であり、旦那共々TWPプレーヤーである。

そして、バイ・セクシャルと呼ばれる人種であり、特に可愛い女の子が大好物、最近の趣味はエロゲと言う少々困った人種でもあった。そんな彼女にとつては『宗教上の理由』でストライクゾーンからは少々外れていたが、それでも今では見た目は美少女な悠早やメイリアは美味しい餌であった。

しかし、遊ぶには比較的ツンと澄ましているメイリアは彼女から見るとあまり面白くはない。

『反応の良さの差で悠早が仮想世界以来ずっと犠牲になることが多い。』

「大丈夫、女の子相手なら多分浮気にはならないからね!」

悠早はどうしてこんな人間が『弁護士』なんてやつてるんだろうとつづく思う。

それ以上に、いくら5年以上もやつているとは言え、最近では月に数日しかログイン出来ないような環境でプレーしている割に、何故かランク1-10の大台にも達しているのが不思議で仕方がない。巷の噂ではレティーシャ並にプレー時間が取れれば、互角のところまで行くのではないかとモッパラの評判の彼女。

「ランクの差はほぼ所有している武器と防具の性能差だけとも言わ
れる。
世の中いろいろ間違つてると周囲は皆思つ。

「旦那さん泣きますよ……？」

「もう諦めてるみたいだからダイジョーブ！」

周囲の視線が一斉に『何も大丈夫じゃない』と訴えかけているが
彼女は気にしてない。

これで、夫婦関係は良好と言つのだから、なんとも心の広い旦那
さんだと誰もがしみじみと思つ。

「何が大丈夫なのか聞いたら負けですね……？」

「もち

彼女の辞書にも大概大概『反省』とか『自省』とか『自重』とか
言つ類の言葉はない。

仮想世界、いやゲームとしてのＴＷにおける最上位プレーヤーは
『キチガイではない』が『いろいろ間違つている』、しかし不思議
と『何故かそれなりにまともに社会生活を送つている』、そんな人
間の集まりだと、そんな風に特に日本では評される。

基本的にＴＷの上位にいるのは一言で表現すれば『天才』なので
ある。

それがないプレーヤーは精々がランク９０半ばまでしか上がれな
い。

それが通説であった。

そういう意味では、一般人の悠早は限界線に近いところまで既に
到達している。

「ああ、もう……『りたんはこれだから、やめられない、ダ・イ・

ス・キ!」

悠早を抱きしめる腕に力が籠る。

不意に頬から肌の感触が離れたかと思つと、すぐに全身に電流が流れたような衝撃が走る。

不意打ちに、思わず女の子らしい可愛い悲鳴が上がる。

「ちょっとま、噛むな！」

すぐ横には、美味しそうに耳朵を甘噛みしているアコの顔がある。舌が触手のように蠢き、弱いポイントを探り当てては重点的に攻めてくる。

「誰か止めてー!？」

逃げ出そうにも『Sister』値的にどう考へても勝ち田はない。

いつもの事だなど、生温いやら苦笑いやら呆れ顔やら様々な表情を向けてくる討伐隊の面々は勿論であるが、詰めている警察官も苦い表情で知らぬ顔をしている。ここに比較的常識人のレティーシャ辺りでも居れば止めに入ってくれるのだが、今日はその頼みの綱もプロジェクト現場に軟禁状態が続いていて、ここには居ない。

むしろ彼女が居ないからこそこの状況であるとも言える。

メイリアは『反応せずに澄ましてればいいんです』と言つがそれが出来れば苦労はしない。

アコの手が、悠早のしつかり自己主張している胸を下から鷲掴みにする。

防御力の高いインナーやら下着やらのお陰で、その感触はダイレクトには伝わらない。

彼女のコメカミがピクリと動く。

「と言うか、この胸ホント腹立つんですけどー!?」「知らんわ……って、揉むな、バカ!!」

彼女は美少女好きであるが、それ以上に貧乳好きである。むしろコンプレックスとも言つ。

悠早は手袋位は持つてくるべきだつたと後悔していた。

何時ものようにサイズの合つていらないPコートを戦闘装束の上から羽織つて居るが、それでも寒いものは寒い。それ以上に肌に突き刺さるような冷たさが、防御力的に心許ない足を襲つていた。特に剥き出しの太腿などはすでに感覚が無くなつてきていたように感じられる。

つぐづく膝上丈スカートの女子高生の感性が信じられなくなる。一体何が彼女たちをああさせるのだろうかと。

仮想世界では冬場も戦闘装束だけで、それほど寒さを感じなかつた。

それも現実に反映されていて防寒効果くらいはあるだろうと踏んでいたが、その読みは余りにも甘かつたと言わざるを得ない。

残念なことにそんな素晴らしい効果は存在しない。

多少暖かい普通の服であった。

そして、夏場はどうするんだろうかと頭を悩ませる。

内側に防御を仕込んだこの衣装は、間違いなく夏場は地獄だろう。

それはメイリアも大差ない様子で、小刻みに震えているのが解る。それに比べるとリアル女性陣の一人、結子とアコは慣れているのか随分と足取りがしつかりとしている。身体の構造的には大差はない筈であるのに、この差は何だろうと悠早は考え込む。

それでも警戒の手を緩めるわけにはいかない。

今日は13人を3人づつ4PTに分けての索敵となつていて。

本来は参加予定の無かつた結子が 何故か来たがつたので居たために、悠早のいるPTだけは4人の編成である。悠早が支援、メイリアが遊撃手、レティーシャ等と同じ順戦闘型聖職者、Dom incansの殴りプリであるアコが前衛を務める。

他のPTの編成も似たようなもので、メイリアの部分が魔法職に変わる程度である。

基本的に純粹な前衛、つまりタンク型のプレーヤーが『居ない』、少ないのでなく皆無という三猫の問題点が浮き彫りになる編成であつた。聖職者系と魔法職、そして魔法剣士が全体の九割以上を占め、残りも『職などが中心で『騎士』系のプレーヤーが居ない。

「いませんね……」

「何処だらうねえ……怖じ氣づいて出でこないとか？」

今どころGGRの気配はかかるない。

結子の索敵能力は大したことがないので 彼女曰く、ちまつこの事は苦手 3人で全周を3分割して凡そ120度づつを受け持つていて。

システム外スキル『魔力探査』はレーダーのような感覚で、使い方を場合に応じて変化させることができる。例えばソロプレー時は、全周に向けて索敵の網を巡らすようにして使用する。この場合は探知距離は短くなつてしまつ。もう一つが要するに指向性を持たせることで、索敵範囲を絞る代わりに、遠距離での索敵を行うと言ふもの。

人によつては後者を応用して、回転式レーダーのようにする事で全周カバーをしているプレーヤーもいる。その場合は1周の走査に数十秒かかるので情報の精度では劣る。

時と場合に応じて使い分けるのが重要であった。

そして、今は後者を使用し索敵範囲の広いメイリアとアコが前方警戒、悠早が後方警戒を担当している。

「姉様……出ると思います?」

「出でくれないと困る……メイさん、ここ数日は連続で出現しているんですよね?」

「はい、警察の話ではそういうことです」

続けて小声で、犠牲者が既に17名にも達していると呟く。

それが多いのか少ないのかは判らないが、1体による被害としてはそれなりに大きいらしい。それでも、仮想世界での設定が踏襲されているようで、きつちり戸締まりした建物の中に居れば追撃してこないために解つていれば安全である。そういう意味で可愛そうだったと言えるのは深夜のコンビニ店員だった。自動ドアが災いしてGGRの店内侵入を許してしまい、大学生のアルバイトが死亡する事例が発生していた。

今は、警察が深夜の出歩きに注意を呼び掛けているお陰か、人の気配は全くなかった。

これがSSGRであればこうはいかない。

あれはあらゆる障害物を切り裂き、破壊して迫撃していく。

その時、アコは正面の一点を凝視したまま肩を竦める。

前方50メートルほど先、街頭の灯りが2つの物体を闇夜に薄つすらと浮かび上がらせている。

その周囲だけ雨に濡れたように地面の色が心なしか違う。

「さて、めーたん?」

「……………あが、18人目…………ですか」

悠早や結子には犠牲者の切断遺体ははつきりとは見えない。

しかし、前を行く二人はアコ開発の魔力直接制御系オリジナルによつてその姿を捉えていた。

それまでの被害者と同様に、肩から脇腹にかけて斜めに一刀両断された惨殺死体。

あまりに鮮やかな切り口に血は滲むことなく、切断された血管から流れだす。

「姉様……」

「……うん、まあ……うん、そつっぽいのかな?」

彼は神器『W.O.Y』を持つ右手を強く握る。

はつきりとは見えないが、確かにそこに遺体が転がっているということだけは辛うじて掴めてくる。1週間前の凄惨な現場の原型すら留めていないような、そんな遺体に比べれば随分マシな死に方であるかもしれない。

あの人はすぐに死ぬことが出来ただろうか、とそんな事に思いを巡らす。

普通に暫くの間は意識があつたのかも知れない、それが途方もなく恐ろしかった。

下手をすればあれと同じ状態になる。

「何で言うか、ネジが数本飛んでそうな、すごい頭の弱そうな女だねえ……お水?」

そんな中につけて、彼女一人は何も変わらない。

振り下ろされる半ば実態のない大鎌を、悠早の瞳ははつきりと捉えていた。

上空から舞い降りる、闇に溶けこむような端の破れたロープに全身を包んだ蒼い影、それ自体にも影はなく、それは世界に影を生み出さない。故に、ロープは光も影もない純粹な闇。まるでホログラムか何かで映像を投影しているような現実感のなさ。ゲームTWにおいて特殊属性として『靈属性』を持つモンスターを示す独特のエフェクトであった。

それは現実においても寸分の歪みなく再現されている。

そしてロープの奥から覗く本体は、蒼色の靄。

顔の部分で輝く一対の瞳だけが強い輝きを放っている。

「YY、SS、BR5、AA、SB!-!」

メイリアの簡潔な指示が飛ぶ。

不測の事態で重要なことは、いかに素早く思考回路を切り替えられるかである。

死神との距離、刃の描く軌道の予測、それらを元に最善の回避方法を導きだそうとする。

数十倍にも引き伸ばされた静止しているかのような時間、それが走馬灯とでも言つべきものなのか、それとも高速思考による產物なのかは解らない。仮想世界におけるシビアな高速戦闘を繰り返している中で会得する者も多いという。これは、ある程度意図的に制御することさえ出来るようになれば、現実世界ですら効果を發揮する。瞬間的な判断を要求されるような場面であればその効果は絶大と言える。

人によつてはそれを現実世界の『試験』などで使用していると言つ。

通称、システム外スキル『超高速思考』である。

これが制御できればTWでは一人前であり、上位プレーヤーへの登竜門であった。

もつと言えば、ランク90を超えるための壁である。

それが彼に十分な思考の機会を与える。

彼は左、右と続けて2歩後退する。

すぐ後ろには結子が居るために、必要以上の後退はできない。

少なくとも刃に切り裂かれるようなことは無くなっている。

それでも鎌の背により、胸部から腹部にかけて大きなダメージが加わることは間違いない。

それと同時に杖を中段に構え、十分な魔力を込める。

(理論上はこれでいける、はず……！…)

神器W.O.Yが魔力を吸収し、全体に青い光を纏う。
大鎌との交差ポイントに向けて『Singe-Spike』の動作を起こす、ただし正常ではない方法で。

通常は踏み出しながら突き出す動作で発動することが規定されている『Singe-Spike』等の突き系攻撃を、引きながら突き出す形式で発動させる技。この辺りも全て、姉弟子と共にメイリアとレティーシャから徹底的に仕込まれた自衛のためのモノ。基本的に前方へ出ることのない支援であつても、『最低限の自衛能力』くらいは身につけておけと言つ三猫の方針である。

隙あらば殴りかかる姉弟子と違い、あまり近接戦闘を好まない悠早は余り使う機会はなかつた。

それでもここに来て何が幸いするかわからないと、彼はつづく思つ。

面と点で2つの武器が衝突する。

金属同士の甲高い衝突音でもなければ、物と物がぶつかるような鈍い音でもない。

重低音、『ジジジ』と叫ぶようなノイズのような奇妙な効果音が一帯に響く。

(いける)

大鎌の軌道が下方向へと逸れる。

勢い余つて地面へと衝突した一撃は、豪快にアスファルトの路面を抉る。

何処からか発生した膨大な熱はアスファルトすらも溶かし、その断面が紅く輝いている。

その非常識な威力にマイリアすらも唖然としている。

「ユリたん、完璧！！」

仮想世界において GGR や SSGR の討伐が面倒くさいと言われた理由はもう一つあった。

それらの持つ大鎌は言わば、『実体』が存在しない武器である。柄から刀身まで全てが魔力の塊であり、ビームサーベルのようなイメージである。

そのため通常の武器と同様に武器同士をぶつけで攻撃を防ぐことができず、特殊効果のない武器や盾で迎撃した場合には、死神の大鎌は武器をすり抜けてしまう。これを受け止められるのは魔力のみによって作られた同種の武器か、もしくは武器を魔力で覆いコーティングしたモノに限られる。前者は超レア装備である上に MP 消費量が多く実用的でなく、後者の効果のある補助魔法は消費 MP も大きく、システム外スキルを持つとしても MP 面は厳しい。

やつらとの戦闘は言わば『MP』の総量が重要であるといつても過言ではない。

それも聖職者、魔法使いの多い三猫ならば余裕がある。

悠早は数歩後退し、結子の腕を掴む。

彼は、WAのような感覚と勘で制御する系統の技は大の苦手だった。

苦手なWAを使用しながら路面を蹴ると、メイリアの指示に従つて跳躍を以つて後退する。

「あいかわらず、マヌケだね！？」

入れ替わるように、アコが横払いの重い一撃をGGRへ叩き込む姿が映る。

その表情はやけに愉しげである。
大攻撃の空振りによつて、大勢を立て直す前の攻撃による効果は絶大であった。

ガラ空きの胸元へと彼女の体躯に似つかわしくない、全長2メートル近くにも達する巨大な鎧が吸い込まれていく。古代金属ミスリルを鍛えたランク『S-』、武器分類『Mallet of the Master』、和名『達人の鎧』に属する大型純器。打撃攻撃に特化し、相手を叩き潰すことだけを目的とした力の象徴。

ただの1撃で、GGRが後方へと数メートル吹き飛ばされる。

他のゲームであればボス属性を有しているモンスターにはノックバックを含め、状態異常が効かないことも多いが、TWにはそんな仕様は存在しない。どれだけ巨大であつても、十分な威力を持つた攻撃を与えればそれも可能であった。

しかし死神は表情ひとつ変えない。

「イタつ……」

「…………

悠早が着地の制御に失敗するのも何時ものことだった。

そしてシステム外スキルの弊害である、軽度の頭痛に顔を齧める。

優希は索敵の網から『あれ』が漏れたことに対して、それほど驚きはなかった。

標準スキルよりも遙かに優秀で使い勝手が良いと言われる、システム外スキル『魔力探査』も決して完璧ではない。それへの対抗手段として標準スキル『隠密』があり、システム外スキル『ステルス』が存在している。

魔力探査の技術が発達すれば、それに歩調を合わせるようにステルスも発展してきた。

それは完全にイタチごっこであり、その競争の中で魔力探査とステルスが標準スキルを上回る性能を獲得したといつても過言ではない。結局のところ、どちらが上回るかはプレーヤーの技量一つであった。

それは対モンスターに於いても変わらない。

特に特殊属性として『靈属性』を持つモノの探知は困難を極め、標準スキル『索敵』ではマスターしてやつと、3割検知できればいい所とすら言われていた。魔力探査でもやはり困難なことには変わりない。

まして最強雑魚であるあれを検知できるとは、そもそも思つていなかつた。

屋根の上から現れ、ユーリが狙われた事にも『やはり』と言つ感想しかなかつた。

彼の思考は既にそこからは離れている。

(問題は……みんなが合流するまで何分かかるか……)

たっぷり『数時間』もかければGGRのHPを削り切ることは決して不可能ではない。

それは余りにも非現実的にすぎる上に、何よりも集中力が途切れたその瞬間が『死』であつてもおかしくない。通常ならば数分、もしくは10分程度を限度にして交代しながら戦闘を継続するのがTWにおいての常識である。

普通の人間がTWの高速戦闘を全力で行える時間がそのくらいだと言われている。

システム外スキル『超高速思考』は脳への負担が余りにも大きすぎるのである。

極々稀にいる、数時間に渡つて持続可能な一部のプレーヤーが『化物』と呼ばれるのである。

その代表例が『レディーシャ』である。

アコとのペアで主従を適時交代すれば、それなりに持たせることは可能ではあった。

こう言つ時にレディーシャと言う人間を彼は心底恐ろしいと思つのである。

(相変わらず……ダメージが通つている気がしない)

それ以上に、『靈属性』持ち特有のイヤラシさが彼は嫌いだつた。眼の前の死神で実体があるのはロープだけであり、それすらも薄っぺらい布切れにすぎない。

両手で掲げた大鎌も、本体すらも実体は存在しない。

干したシーツを叩いていふような、打撃が効いていのか効いていないのかすらもはつきりとは判らない奇妙な感覚。雑魚でありながらMBM級の莫大なHPと相まって、終りが見えない戦闘を続け

ているように感じられて仕方がなかつた。

横目に見るアコも似たような感想なのか、不満気に口元を歪めている。

特にパワー型の戦闘職にとつては『靈属性』は鬼門であった。

目の前の死神のような対『悪魔』の専門家である筈のアコですが、匙を投げたくなつてゐる。

優希は心底、これを設定した開発者は性格が悪いと毒づきたくなる。

「メイたん、よう！」

数度目の強攻撃のヒットを合図にアコが左後方へと下がる。

しかし、優希は彼女と違つて積極的に攻勢には出ない。

根本的な打撃力不足に加えて、攻勢に出るようなテクニック構成を組んでいないことが大きい。

その辺りは、やはりそれなりに『戦闘も可能』とは言つても、所詮はそれなりである。あくまでも、自身の身に振りかかる火の粉をはうためである。そして、魔法職を含めて接近されると脆い後衛を一時的に護衛し、戦闘の専門家に引き渡す時間を稼ぐためのモノでしかない。

基本は相手の攻撃を待ち受け、それを受け止め、受け流し、必要に応じて反撃を加える形になる。

攻勢に出るために間断なくコンボを繋げていくのに十分なテクニックの種類が必要である。

それが出来なければ攻撃の度にディレイが生じ、反撃の隙を与えてしまつ。

「…………」

彼女の言葉に、呪文を口ずさみながら「クリと小さく頷いて応える。

呪文の詠唱中に余計な言葉を発すれば、詠唱は中断されてしまう。特に、今の優希のように多数の呪文を同時並行詠唱 ゲーム内容語では多重詠唱、もしくはMC (Multicasting) と呼ぶ をしている場合には特に宜しくない。MCは多数の呪文を重ねて詠唱することで『全体として』詠唱を短縮できるが、それは詠唱失敗時のリスクも増大する事を意味する。そして失敗すれば、そこまでの詠唱にともなつて消費されたMPは無駄となってしまう。リスクもそれなりに大きい代わりに見返りも大きい。

そんな優希の事など知るわけもなく、死神が再度の突撃を開始する。

対して、彼は数歩足を進め、経験的に最も適切と思われる距離を確保する。

ある程度攻撃の型の自由度の高い『剣』や『槍』などに比べると、大鎌というものは武器としては決して扱いややすいものではない。振りかぶり、振り下ろすという動作そのものに無駄が多く、相手に攻撃の隙を容易に与えてしまう。そして、刀身の背による打撃攻撃を除けば、刃のうち側に相手を收めない限りは、斬撃系統のダメージは与えられない。

基本的には、刃の内側へ入らなければ1撃で大ダメージを負うようないことはない。

適切な距離さえ取つてさえいれば、ほぼノーダメージで切り抜けることは容易だった。

(ユーリ、いいタイミング)

優希の杖、『Staff of Elnia』ことSOEに、右手に剣を掲げた小さな天使が舞い降りる。

それは、コーリから攻撃支援スキル『Imposition Manus』の付』。

効果は大きいわけではないが、武器の基礎攻撃力を増加させる。基本的に高威力の攻撃のない職業にとつては、僅かばかりでもダメージが底上げされる意味は大きい。何よりも、武器そのものの攻撃力を底上げするため、他の支援効果や、属性・種族効果などを含めた攻撃力増加効果が全てキッチリと乗るという意味は大きい。

難点は、効果の持続する攻撃回数が最大で20回と少ないことである。

それも、上位テクニックであればあるほど1発での回数の消費が多くなる。

その攻撃も空振りし、優希の身体から数十センチ離れた空中を大鎌が切り裂いていく。

横の家のブロック塀と、鋼鉄製の柵を両断してもまだ攻撃は止まらない。

無防備な横つ腹を惜しげもなく晒すGGRに対して、優希はWAによる超短距離加速も加えた反撃技『Counterspear』を起動する。敵からの攻撃を完全にノーダメージでの回避に成功した時にのみ使用することが出来る。低威力ではあるが、この技を呼び水として守勢から攻勢へと移る、つまりコンボの起点として利用をされることが多い。

彼はこの1撃に、メイリアとして打ち得る最大級の攻撃力を込む。

優希の杖のうちの1本である『SOE』は武器の分類は『Mig htystaff』である。

その共通性質は『MP』を『攻撃力』に変換する。特に、その中でも最上位に当たる『SOE』の場合には、最大で『40』のMP

を追加で消費することで、ダメージを最大で『200%』にまで増加させる。勿論、テクニックそのものを発動させるためのMPは消費する。

正直なところ、杖による攻撃テクニックそのものが強力ではない。この杖の最大威力で打った時に、それで漸く他の戦闘クラス並みくらいの攻撃力になる。そういう意味ではMP効率が異常に悪い武器であると言えた。

要するに『ネタ武器』の一種である。

それでも他のクラスに比べて圧倒的にMPの多い『Bisharp』ならばそれなりに使える。
それでもやはりネタ武器の域を出るのはない。

「…………！」

表情のない死神の顔が歪んだように見える。

強い輝きを放つ穂先が脇腹へと、何の障害も受けることなく吸い込まれていく。

続いて、ドンと言う鈍い爆発音。

命中箇所を中心にして、空気の震えが広がっていく。

風などという生優しいものではなく、空気の振動そのもの、衝撃波である。

優希がメイリアではなく、彼のもう一つのキャラクターである殴りプリのために生み出したオリジナルの攻撃魔法。風属性を応用し、衝撃波を生み出すと言う効果のそれは、単体で使用した場合にはチ強い風魔法にすぎない。

その真価は物理攻撃に乗せて、特に突き技による急所狙いに乗せることで發揮される。

硬い装甲を有するモンスターに対して、急所経由で衝撃波を発生させ内部へと浸透、大ダメージを与えることを主目的とする。2年前の大規模アップデート以降は、アンデッドや悪魔に対して聖属性

ダメージを全身へ浸透させる目的でも使用していた。

眼の前の死神も属性が『魔』であるため、この一撃は絶大な効果が見込めた。

難点は最大威力となるとS.O.Eの効果も含めて、1撃で100以上のMPを消費することだらう。

数メートル吹き飛ばされた死神がヨロヨロと後ずさるのが見える。恨めしく睨みつけてくる瞳の輝きがより鋭く、強く変化しているのが明らかであった。

「さあて、そろそろかな……」

「…………」

死神の大鎌が溶けるようにして、その姿を変えていく。

刀身は柄に溶け込み、オールのような形状を経て新しい『剣』を形作っていく。

長さ1メートルを優に超える肉厚の片手直剣、波打った刃が特徴のそれは実体のある武器であれば『フランベルジュ』である。大鎌の頃とは比べものにならないほどに密度の高い、蒼の輝きを放っている。

その余りの魔力密度の高さ故に、刀身からは魔力が零となつて溢れ落ちている。

それは血が滴つているようにしか見えない。

「残り9割とか先長いよねえ……マジメにやるかね」

アコが面倒くさそうに呟く。

最強雑魚、GGRがその真価を見せるのはここからであった。

06（後書き）

次か、次の次で3章終わり。
しかし戦闘シーンほんと難しいですね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926z/>

ネトゲウの世界よ、ようこそ！(仮題)

2012年1月14日18時53分発行